静岡福祉文化を考える会　２５周年記念調査研究活動事業

つながるご近所の再構築　決め手は一体何か

ご近所福祉その意識と実態検証報告書

静岡福祉文化を考える会

静岡福祉文化を考える会　２５周年記念　調査研究活動事業

つながるご近所の再構築　決め手は一体何か ご近所福祉その意識と実態検証報告書

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆　　目　　次　　☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

はじめに　２５年の福祉文化活動のプロセスから、改めて“ご近所福祉の構築”への思い　２Ｐ

第１章　調査の概要　３Ｐ

1. 調査実施意図
2. 調査方法と調査時点
3. 調査票の形式及び調査項目
4. 調査対象と調査票の配布
5. 調査実施機関
6. 調査協働
7. 回収状況

第２章　サンプル構成／基本属性　６Ｐ

１．性別　２．年齢別　３．結婚歴　４．職業別　５．居住形態別
６．居住歴別　７．地域別　８．地域形態別　９．家族構成別

第３章　調査結果　８Ｐ

1. 地域との関わりの意識
2. 地域との関わりの実態
3. 地域参加の動向
4. 地域環境
5. 提言（自由意見）

第４章　調査のまとめ　３９Ｐ

第５章　“静岡発　福祉文化の創造”と２５年間の調査研究活動　４５Ｐ

1.25年の歩みと調査研究活動の意義
2. 長寿者から見たご近所福祉に学ぶ
3.「若者発 ご近所福祉かるた」の誕生

第６章　資料編　６２Ｐ

1. 2020 年度 静岡福祉文化を考える会活動経過記録
2. 2020 年度 静岡福祉文化を考える会活動計画
3. 2021 年度 静岡福祉文化を考える会活動計画（案）
4. 調査実施要項及び調査票
5. 静岡福祉文化を考える会機関誌「OUR LIFE」
6. 静岡福祉文化を考える会活動掲載記事
7. 静岡福祉文化を考える会要覧
8. 静岡福祉文化を考える会規約

は　じ　め　に

２５年の福祉文化活動のプロセスから、改めて“近所福祉の構築”への思い

本会は、ここに、25年間の福祉文化実践活動を総括する時期を迎えました。

改めて、本会の誕生の原点を振り返りますと、平成7年度、日本福祉文化学会が重要な事業として位置付けている「現場セミナー」を静岡県で開催してほしい旨の要請を受け、県内の若年パワーの高校生から先輩市民まで総勢50名が1年かけて議論を積み重ね、セミナー実現にこぎつけたところから始まります。

阪神淡路大震災発生から1年後の3月30日・31日の2日間、浜松市（「浜松こども園」「プレスタワー」）において、全国各地から400名余の参加者を迎えて、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者と福祉文化」「障害者と福祉文化」で、県内外の事例を紹介し合いながら、地域性を踏まえた、地域づくりの重要性を福祉文化の視点で共有し合う4つの分科会と基調講演による「静岡発　みんなで語ろう福祉文化を21世紀の礎に一人間らしい豊かさをめざして、いま文化としての福祉を語る一」をテーマに、「日本福祉文化学会第11回現場セミナー」が開催されました。　セミナー終了直後、静岡県の地域性を活かし、身近な地域課題を世代や領域を超えて研究討議できる活動を立ち上げる呼びかけに、100名の賛同とともに、最終的に、62名の仲間の参画により、なんと、僅か6か月後の平成8年9月に、市民活動・志縁団体として「静岡福祉文化を考える会」が誕生しました。

本会は、「地方発福祉文化の創造」を追求し、それぞれの世代や領域で、静岡県の各地域の特性を生かして、「福祉文化」を共有化する市民活動集団、男性の積極的な参加、そして、あらゆる領域・分野からの参画は、異業種交流集団ともいえる特色を持っています。

結成当初から、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合型学習の理論と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」の3つの活動基調を基に、具体的には「啓発学習事業」（静岡発　福祉文化の創造をめざし県内各地の実践活動に学ぶ「地域総合型啓発学習」に取り組む）、「実践地区活動事業」（広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認する）、そして、本会が、25年間最も重要な活動として取り組んでいる「調査研究事業」（その時代の社会問題を検証する目的に県民の協力をもとに取り組み、その結果を県民と共に地域総合型学習し、課題解決に向けた議論を深め合う）の、3つの柱立てによる活動を展開しています。

コロナ禍の今、厳しい地域社会の動きとともに、災害問題をはじめ、長寿者・子どもの問題等にとどまらず、地域社会全体の個人志向化・希薄化に加えて、福祉コミュニティ組織運営そのもののあり方も複雑多様化した課題が浮き彫りになっています。　「無縁社会」とも「有縁社会」とも置き換えられている地域社会にあって　、本会では、これまで、多くの若者層とともに、「ご近所福祉」について、現地に学ぶ理論と実践による検証を重ねてまいりました。　誰もが安心して過ごせる地域ぐるみの居場所をもち、そこから生まれてくる「ご近所」により、世代を超えて語れる環境を創りだし「当たり前のことを当たり前にできる地域づくり」の課題があります。

令和2年度の本会活動テーマ「つながるご近所の再構築の決め手は一体何か　一ご近所福祉の復活―」（近助とは何かを探る）をもとに、「焼津福祉文化共創研究会」との協働により「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組みました。　このたび発行しました「報告書」がこれからの活動の一助になれば幸いです。

ここに、あらためて、本事業にご支援ご協力をいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

令和　3年2月14日

静岡福祉文化を考える会　代 表 平 田　厚

第１章　調査の概要

１．調査実施意図

「静岡福祉文化を考える会」では、この 24 年間「静岡発　福祉文化の創造」を目指した福祉文化実践活動の大きな柱立ての一つとして、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

これまでの２４年間の調査研究活動を振り返ってみると、

※平成　９年度　①「共働きに関する調査」
※平成 10 年度　②「私たちにとって、地域とは何かーその１－意識と実態調査」
※平成 11 年度　③「私たちにとって家族とはなにか調査」
※平成 12 年度　④「父親に関する調査」
※平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」
※平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
※平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」
※平成 16 年度　⑧「地域とはなにか―その２－意識と実態調査」
※平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
※平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
※平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
※平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」（静岡県共同募金会助成事業）
　　⑬「日常生活と福祉情報に関する調査」（静岡県委託事業）
※平成 21 年度　⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 22 年度　⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く　生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る調査」（静岡県委託事業）
※平成 23 年度　⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 24 年度　⑰「家族ってなに　その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 25 年度　⑱「長寿者とつながる　ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 26 年度　⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 27 年度　⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」
※平成 28 年度　㉑「ご近所福祉　その意識と実態調査」
※平成 29 年度　㉒「居場所ってなに　その意識と実態調査」
※平成 30 年度　㉓「子どもを育む地域づくり　その意識と実態調査①」
※平成 31 年度　㉔「子どもを育む地域づくり　その意識と実態調査②」
　　「256 名の子どもたちに聞きました　ホッとする地域ですか調査」

と、「２４のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

特に、平成２０年度～平成２６年度の７年間は、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組み、長寿者等の孤立防止についてあらゆる角度から検証し、これまでの福祉文化実践活動を展開し、一貫してプロセス重視の視点から考察をしてきた。

通算２５回目となる節目の令和２年度の調査研究事業は、これまでの社会的課題を活動テーマにして２４年間取り組んできた「共働き」「地域」「家族・家庭」「父親」「ボランティア」「生きがい」「若者」「子ども」「長寿者」「福祉情報」「支え合い」「ご近所福祉」「居場所」等その時代の数々の地域課題を把握した上で、つなぐ・支える地域社会の再構築に向けて、厳しいコロナ禍の今、これまでの生活圏域としての、ご近所の支え合いから、これからのご近所の支え合いについて、本会が取り組む全県域と「焼津福祉文化共創研究会」が取り組む焼津港地域管内の地域性を基に、住民の意識と実態を把握し、これからの「ご近所福祉」のあり方を検証することとした。

本調査研究活動は、住民主体を基本として、調査個票の作成検討をはじめ、調査依頼・回収、データ入力・考察等本調査研究活動に積極的に参画・協力により、これからの地域の課題改善・解決に向けた研究活動として取り組んだ。

２．調査方法と調査時点

(1) 調査票・項目の検討

4月･6月の本会委員会及び6月～9月 「焼津福祉文化共創研究会」の定例研究会と研究会内に設置した「IT･調査研究会」との協働により, 検討協議を続けた。

(2) 調査票の完成

調査検討協議を積み重ねながら、「予備調査」を1回実施し、9月 30 日仕上げた。

(3) 調査時点と調査依頼（実施期間）

調査時点を、10 月 1 日とし、 調査期間は、できる限り円滑な活動に移行できるように、10 月 1 日～10 月 31 日の一か月間とした。

(4) 回収・入力（単純集計）期間

「焼津福祉文化共創研究会」の「第5回 IT･調査研究部会」(10/3 開催)において、8名のデータ入力会員により、データ入力作業の展開方法について協議をし、10 月 1 日～11 月 20 日の間取り組んだ。

(5) 分析・考察

「焼津福祉文化共創研究会」の 9 月定例研究会（第18回）において、調査票に基づき「クロス集計」について検討し、その書式を検討しつつ、11 月 30 日で回収作業を終了し、「クロス集計データ資料」の作成に取り組んだ。 その後、11 月（第 20 回）、12 月（第 21 回）の「焼津福祉文化共創研究会」の定例研究会を中心に「分析･考察研究協議」として、集中的に議論を重ねた意見を集約し「報告書」の作成につなげた。

(6) 公表・報告

データ入力及び考察作業期間中、「中間報告」の機会を設け、本会機関誌「OUR LIFE」や県域の関係機関･団体等の各種研修会において経過を報告した。

改めて、正式公表を令和 3 年 2 月中に「第3回公開型報告研修会」において実施。

３．調査票の形式及び調査項目

(1) 調査票の形式

A4 版見開き4ページ組み立て 29項目の設問

(2) 調査項目

①基本属性	⇒	設問1（問 1,2,3,4,5,6,7,8,9）	9項目
②地域との関わりの意識	⇒	設問 2.3.4.5.6.7	6項目
③地域との関わりの実態	⇒	設問 8.9.10.11.12.13.14	7項目
④地域参加の動向	⇒	設問 15.16.17.18.19.20.21.22	8項目
⑤地域環境	⇒	設問 23.24.25.26.27.28	6項目
⑥提　言（自由意見）	⇒	設問 29	1項目

４．　調査対象と調査票の配布

(1) 対　　象　静岡県内の20代以上の方々を対象に、年代・世代・領域等を考慮して、約500名程度の回収を目標に実施し、結果的には、753名の回収となった。
「焼津福祉文化共創研究会」の回収は、中部地区対象として取り組んだ。

(2) 配布方法　今回の調査は、
①「静岡福祉文化を考える会」は、主な依頼方法を「郵送方法」とした。
一部、研修会参加者への依頼及び手渡しによる対応をした。
②「焼津福祉文化共創研究会」は、主な依頼方法を「手渡し方法」を中心に実施した。

５．調査実施機関　静岡福祉文化を考える会

６．調査協働　焼津福祉文化共創研究会

７．回収状況

(1) 配布枚数と回収数

本会の調査研究活動は、25年間、一貫して、会員の手づくりによる取り組みで実施してきた。
今年度の調査は、「焼津福祉文化共創研究会」との協働による取り組みとしたため、研究会の会員はまさしく生活圏域の「ご近所」の関係による、意義ある調査活動となった。
また、県内市町社会福祉協議会、県内地域活動実践者、福祉施設、企業・団体等の協力のもと、県内各種研修会参加者の協力により実施出来た。

	会　員	焼津福祉文化共創研究会	市町社会福祉協議会	地域実践者	施設・団体・企業	総　数
依頼領域数	170	360	225	265	40	1，060枚
回収実績数	85	345	75	208	40	753
パーセント	50．0%	95．8%	33．3%	78．5%	100%	71.0%

(2) 地区別回収数

本会の事務局機能が中部地区内にあるため、例年、中部管内の回収率は高い。
今年度は、さらに「焼津福祉文化共創研究会」による「協働」の取り組みであったため、これまで以上に「中部地区」の回答が多くなった。

	東部地区	中部地区	西部地区	計
回収実数	158枚	473枚	122枚	753枚
地区別%	21．0%	62．8%	16．2%	100%

●２５年間の調査研究事業の回収状況をみると、
平成２８年度　「ご近所福祉調査事業」　５６．１%、平成２９年度「居場所調査」６５．８%
平成３０年・令和元年度「子どもを育む調査」８０．１%、令和２年度「ご近所福祉その意識と実態調査」７１%、となっている。
厳しい社会状況下で、今回の調査がまとめられたことの意義は大きい。

第２章　サンプル構成/基本属性

この章では、本調査の基本となる「サンプル構成」「基本属性」をまとめた。
本会が、結成以来25年間取り組んできた調査活動は、一貫して、県内の東部・中部・西部の各領域・分野に調査の趣旨に基づき均等性、信頼性を維持しつつ努力をして今日に至っている。

全国的な「基本調査」「世論調査」「動向調査」等で活用している基本属性項目を検討し、採用しているが今回は、「焼津福祉文化共創研究会」との協働による取り組みをした中で、「結婚歴」「地域別の具体化」等一部改善した項目を設けた。

新たに加えたり、また修正した項目をあげると、

(1)「年代別」・・・・・・これまでの調査研究活動は、10代以上を対象としたが、今回は、より、身近な生活圏域における支えあい・助け合いに関する調査であることから、地域社会に目を向ける年代として、20歳以上を調査対象にした。

(2)「結婚歴」・・・・・今回、新たな項目として加えた。 結婚の有無による「地域を見る目」を検証する。

(3)「職業歴」・・・・・どの範囲まで回答枠を拡げるか、調査意図から立場により，選択肢が複数になる可能性を問い質しながら、回答者の判断に任せることとして、回答欄を設けたが、今後、精査する必要がある。

(4)「地域形態」「居住形態」（家族構成）については、「その他」の選択肢の必要性があるかの検討が必要

以上を総合的に整理しながら「基本属性」は、「1. 性別」「2. 年齢別」「3. 結婚歴別」「4. 職業別」「5. 居住形態別」「6. 居住歴別」「7. 地域別」「8. 地域形態別」「9. 家族構成別」の9項目をまとめた。

１．性別

(1)男性339名（45%） (2)女性407名（54%） (3)NA7名（1%）

＊性別では、今日的地域参加の動向（女性6：男性4）傾向から見ると、今回の回答は男性約5割（45%）と高く、ほぼ女性54%と同等に近い回答結果であった。

２．年齢別

(1)20代　43名（6%）　(2)30代　64名（8%） (3)40代　99名（13%）　(4)50代　130名（17%）
(5)60代　178名（24%）　(6)70代　192名　（25%） (7) 80代以上　47名（6%）

＊年代とご近所との関りの考察を深める上で、年齢別回答状況は重要なところである。
結果的には、60代24%、70代25%中心の回答であったが、40代13%、50代17%、そして30代8%
20代6%の幅広い年代層から回答をいただいた。 80代6%の回答も寄せられている。

３．結婚歴

(1)既婚者　626名（83. 1%） (2)未婚者　81名（11%） (3)その他　29名（4%）
(4)NA　17名（2%）

＊近所との関りを考察するうえで、新たにもうけた設問であった。
回答の約8割は既婚者。 未婚者11%は、20代から30代の年代別との関連が伺える。

４．職業（所属群）

⑴学生	3名（　0%）	⑺ 主婦	127名（17%）
⑵会社員	186名（25%）	⑻パート・フリーター	103名（14%）
⑶公務員	35名（ 5%）	⑼無職	151名（20%）
⑷自営業	45名（ 6%）	⑽その他	22名（ 3%）
⑸団体職員	63名（ 8%）	⑾NA	11名（ 1%）
⑹自由業	7名（ 1%）		

＊ご近所との職業との関りを考察するうえで求めた。 回答の多い順に、会社員25%、無職22%、主婦17%、パート・フリーター14%、団体職員8%、自営業6%、公務員5%、その他3%、自由業1%、不明1%等となっている。

５．居住形態

⑴持ち家 695名（92%） ⑵借家 46名（6%） ⑷その他 12名（2%） ⑶社宅・官舎 0名（0%）

＊ご近所との関りを、持ち家92%と借家6%の回答から考察できる。

６．居住歴年数

⑴1年未満	10名（ 1%）	⑸20年未満	50名（ 7%）
⑵5年未満	59名（ 8%）	⑹25年未満	90名（12%）
⑶10年未満	61名（ 8%）	⑺ 25年以上	441名（59%）
⑷15年未満	37名（ 5%）	⑻NA	5名（ 1%）

＊25年以上59%、25年未満 12%と、約7割は、地域との関りが長いと思われる回答である。

７．地域別

⑴東部	145名（19%）	⑶農村部	114名（15%）
⑵中部	489名（65%）	⑷NA	5名（ 1%）

８．地域形態

⑴街部	172名（23%）	⑸山間部	29名（ 4%）
⑵新興住宅地	264名（35%）	⑹ その他	29名（ 4%）
⑶農村部	136名（18%）	⑺NA	6名（ 1%）
⑷海浜部	117名（16%）		

＊回答の多い順から、新興住宅地 35%、街部 23%、農村部18%、海浜部 16%、山間部4%、その他4%であった。

９．家族形態

⑴父母や孫が同居する家族	188名（25%）	⑷一人暮らし（未婚）	19名（ 3%）
⑵親と子どもだけの家族	269名（36%）	⑸一人暮らし（配偶者との死別、離別、別居）	44名（ 6%）
⑶夫婦だけの家族	203名（27%）	⑹その他	30名（ 4%）

＊回答の多い順では、親と子どもだけの家族36%、夫婦だけの家族27%、父母や孫が同居する家族25%、一人暮らし（配偶者との死別、離別、別居） 6%、その他3%、一人暮らし（未婚）3%であった。

第３章　調査結果

第3章では、静岡県域における「ご近所福祉その意識と実態」を検証する目的で、29の設問項目の調査票により、20歳以上の県民の皆様に調査をお願いし、753名から回答をいただいた。

この回答データを、「焼津福祉文化共創研究会」内に設置した「IT部会」メンバーに本会会員も加わり、単純集計と、「性別」「年齢別」「結婚歴」「職業別」「居住形態別」「居住歴別」［地域別］「地域形態別」「家族構成別」のクロス集計作業をし、第2章 サンプル/基本属性をもとに、この第3章では、29の設問項目の調査結果を大きく、次の「5つの領域」に分けて調査結果として考察した。

(1) 地域との関わりの意識（設問2～設問7 までの6設問）

①地域との交流に対する考え方

②安心して暮らせる地域とは

③ご近所づきあいの考え方

④超高齢社会における“生活の支え”の考え方

⑤地域活動絵の参加呼びかけに対する考え方

⑥地域活動の呼びかけに対する活動内容の目安

(2) 地域との関わりの実態(設問8～設問 14 までの7設問）

①近所づきあいの満足度

②ご近所で親しく行き来する状況

③ご近所との付き合い程度

④毎日の暮らしの中で困ったときの相談は誰か

⑤日常における生活情報源

⑥地域の役員に推薦されたときの判断

⑦地域の役員の推薦に応じない理由

(3) 地域参加の動向（設問 15～設問 22 までの8設問）

①地域にふれあい交流をする機会の有無

②地域の「居場所」の有無

③地域の「居場所」となっている具体的な内容

④コロナ禍下、地域ぐるみの取り組みの協議の有無

⑤地域の行事や活動への参加の有無

⑥地域の行事や活動への参加の度合い

⑦地域の行事や活動に参加しない理由

⑧地域づくりに求められる環境

(4) 地域環境（設問23～設問 28までの6設問）

①地域活動の拠点の有無

②地域活動の具体的な拠点

③地域コミュニティの認識

④地域ぐるみの「見守り支援体制」の有無

⑤安心して暮らせるための支援・サービスの内容

⑥日頃から、地域ぐるみで支え合い・助け合いの取り組で大切なこと

(5)「人・家族・地域がつながり合う、これからのご近所のあり方」の意見・提言（設問 29 の1設問）

★このたびの「2020 年度 ご近所福祉その意識と実態調査」(県内東部158名・38．7%、中部473名・62．8%、西部122名・16．2% 計753名からの回答)は、本会がこれまで25年間にわたり、静岡県域を対象として取り組んできた調査研究活動のうち、平成23年度(または平成25年度)、平成28年度、そして今回と、おおよそ4から5年間隔で同様な調査項目を設定して、調査を実施してきた。
今回の25周年記念調査研究事業として、時代と共に、県民の意識と実態がどのように変化しているか、これらの調査結果を比較考察をすることとした。
この第3章では、基本属性を除く28の設問のうち、いくつかの「同じ設問項目」について、 静岡県域の意識と実態の年次別調査結果の比較を数値表を入れて考察した。

1．地域との関わりの意識 （設問２～設問７ までの６設問）

ここでは、29の設問のうち『地域との関りの意識』に関して、「地域との交流に対する考え方」「安心して暮らせる地域とは」「ご近所づきあいの考え方」「超高齢社会における“生活の支え”の考え方」「地域活動への参加呼びかけに対する考え方」「地域活動の活動内容の目安」の6の設問を考察した。

設問2 自分の住んでいる地域の人々との交流についての考え

設問２	あなたは、自分の住んでいる地域の人々との交流について、どのようにお考えですか。主なものを１つお答え下さい。	地域の人々との交流は大切である	①	482		64%
		地域の人々との交流はどちらかといえば大切で	②	246		33%
		あまり大切だとは思わない	③	15		2%
		まったく大切だとは思わない	④	3		0%
		不明	⑤	7	753	1%

＊全体的には、「地域の人々との交流は大切である」64%、「地域の人々との交流はどちらかといえば大切である」33%を合わせると、97%と、ほとんどが「大切である」と回答している。男女別回答でも、同様である。年代別で目立つのは、60代、70代、80代と、「地域の人々との交流は大切である」の回答が72から81%と高い。20代49%，30代44%、40代55%、50代56%と年代と共に意識は少しづつ高まっている。 結婚歴で見ると、「地域の人々との交流は大切である」は、既婚者68%に対して、未婚者44%は、約24%未婚者が低い。居住年数が25年以上では、交流の大切さは71%と高い回答。

設問3 一人でも安心して暮らせる地域であるか

設問３	あなたの地域は「一人でも安心して暮らせる地域である」と思いますか。	強くそう思っている	①	92		12%
		少しはそう思っている	②	433		58%
		あまりそう思ってはいない	③	164		22%
		まったくそう思ってはいない	④	21		3%
		わからない	⑤	40		5%
		不明	⑥	3	753	0%

＊全体的には、「強くそう思っている」12%、「少しはそう思っている 」58%で「そう思っている」が70%。
これを過去のデータと比較すると、下記の通り、年々意識は高まっている回答結果である。
特に、「わからない」曖昧な回答が減少している。

	平成23年度	平成28年度	令和2年度
①強くそう思っている	7%	11%	12%
②少しはそう思っている	33%	54%	58%
③あまりそう思ってはいない	28%	21%	22%

④まったくそう思っていない	10%	4%	3%
⑤わからない	23%	12%	5%

年代別では、「安心して暮らせる地域であると思っている」の回答は、60代78%、70代74%、40代72%、30代71%、80代71%、50代69%、20代63%と年齢差がある。

結婚歴で見ると、「一人でも安心して暮らせる地域であると思っている」は、既婚者71%に対して、未婚者64%と、意識の差が見られる。　男女別では、男性71%に対して女性69%と微減。

設問4 ご近所づきあいについての考え方

設問４	あなたは、ご近所づきあいについて、どのようにお考えですか。主なものを１つお答え下さい。	ご近所づきあいは、緊急時の助け合いのために	①	381		51%
		向こう三軒両隣程度のご近所付き合いはした方	②	208		28%
		隣近所のことはあまり干渉しないで、付き合い	③	138		18%
		隣近所とは関わりをもたない方が良いと考えて	④	3		0%
		特に考えていない	⑤	10		1%
		不明	⑥	13	753	2%

＊全体的には、「緊急時の助け合いのためにも、日頃から積極的にした方がよい」51%、「向こう三軒両隣程度のご近所付き合いはした方がよい」28%で、前向きな回答が約8割を占めている。

「あまり干渉しないで、付き合いはほどほどが良い」が18%。

性別では、「あまり干渉しないで、付き合いはほどほどが良い」の女性の回答が20%、男性17%で女性が上回っている。　年代別では、「あまり干渉しないで、付き合いはほどほどが良い」が、30代41%と高く、20代30%、40代26%、50代22%。60代では11%、70代13%、80代以上4%と大きな開きがある。

設問5 “超高齢社会”の今日の「生活の支えについて

設問５	あなたは、“超高齢社会”の今日の「生活の支え」について、あなたの考えにもっとも近いものを１つお答え下さい。	自分自身での支え	①	143		19%
		家族の支え	②	289		38%
		地域社会での支え	③	264		35%
		その他（	④	16		2%
		わからない	⑤	24		3%
		不明	⑥	17	753	2%

＊全体的では、回答の多い順に、「家族の支え」38%、「地域の支え」35%、「自分自身の支え」19%。

男女別を見ると、男性は「家族の支え」43%、女性は「地域の支え」39%で、地域に目を向けている女性の意識が伺える。年代別に、一番多回答では、20代は「地域社会の支え」37%、30代「家族の支え」40%、40・50代「地域の支え」、60代・70代・80代以上「家族の支え」と、年代で意識の差がある回答。

ここで、浮き彫りになったことは、いかに「家族の支え」が大きいか、そして「地域（公的制度）」への期待の高い結果となった。

設問6 地域活動参加協力の呼びかけへの参加について

設問６	あなたは、「地域活動」参加協力の呼びかけがあったとき参加しますか。	積極的に参加をする	①	147		20%
		呼びかけがあれば参加する	②	508		67%
		あまり関心がない	③	72		10%
		参加しない	④	15		2%
		不明	⑤	11	753	1%

＊全体的では、「積極的に参加をする」20%、「呼びかけがあれば参加する」67%と、「参加する」の回答が87%と高い回答結果である。消極的回答は12%。　男性よりも女性の方が地域参加の意識が高い。

この回答結果から、地域活動に、より具体的な参加の呼びかけをする工夫が求められる。

過去の設問との比較は、下記の通りである。 平成23年度「参加の傾向」83%、平成28年度は75%であったが、今回は89%と高い回答結果である。厳しい社会の動きに対する前向きな回答と受け止められる。関心のない住民への地域参加の呼び掛けの課題もある。

	平成23年度	平成28年度	令和2年度
①積極的に参加をする	21%	13%	20%
②呼び掛けがあれば参加する	62%	62%	67%
③あまり関心がない	13%	17%	10%
④参加しない	4%	5%	2%
⑤NA	0%	3%	1%

設問7 呼びかけに参加と答えた 主な活動内容

設問７	設問６で「①積極的に参加をする②呼びかけがあれば参加する」と回答された方にお伺いします。主な活動内容を２つまでお答え下さい。	子育てや子どもの見守り	①	158	655	24%
		高齢者や障害者への支援	②	190		29%
		健康づくりや生きがいづくり	③	179		27%
		介護者や介護を必要とする方への支援	④	75		11%
		自治会・町内会等運営の参画	⑤	192		29%
		防災・防犯等生活安全に関する活動	⑥	174		27%
		スポーツ・文化・レクリエーション等の活動	⑦	118		18%
		世代を超えた交流活動	⑧	81		12%
		青少年健全育成活動	⑨	14		2%
		その他(	⑩	3		0%
		特になし	⑪	13	1197	2%

＊全体的では、回答の多い順にまとめると、①「自治会・町内会等運営の参画」29%がトップ、②「高齢者や障害者への支援」29% ③「健康づくりや生きがいづくり」 ④「防災・防犯等生活安全に関する活動」27% ⑤「子育てや子どもの見守り」24% ⑥「スポーツ・文化・レクリエーション等の活動」18% ⑦「世代を超えた交流活動」12% ⑧「介護者や介護を必要とする方への支援」11% ⑨「青少年健全育成活動」2%となっている。 男女別の差はあまり見られない。 年代別では、30代から50代は、「「子育てや子どもの見守り」が多い。60代から70代は、「健康づくり・生きがいづくり」が多い回答傾向にある。

地域との関わりの意識に関する考察

1.「自分の住んでいる地域の人々との交流が大切である」と男女を問わず、ほぼ全ての人たちは意識している。
また、年代と共に、既婚者で居住年数が長いほどその意識は高い。

2.「一人でも安心して暮らせる地域」との意識は、全体的には、「そう思っている」が70%と高い。
過去のデータと比較すると、その意識は年々高まり、理解できない層が減少している回答結果である。

3.「ご近所づきあい」に対する意識は、「緊急時の助け合いのためにも、日頃から積極的にした方がよい」51%、「向こう三軒両隣程度のご近所付き合いはした方がよい」28%で、前向きな回答が約8割と高い。
年代別では、加齢化と共にその意識は高い回答結果である。

4. “超高齢社会”の今日の「生活の支え」の意識は、「家族の支え」38%、「地域の支え」35%、「自分自身の支え」19%の回答順である。男女別では変化があり、男性は「家族の支え」43%、女性は「地域の支え」39%で、地域に目を向けている女性の意識が伺える。年代別に、一番多回答では、20代は「地域社会の支え」37%、30代「家族の支え」40%、40・50代「地域の支え」、60代・70代・80代以上「家族の支え」と、年代で意識の差がある回答。 ここで、浮き彫りになったことは、いかに「家族の支え」が大きいか、

そして「地域（公的制度）」への期待の高い結果となった。

5. 地域活動への参加の呼びかけについて、「参加する」の回答が87％と高く、男性よりも女性の方が地域参加の意識が高い。平成23年度「参加の傾向」83％、平成28年度は75％であったが、今回は87％と高い回答結果から、厳しい社会の動きに対する前向きな回答である。 如何に、具体的な地域参加の呼び掛けをしていくか、また、関心のない住民への地域参加の呼び掛けの課題もある。

6. 地域参加活動に応じると回答した全体的な参加活動内容を多い順にまとめると、
①「自治会・町内会等運営の参画」29％ ②「高齢者や障害者への支援」29％ ③「健康づくりや生きがいづくり」27％ ④「防災・防犯等生活安全に関する活動」27％ ⑤「子育てや子どもの見守り」24％ ⑥「スポーツ・文化・レクリエーション等の活動」18％ ⑦「世代を超えた交流活動」12％ ⑧「介護者や介護を必要とする方への支援」11％ ⑨「青少年健全育成活動」2％。
年代別では、30代から50代は、「「子育てや子どもの見守り」、60代から70代は、「健康づくり・生きがいづくり」が多い回答傾向にあり、世代や取り巻く領域で、地域参加の呼び掛けの工夫が求められる。

２．地域との関わりの実態（設問８～設問 14　までの７設問）

ここでは、29の設問のうち『地域との関りの実態』に関して、「近所づきあいの満足度」「ご近所で親しく行き来する状況」「ご近所との付き合い程度」「毎日の暮らしの中で困ったときの相談は誰か」「日常における生活情報源」「地域の役員に推薦されたときの判断」「地域の役員の推薦に応じない理由」の7の設問を考察した。

設問8　近所づきあいの満足度について

設問８	あなたの近所づきあいの満足度についてお答え下さい。	満足している	①	122		16%
		まあまあ満足している	②	524		70%
		あまり満足していない	③	92		12%
		満足していない	④	6		1%
		不明	⑤	9	753	1%

＊全体的では、男女別、年代別、居住年数別ともに、回答結果は、ほぼ同じ傾向回答結果であった。
「満足している　」16％、「まあまあ満足している」70％と、「満足傾向」は86％前後。

設問9　ご近所に親しくしていて行き来する家の状況について

設問９	あなたは、ご近所に親しくしていて行き来する家がありますか。	多くある	①	55		7%
		何軒かある	②	389		52%
		１軒くらいはある	③	179		24%
		まったくない	④	117		16%
		不明	⑤	13	753	2%

＊全体的では、「何軒かある」52％、「1軒くらいはある　」24％、「まったくない」16％、「多くある」7％。
男女別も同様な傾向であった。
年代別では、大きな開きが伺えた。「全くない」は、２０代６０％、３０代３１％、４０代１６％、50代２０％、６０代１２％、７０代５％、８０代以上０％と、加齢化と共に、近所との付き合いは深まっている傾向が伺えた。
これを過去のデータと比較すると、下記の通り、前回と比較すると近所付き合いの深まりの回答結果である。

	平成23年度	平成28年度	令和2年度
①多くある	8%	5%	7%
②何軒かある	51%	35%	52%
③一軒くらいはある	25%	26%	24%

④まったくない	17%	30%	16%

設問 10 ご近所の人との付き合いの状況について

設問10	あなたは、ご近所の人とどのようなお付き合いをされていますか。主なものを１つお答え下さい。	個人的なことを相談し合える人がいる	①	134		18%
		差しさわりのないことなら話せる人がいる	②	422		56%
		道で会えば、挨拶する程度の人はいる	③	160		21%
		ほとんど近所づきあいをしない	④	27		4%
		不明	⑤	10	753	1%

＊全体的では、回答の多い順に「差しさわりのないことなら話せる人がいる」56%、「道で会えば、挨拶する程度の人はいる」21%、「個人的なことを相談し合える人がいる」18%、「ほとんど近所づきあいをしない」4%であった。 男女別の結果では、「個人的なことを相談し合える人がいる」女性22%に対して、男性13%と低い。 年代別で回答結果の高い内容は、20・30代「道で会えば、挨拶する程度の人はいる」、40代から80代以上は「差しさわりのないことなら話せる人がいる」。

設問11 毎日の暮らしの中で困った時の相談は誰か

設問11	あなたは、毎日の暮らしの中で困った時、誰に相談しますか。主なものを２つまでお答え下さい。	家族	①	663	753	88%
		近所の人	②	54		7%
		医師・保健師	③	22		3%
		親戚関係	④	162		22%
		友人・知人	⑤	372		49%
		自治会・町内会関係者	⑥	11		1%
		相談する人がいない	⑦	7		1%
		誰にも相談したくない	⑧	5		1%
		民生委員児童委員	⑨	5		1%
		社会福祉協議会	⑩	6		1%
		地域包括支援センター	⑪	17		2%
		その他（	⑫	14	1338	2%

＊全体的では、回答の多い順に、①家族88%　②友人・知人　49%　③親戚関係22%　④近所の人7%　⑤医師・保健師　3%。男女別、年代別共にほぼ同じ傾向である。
あとは、⑥地域包括支援センター2%　⑦自治会・町内会関係者、民生委員児童委員、 各1%。

設問12 日常における生活情報源について

設問12	あなたの日常における生活情報源は何ですか。主なものを２つまでお答え下さい。	家族	①	221	753	29%
		友人・知人	②	189		25%
		ラジオ・テレビ	③	420		56%
		インターネット	④	295		39%
		新聞	⑤	219		29%
		行政広報誌	⑥	37		5%
		回覧板	⑦	24		3%
		学校	⑧	2		0%
		生活情報誌	⑨	4		1%
		社会教育施設（公民館だより等）	⑩	3		0%
		自治会・町内会発行広報誌	⑪	17		2%
		所属団体広報誌等	⑫	2		0%
		口コミ	⑬	13		2%
		福祉施設団体	⑭	1		0%
		スーパー等の掲示板	⑮	1		0%
		各種企業チラシ・資料・広報紙	⑯	5		1%
		その他(	⑰	4	1457	1%

＊全体的では、回答の多い順に、①ラジオ・テレビ56%　②インターネット　39%　③家族29%　④新聞29%　⑤友人・知人　25%　⑥行政広報誌5%　⑦回覧板3%　⑧自治会・町内会発行広報誌2%　⑨口コミ2%　等である。 今日では、主なる生活情報源は、マスコミ、インターネットが主流となっている。

この結果は、男女別でも同じ傾向の回答結果である。　年代別では、20代から40代までは「インターネット」が一番回答が多く、50代では、「インターネット」と「ラジオ・テレビ」がほぼ同じ、60代以降は、「ラジオ・テレビ」「新聞」等マスコミからの情報源が多い回答。

これまで、ご近所の身近な生活情報源としてきた「回覧版」の回答は少ない。 新たな情報提供の仕組みの課題が出ている。

設問 13　地域の役員等に推薦された場合について

設問13	あなたは、地域の役員等に推薦されたとき、どうされますか。	推薦に応じる	①	226		30%
		推薦に応じない	②	172		23%
		その他（	③	88		12%
		わからない	④	255		34%
		不明	⑤	12	753	2%

＊全体的では、「推薦に応じる」30%は、「推薦に応じない」23%を上回った回答結果であった。

「わからない」は34%。男女別では、回答の高い順は、同じ傾向であるが、男性「推薦に応じる」38%と高く、女性は24%。「推薦に応じない」は、20代・30代は高いが、40代以降は推薦に応じる」傾向が高い。

80代以上では、「推薦に応じない」が「推薦に応じる」を上回っている結果である。

設問 14 「 推薦に応じない 」回答の主な理由について

設問14	設問13で「②推薦に応じない③その他」と回答された方にお伺いします。主な理由を２つまでお答え下さい。	自信がない	①	88	260	34%
		仕事がある	②	122		47%
		家庭がある	③	37		14%
		責任のある地位につくのは煩わしい	④	57		22%
		その他（	⑤	57		22%

＊全体的では、回答の多い順に、①「仕事がある」47%　②「自信がない」34%　③「責任のある地位につくのは煩わしい」22%　④「その他（内容によって）22%　⑤「家庭がある」14%

男女別も、ほぼ同様な回答結果であった。

地域との関わりの実態に関する考察

1.「近所づきあいの満足度」は、「満足傾向」が約9割と高い。年代別でも同様な回答結果である。
　居住年数が長いほど、満足度は高い。

2. ご近所に親しくしていて行き来する家の状況については、「何軒かある」52%、「1軒くらいはある 」24%、「まったくない」16%、「多くある」7%。 男女別も同様な傾向であった。
　年代別では、若い世代ほど希薄化の傾向が伺えた。
　前回(平成28年度)と比較すると、近所付き合いが深まっている傾向結果である。

3. ご近所の人との付き合いの状況は、「差しさわりのないことなら話せる人がいる」約6割、「道で会えば、挨拶する程度の人はいる」約2割、「個人的なことを相談し合える人がいる」約2割、「 ほとんど近所づきあいをしない」回答も少数あった。 女性は、男性よりも、「個人的なことを相談し合える人がいる」回答が多い。

4. 毎日の暮らしの中で困った時の相談は、全体、男女別、年代別共にほぼ同じ傾向で、①家族88%　②友人・知人　49%　③親戚関係22%　④近所の人7%　⑤医師・保健師　3%。ある。
　あとは、⑥地域包括支援センター2%、⑦自治会・町内会関係者、民生委員児童委員、 各1%。

年代別においては、20代から60代までは、「友人・知人」の占める割合が「家族」の次に意外と多いが、70代以降になると、「親戚関係」が浮き彫りになっている。

5. 日常における生活情報源は、「ラジオ・テレビ」 ②「インターネット 」 ③「家族」④「新聞」⑤「友人・知人」⑥「行政広報誌」 ⑦「回覧板」 ⑧「自治会・町内会発行広報誌」 ⑨「口コミ」の回答の多い順である。
これまで、身近な生活圏域における情報源の主流は「回覧板」ともいわれてきたが、今日の生活情報源は、マスコミ、インターネットが主流と大きく変化している。 特に、20代から40代までは「インターネット」の回答が多く、50代以降は、「ラジオ・テレビ」「新聞」等マスコミからの情報源である。
今後は、「選択的情報提供」(それぞれの年代や領域において求められる情報を的確に提供できる手法)をきめ細かく精査して「見える化」「わかる化」の工夫が求められる。

6. 身近なコミュニティ組織の運営で、大きな課題を抱えているのが「地域の役員の選出」である。
今回、新たな「調査項目」として、「地域の役員等に推薦された場合」について回答を求めた。
回答結果では、「推薦に応じる」30%は、「推薦に応じない」23%を上回った回答結果となっている。
「わからない」は34%。男女別では、回答の高い順は、同じ傾向であるが、男性「推薦に応じる」38%と高く、女性は24%。「推薦に応じない」は、20代・30代は高いが、40代以降は推薦に応じる」傾向が高い。
80代以上では、「推薦に応じない」が「推薦に応じる」を上回っている結果である。
「推薦に応じない 」回答の主な理由について、①「仕事がある」47% ②「自信がない」34% ③「責任のある地位につくのは煩わしい」22% ④「その他(内容によって)22% ⑤「家庭がある」14%。

3. 地域参加の動向(設問 15～設問 22 までの８設問)

ここでは、29の設問のうち『地域参加の動向』に関して、「地域にふれあい交流をする機会の有無」「地域の居場所の有無」「地域の居場所となっている具体的な内容」「コロナ禍下、地域ぐるみの取り組みの協議の有無」「地域の行事や活動への参加の有無」「地域の行事や活動への参加の度合い」「地域の行事や活動に参加しない理由」「地域づくりに求められる環境」の8の設問を考察した。

設問 15 地域に、ふれあい交流をする機会の有無

設問15	あなたの地域には、ふれあい交流をする機会はありますか。	地区の行事を計画的に立てて、積極的に持って	①	188		25%
		不定期であるが、たまに交流することもある	②	257		34%
		あまり集まることもない	③	112		15%
		ほとんどふれあう機会はない	④	105		14%
		わからない	⑤	82		11%
		不明	⑥	9	753	1%

＊全体的には、「不定期であるが、たまに交流することもある」34%、「行事を計画的に立てて、積極的に持っている」25%、「あまり集まることもない」15%、「ほとんどふれあう機会はない」14%、「わからない」11%。で、男女別回答も同じ傾向結果である。 全体的には、「交流する機会がある」59%の結果である。
年代別では、20代では「わからない」が32%。30代25%、40代15%と高いが、50代以降、加齢化とともに、「わからない」は減少している。 80代以上になると「わからない」が微増。
過去の結果と比較すると、次の通り、やや交流の機会が薄れてきている傾向にある。
厳しいコロナ禍の現状が結果と出ていることも推察できる。

	平成23年度	平成28年度	令和2年度
①地区の行事を計画的に立てて、積極的に持っている	22%	26%	25%

②不定期であるが、たまに交流することもある	30%	33%	34%
③あまり集まることもない	10%	10%	15%
④ほとんどふれあう機会はない	20%	12%	14%
⑤わからない	0%	15%	11%

設問 16 地域に、地区住民が進んで集まり、ひと時を過ごす「居場所」の取り組みの有無

設問16	あなたの地域において、地区住民が進んで集まり、ひと時を過ごす「居場所」として取り組まれているものはありますか。	ある	①	343		46%
		ない	②	160		21%
		わからない	③	235		31%
		不明	④	15	753	2%

＊全体的には、「ある」46%、「ない」21%、であるが、「わからない」31%で、地域の動きが十分把握されていない結果となっている。

今日、地域活動における「居場所」活動が積極的に取り組まれるようになり、地域における認識度が高まっている一面が伺える。　しかし、年代別では、「わからない」の回答が２０代・３０代６１％と高く、４０代４２％、５０代４７％の結果である。その以降の年代では、加齢化とともに、その認識度は高まっている回答である。

平成２８年度の調査との比較は次の通りである。　今日、各地で積極的に「居場所」の取り組みをしている状況から、地域社会全体の認知度が高まっていることが理解できる。

	平成28年度	令和2年度
①ある	25%	46%
②ない	20%	21%
③わからない	52%	31%
④NA	3%	2%

設問 17　地域に、地区住民が進んで集まり、ひと時を過ごす「居場所」の取り組みの内容

設問17	設問16で「①ある」と回答された方にお伺いします。主なものを１つお答え下さい。	食事会	①	21	343	6%
		お茶会	②	17		5%
		コミュニテイカフェ(居場所)	③	135		39%
		いこいの広場(語らいの広場)	④	69		20%
		趣味仲間の集まり	⑤	74		22%
		パソコン教室（学習教室）	⑥	3		1%
		その他（	⑦	37		11%

＊全体的には、①「コミュニテイカフェ(居場所)」39%、②「趣味仲間の集まり」22%、 ③「いこいの広場(語らいの広場)」20%、④「食事会」6%、⑤お茶会5%、⑥パソコン教室1%の順の回答結果。

設問 18 「コロナ禍」の中、地域の見守り活動や居場所等、地域ぐるみの取り組みの協議の有無

設問18	あなたの地域では、「コロナ禍」を契機に、地域の見守り活動や居場所等、地域ぐるみの取り組みについて話し合う機会はありますか。	全体的な話し合いの場を持った	①	48		6%
		動きはある	②	116		15%
		今のところない	③	379		50%
		わからない	④	194		26%
		不明	⑤	16	753	2%

＊全体的には、回答順に①「今のところない」50%、 ②「わからない」26%、 ③「動きはある」15%、④「全体的な話し合いの場を持った」6%と、地域における取組はこれからの課題と感じる。

設問 19　地域の行事や活動への参加について

設問19	あなたは地域の行事や活動に参加していますか。	積極的に参加している	①	192		25%
		時々参加している	②	406		54%
		ほとんど参加していない	③	143		19%
		不明	④	12	753	2%

＊全体的には、①「時々参加している」54%、 ②「積極的に参加している」25%、 ③「ほとんど参加していない」19%で、男女別も同様な傾向結果である。 年代別に見ると、20代「ほとんど参加していない」69%と高いことは、結婚歴からも「未婚者」のそれは46%の結果である。加齢化とともに減少するも、80代では20%と高くなる。

平成２８年度の調査との比較は次の通りである。「参加の傾向」は、５年前より、約１３%増加傾向にある。

	平成28年度	令和2年度
①積極的に参加している	20%	25%
②時々参加している	48%	54%
③ほとんど参加していない	28%	19%
④NA	4%	2%

設問 20　地域の行事や活動参加の内容

設問20	設問19で「①積極的に参加している」「②時々参加している」と答えた人に伺います。あなたが、主に「参加している内容」を２つまでお答え下さい。	清掃活動	①	329	598	55%
		地域の祭り	②	112		19%
		ＰＴＡ・子ども会活動	③	44		7%
		防災訓練	④	326		55%
		スポーツ関連行事	⑤	39		7%
		文化関連行事	⑥	24		4%
		奉仕活動	⑦	62		10%
		交通安全活動	⑧	17		3%
		自治会・町内会活動	⑨	168		28%
		その他(	⑩	12		2%

＊全体的には、回答結果の多い順に①「清掃活動」55% ②「防災訓練」55% ③「自治会・町内会活動」28% ④「地域の祭り」19% ⑤「奉仕活動」10%、⑥「PTA・子ども会活動」7% ⑦「スポーツ関連行事」7% ⑧「文化関連行事」4%、 ⑨「交通安全活動」3%。 40年代以上は、①「防災訓練」 ②「清掃活動」の回答順。 20代は「地域の祭り」29%、30代「清掃活動」、40代・50代「防災訓練」、60代「清掃活動」70代・80代以上「防災訓練」と回答上位は異なる。

設問 21　地域の行事や活動に参加しない主な理由

設問21	設問19で「③ほとんど参加していない」と答えた人に、主な理由を２つまでお答え下さい。	時間がない	①	49	143	34%
		興味がわかない	②	28		20%
		自分に合った活動がない	③	20		14%
		健康でない	④	14		10%
		費用が掛かる	⑤	0		0%
		近くに活動がない	⑥	12		8%
		情報が入らない	⑦	43		30%
		一緒に活動する人がいな	⑧	11		8%
		参加のきっかけがない	⑨	32		22%
		参加したいと思わない	⑩	31		22%
		その他	⑪	12		8%

＊全体的には、回答の多い順から①「時間がない」34%、②「情報が入らない」30%、③「参加のきっかけがない」22%④「「参加したいと思わない」22%、 ⑤興味がわかない」20%、⑥「自分に合った活動がない」

14%、⑦「健康でない」10% ⑧「近くに活動がない」8%、⑨「一緒に活動する人がいない」8%。
年代別で、回答の一番多い理由では、２０代「情報が入らない」３７%、３０代「参加のきっかけがない」２７%、４０代「時間がない」２６%、５０代「時間がない」「情報がはいらない」１９%、６０代「時間がない」２１%、７０代「参加したいと思わない」「自分に合った活動が無い」各１８%、８０代以上「健康でない」２３%。課題とする、若者層に、情報提供の工夫による呼び掛けが浮き彫りになっている。

設問 22 ともに助け合う地域づくりに向けて、活動しやすい地域の環境について

設問22	あなたはともに助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすくなると思いますか。主なものを２つまでお答え下さい。	地域が抱えている課題の情報が提供されている	①	168	753	22%
		一緒に活動する人（仲間）がいること	②	469		62%
		個々人が気軽に参加できる活動の機会があるこ	③	399		53%
		団体や活動に関する情報が入手しやすいこと	④	96		13%
		長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること	⑤	21		3%
		ボランティア休暇など、公共的な活動に参加し	⑥	36		5%
		退職などにより、時間的なゆとりが出来ること	⑦	58		8%
		公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組	⑧	33		4%
		どんな環境でも活動したいとは思わない	⑨	14		2%
		その他（	⑩	4	1298	1%

＊全体的には、回答の多い順にまとめると、

①一緒に活動する人（仲間）がいること　62%
②個々人が気軽に参加できる活動の機会があること　53%
③地域が抱えている課題の情報が提供されていること　22%
④団体や活動に関する情報が入手しやすいこと　13%
⑤退職などにより、時間的なゆとりが出来ること　8%
⑥ボランティア休暇など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること　5%
⑦公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること　4%
⑧長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること　3%
⑨どんな環境でも活動したいとは思わない　2%

回答結果は、年代別、男女別とも傾向が同じであった。

地域参加の動向に関する考察

1. 地域における、ふれあい交流をする機会は、男女別も回答も約6割はあると回答している。
年代及び居住年数とともに、地域社会における、日常的な交流できる環境に努めていると伺えるが、20代から40代は、地域の状況が「わからない」と回答結果が高い。こうした年代層に生活圏域でふれあい出来る環境をどのように心掛けていくかの課題がある。
過去の結果と比較すると、厳しいコロナ禍の現状にでは、交流の機会が薄れてきている傾向が推察できる。
2. 今日、地域活動における「居場所」活動が積極的に取り組まれるようになり、5年前の平成28年度の調査との比較から、地域社会全体の認知度が高まっていることが理解できる。 内容も、「コミュニテイカフェ(居場所)」「趣味仲間の集まり」「いこいの広場(語らいの広場)」「食事会」「お茶会」「パソコン教室」の順の認識度が高まりつつある。しかしながら、日頃、地域との交流の機会が少ない、20・30代では「居場所」の意義と存在を知らない状況にある。 40代から50代までも同様の傾向が見られる。

実社会の福祉問題を、関係者による関係者のための取り組みにならないように、さらに、理解し合い、わかりやすく学び合う環境づくりが課題としてあげられる。

3. 厳しい「コロナ禍」の地域環境において、生活圏域における地域の見守り活動や居場所等、地域ぐるみの取り組みの協議の有無の問いかけは、今年度の調査研究活動で投げかけた重点項目の一つである。「今のところない」「わからない」「動きはある」「全体的な話し合いの場を持った」の回答結果である。
コロナ禍の今、日頃から、地域との接点を持つ努力をし、これからの地域における新たな仕組みづくりの取組みの課題について話し合う環境づくりが課題である。

4. 地域の行事や活動への参加状況は、5年前より、「参加の傾向」が約13％増加傾向にあり、 約8割は前向きである。 社会全体に、さらに、若い世代への地域参加のきっかけづくりと呼びかけの課題に取り組むことが求められる。 慣習化している、地縁組織において、一世帯一人参加でよしとした環境から、若い世代の地域参加を特に意識しながら、誰もが地域参加できる地域づくりのための仕組みを検討したい。
回答結果の多い順に「清掃活動」55％ 「防災訓練」55％ 「自治会・町内会活動」「地域の祭り」「奉仕活動」「PTA・子ども会活動」「スポーツ関連行事」「文化関連行事」「交通安全活動」
40年代以上は、①「防災訓練」 ②「清掃活動」の回答順。 20代は「地域の祭り」、30代「清掃活動」、40代・50代「防災訓練」、60代「清掃活動」70代・80代以上「防災訓練」と回答上位は異なる。

5. 地域行事・活動を拒む要因を把握し、今後の地域行事や活動の活性化に活かしたい。
今回の調査で、「参加しない主な理由」として、
①「時間がない」②「情報が入らない」③「参加のきっかけがない」④「「参加したいと思わない」⑤興味がわかない」⑥「自分に合った活動がない」⑦「健康でない」⑧「近くに活動がない」⑨「一緒に活動する人がいない」回答順である。
年代別で、回答の一番多い理由では、20代「情報が入らない」37％、30代「参加のきっかけがない」27％、40代「時間がない」26％、50代「時間がない」「情報がはいらない」19％、60代「時間がない」21％、70代「参加したいと思わない」「自分に合った活動が無い」各18％、80代以上「健康でない」3％。 ここで、若者層、特に20代・30代に、情報提供の工夫による呼び掛けが浮き彫りになっている。
こうした要因をもとに、魅力ある地域づくり、就労状況や世代に応じた呼びかけ、具体的な活動内容の情報提供等の課題解決に取り組む地域組織運営が求められる。

6. ともに助け合う地域づくりに向けて、活動しやすい地域の環境として、全体・男女別とも傾向は同じであった回答の多い順にまとめると、次の通りである。 これからの「地域づくり」に活かしたい。
①「一緒に活動する人（仲間）がいること」 ②「個々人が気軽に参加できる活動の機会があること」
③「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」 ④「団体や活動に関する情報が入手しやすいこと」 ⑤「退職などにより、時間的なゆとりが出来ること」 ⑥「公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること」 ⑦「ボランティア休暇など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること」
⑧「長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること」⑨「どんな環境でも活動したいとは思わない」

４．地域環境　（設問２３～設問２８までの６設問）

ここでは、29の設問のうち『地域環境』に関して、「地域活動の拠点の有無」「地域活動の具体的な拠点」「地域コミュニティの認識」「地域ぐるみの見守り支援体制の有無」「安心して暮らせるための支援・サービス内容」「日頃から、地域ぐるみで支え合い・助け合いの取り組で大切なこと」の6の設問を考察した。

設問 23　地域活動の拠点有無

設問23	あなたの地域には、地域活動をする活動拠点はありますか。	ある	①	456		61%
		ない	②	41		5%
		わからない	③	256	753	34%

＊全体的には、「活動拠点はある」61％、「ない」5％であったが、「わからない」34％と高い回答結果となった。

男女別では、地域に比較的関わりのある女性の認識は高い。 年代別考察では、「わからない」は、20代51％、30代56％、40代45％、50代40％と、若い世代の認識は薄い。 60代以上では約7割は「ある」回答。

設問 24　主な地域活動の拠点場所

設問24	設問23で「①ある」と回答された方にお聞きします。主なものを１つお答え下さい。	公民館	①	215	456	47%
		公会堂	②	139		30%
		集会所	③	64		14%
		企業が地域に開放した施設	④	2		0%
		個人宅解放の場所	⑤	8		2%
		神社	⑥	4		1%
		お寺	⑦	4		1%
		教会	⑧	0		0%
		コミュニテイセンター	⑨	41		9%
		その他（	⑩	4	481	1%

＊全体的には、回答の高い順にあげると、①「公民館」47％、 ②「公会堂」30％、③「集会所」14％、④「コミュニテイセンター」9％、⑤「個人宅解放の場所」2％、⑥「お寺」「神社」各1％ 。

設問 25　地域のコミュニティについての考え

設問25	あなたの地域のコミュニティについて、あなたは、どのようにお考えですか。	潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を	①	335		44%
		生活を営む上で必要は感じていない	②	78		10%
		今後、ますますその役割は薄れてくる	③	102		14%
		よくわからない	④	198		26%
		その他（	⑤	15		2%
		不明	⑥	25	753	3%

＊全体的には、回答の多い順に、

① 「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている」　44％

② 「よくわからない」　26％

③ 「今後、ますますその役割は薄れてくる」　14％

④ 「生活を営む上で必要は感じていない」　10％

⑤ 「その他」　2％

男女別の回答も同様な結果である。 年代別に見ると 若い世代ほど、「よくわからない」20代48％、30代44％、40代31％の回答。　また、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている」回答は、加齢化とともに回答は高い傾向。

過去の回答結果と比較すると、次の通りである。

項　　目	平成23年度	平成28年度	令和2年度
① 潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている	62％	47％	44％
② 生活を営む上で必要は感じていない	8％	13％	10％
③ 今後、ますますその役割は薄れてくる	8％	10％	14％
④ よくわからない	22％	25％	26％
⑤ NA	0％	5％	2％

この回答結果から、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている」認識は、微小希薄化傾向にある。

設問 26　地域に「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制の有無

設問26	あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はありますか。	地域が一体となって積極的に取り組んでいる	①	59		8%
		ある程度地域住民が取り組んでいる	②	302		40%
		どちらかというと消極的な取組みである	③	100		13%
		ほとんど活動はしていない	④	52		7%
		わからない	⑤	222		29%
		不明	⑥	18	753	2%

＊全体的には、回答の多い順に、①「ある程度地域住民が取り組んでいる」40%、② 「わからない」29%、③「どちらかというと消極的な取組みである」13%、④「地域が一体となって積極的に取り組んでいる」8% ⑤「ほとんど活動はしていない」7%。 この結果から見えるのは、今後、福祉関係者だけの取り組みから、地域住民に十分「見える化」「わかる化」していく働きかけの課題がある。

過去の回答結果を比較すると、大きな変化は見られないが、やや消極的傾向にも伺える。。

	平成23年度	平成28年度	令和2年度
①地域が一体となって積極的に取り組んでいる	8%	7%	8%
②ある程度地域住民が取り組んでいる	41%	44%	40%
③どちらかというと消極的な取組みである	11%	11%	13%
④ほとんど活動はしていない	7%	7%	7%
⑤わからない	25%	28%	29%
⑥NA	8%	3%	2%

設問 27　今後、地域において困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて

設問27	今後、あなたの地域において、困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、主なものを３つまでお答え下さい。	見守り・声かけ(安否確認)	①	516	753	69%
		移動支援	②	173		23%
		同行（買い物・通院等）支援	③	178		24%
		配食	④	76		10%
		子育て支援	⑤	89		12%
		ゴミ出し	⑥	79		10%
		調理	⑦	11		1%
		定期的なふれあいサロン(居場所)	⑧	149		20%
		掃除（草取り）	⑨	58		8%
		災害時の手助け	⑩	290		39%
		話し相手	⑪	137		18%
		趣味・特技の援助	⑫	31		4%
		簡単な介助・介護	⑬	108		14%
		洗濯	⑭	5		1%
		小動物の世話	⑮	7		1%
		お墓の掃除	⑯	5		1%
		簡単な修理	⑰	35		5%
		その他（	⑱	5	1952	1%

＊全体的に、今後、地域において困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、回答の多い順から、①「見守り・声かけ(安否確認)」69% ②「災害時の手助け」39% ③「同行（買い物・通院等）支援」24%、 ④「移動支援」23%、 ⑤「定期的なふれあいサロン(居場所)」20%、⑥「話し相手」18%、⑦「簡単な介助・介護」14%、⑧「子育て支援」12%、⑨「配食」「ゴミ出し」

各10%、⑩「掃除(草取り)」8%、⑪「簡単な修理」5%、 ⑫「趣味・特技の援助」4%、⑬「調理」1%。
すべての年代で①「見守り・声かけ(安否確認)」 ②「災害時の手助け」の回答が高い。 30代では、3番目に「子育て支援」の回答が多い。 男女別も同じ傾向の回答結果。
ご近所においては、「見守り・声かけ(安否確認)」「災害時の手伝い」等が考えられる。

設問 28 日頃から、 地域において、災害等の対応として、地域のささえあい・助け合いの取り組みとして、大切なことは何か

設問28	あなたの地域において、災害等の対応として、日頃から、地域のささえあい・助け合いの取り組みとして、大切なことは何ですか。主なものを２つまでお答え下さい。	日頃からの挨拶・声掛け等近所付き合い	①	543	753	72%
		日頃から各種会合や防災訓練に参加	②	274		36%
		地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有	③	203		27%
		地域と行政・福祉団体等との協働における支援	④	131		17%
		要支援者への災害等情報伝達体制の構築	⑤	32		4%
		災害時等に対応できる有資格・技能者の把握(地	⑥	59		8%
		災害及び地域ボランティアの育成(研修)	⑦	61		8%
		企業・学校・地域社会での「福祉教育」	⑧	36		5%
		行政・福祉団体の主導的地域との関わり	⑨	42		6%
		その他（	⑩	5	1386	1%

＊全体的に、回答の多い順から、

① 日頃からの挨拶・声掛け等近所付き合い 72%
② 日頃から各種会合や防災訓練に参加 36%
③ 地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有 27%
④ 地域と行政・福祉団体等との協働における支援体制の構築 17%
⑤ 災害及び地域ボランティアの育成(研修) 8%
⑥ 災害時等に対応できる有資格・技能者の把握(地域を総合的にコーディネート出来る人財確保と活動助成支援) 8%
⑦ 行政・福祉団体の主導的地域との関わり 6%
⑧ 企業・学校・地域社会での「福祉教育」 5%
⑨ 要支援者への災害等情報伝達体制の構築 4%

この回答順位は、男女別、年齢別も同様な傾向結果であった。

地域環境に関する考察

1. 地域活動の拠点の存在は、「公民館」「公会堂」「集会所」「コミュニテイセンター」「お寺」「神社」「個人宅解放の場所」等地域資源の「活動拠点はある」60%の認識であるが、一方で、「わからない」34%と高い回答結果となった。地域に比較的関わりのある女性の認識は高い。 また、年代別考察では、若い世代の認識は薄い。 60代以上の認識はある。 さらに、 関係者だけの認識から、地域づくりへの関心を、広く呼び掛けていく試み、特に若い世代への、日常的な働きかけが求められる。
2. 地域のコミュニティについての考えは、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている」44%「今後、ますますその役割は薄れてくる」14%、「生活を営む上で必要は感じていない」10%。「よくわからない」26%を占めている。これまでの同じ項目結果との比較では、少しずつ希薄化の傾向が伺える。
3. 地域に「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制の認識については、この設問からも「わからない」が3割ある。「ある程度地域住民が取り組んでいる」回答は約4割ある。

改めて、いま、なぜ地域の福祉活動かを、福祉関係者だけの理解から、全ての地域住民に「見える化」「わかる化」していく取り組みが課題である。

4. 今後、地域において困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについては、①「見守り・声かけ(安否確認)」 ②「災害時の手助け」 ③「同行(買い物・通院等)支援」④「移動支援」⑤「定期的なふれあいサロン(居場所)」⑥「話し相手」⑦「簡単な介助・介護」⑧「子育て支援」⑨「ゴミ出し」⑩「配食」⑪「「簡単な修理」、 ⑫「趣味・特技の援助」⑬「調理」。
男女別も同じ傾向の回答結果。すべての年代で①「見守り・声かけ(安否確認)」 ②「災害時の手助け」の回答が高い。 30代では、3番目に「子育て支援」の回答が多い。
ご近所においては、「見守り・声かけ(安否確認)」「災害時の手伝い」等が考えられる。

5. ここでは、本調査を総括した設問として、コロナ禍の今、新たなふれあい・支え合う地域づくりに向けた取り組みについて、回答の多い順にまとめると、
①日頃からの挨拶・声掛け等近所付き合い ②日頃から各種会合や防災訓練に参加 ③地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有 ④地域と行政・福祉団体等との協働における支援体制の構築 ⑤災害及び地域ボランティアの育成(研修) ⑥災害時等に対応できる有資格・技能者の把握(地域を総合的にコーディネート出来る人財確保と活動助成支援) ⑦行政・福祉団体の主導的地域との関わり ⑧企業・学校・地域社会での「福祉教育」 ⑨要支援者への災害等情報伝達体制の構築
この回答順位は、男女別、年齢別も同様な傾向結果であった。

5. 自由意見（設問 29 の 1 設問）

ここでは、設問 29 の「人・家族・地域がつながり合う これからのご近所のあり方」の問いかけに回答していただいた 485 件の意見を「年代別・男女別」にまとめた。

「男女別」では、男性の意見は204件、女性の意見は281件と、女性の意見が多かった。

「年代別」では、20代は20件、30代42件、40代46件。 50代94件、60代122件、70代131件と、加齢化とともに、ご近所への熱い思いが多く寄せられている。 80代以上は94件寄せられた。

総体的にみると、50代女性72件、60代女性72件、70代女67件、70代男性64件、60代50件、40代女性28件、30代男性22件、50代男性22件、30代女性20件、40代女性18件、80代以上男性17件、80代以上女性13件、20代男性11件、20代女性9件の順であった。

◇20代男性(11)

1. あまり参加していないのでわからない。
2. ご近所の顔と名前を知る
3. なかなか、地域の動きが伝わってこない
4. 意見ははっきり言える様な関係がよい。
5. 干渉を過度にしすぎないほど良い距離感
6. 個人のつながりを強くする
7. 情報の共有を欠かさない
8. 新しく引っ越された方の地域行事への無関心さが気になる
9. 地元に住んでいる家族でも子ども世代の地域行事への無関心さが課題
10. 独居の高齢者への訪問情報共有して孤立化を防ぐ。
11. 名前くらいは覚えておくべき。

◇20代女性(9)

1. アパート暮らしの場合、自治会から声がかからず周りに住んでいる人の情報も全然なく寂しく感じます。
2. 顔の見える関係でいること。
3. 気軽に頼みごとができる環境。
4. 最近付き合いをする人が減ってきている感じがするので近所付き合いそして災害時いざというときに助け合いができる地域づくりが大切だと思います。
5. 祭り等、地域でもちまわりで行うことの役割の負担をもっと軽減すべきだと思う。大変すぎてやりたくない!っていう人がいる。
6. 自ら地域の障害者や高齢者の人数を把握しとかないと災害時などに困ることが多くなる気がします。
7. 若い人が、組に入りたい!と思うようにしていかないといけないと思う。ゴミ捨てをするためにしぶしぶ入る方が多いように感じる。
8. 単身で住む人が増えているため、単身世帯も地域とつながれる機会が増える必要がある。
9. 日頃からの近所付き合い。

◇30代男性(22)

1. あいさつ
2. アパートを増やさない。
3. つながりを作るための訪問係が必要だと思う。(自分からは積極的に行動しない内向的な人が増えているため)
4. 挨拶
5. 一人暮らし高齢者人の支援の充足化
6. 核家族化が示す通り、家族で会っても世代間の相互理解を深めたり、ともに生活をするのは大変な面がある　家族だから、家族しか出来ること、他人だらか、他人にしか出来ることのニーズを地域で救い上げ、フォローしていく体制・仕組みづくりが必要である
7. 共働きに対する社会一般の理解とそれに伴う働き方休み方、公共整備の充実
8. 緊急時や有事の際に適切な連携が取れるよう、普段から日頃の付き合いをすることが大切だが、平時では、他の家庭の内情、個人的な事柄に不要に介入しないような適度の距離感を保つ　良い意味での無関心
9. 近所の方を知る。
10. 最低限のルールとマナーを守り続ける
11. 主婦で仕事を持っていると近所と触合う機会が全くない。
12. 深すぎ浅すぎない関係性
13. 親が家族に近所のことを伝えること
14. 組ごとに年に1回でも食事会ができれば近所について知ることができ、色々な助け合いに役立つと思う。
15. 地域のつながりのために、貴重な休みを割いてまで本当に参加する必要があるのかわからないことが多い
16. 地域の活動を紙等で伝える。
17. 地域行事の簡素化が必要だと思う。(長時間だと参加しづらいため)
18. 適度な距離感。
19. 当たり障りのない関係。
20. 日頃からの挨拶、声掛け等近所付き合いをする
21. 必要最低限での関りでコミュニケーションして緊急時に助け合う。
22. 無責任なうわさやデマが共有されるような関係にならないこと

◇30代女性(20)

1. ご近所の付き合いは、自分たちで考えればよく、強制すべきではない。
2. ご近所同士干渉などしない。
3. もしもの時に対して、強制をすべきではないと思う。
4. 挨拶をする
5. 何人家族なのか、介助が必要か等、両隣は把握しておく。
6. 顔を合わせたときに元気にあいさつ笑顔であいさつしあえるような関係でありたい
7. 気軽に声を掛け合う付き合いは大切だと思う。
8. 現状の生活スタイルに合った地域交流の検討、見直し。
9. 孤立しないよう何らかの形で誰かと繋がれる機会を持たせることは必須だと思う(強制的でも)
10. 困ったときに助け合える。
11. 困った時や災害時に手をとり合える環境作り
12. 子育てや災害時などの助け合いができるような関係でありたい。
13. 手段はその地域にあったものを模索すべきでなんでもいいということはないと考えます
14. 清掃活動等で、同じ組のひとと顔を合わせるのは大切だと思う。
15. 多様性を認め合えるような社会を創ることが必要である
16. 日々のコミュニケーションが取れ顔見知りになっておく事
17. 年配者だけではなく、若者、子育てへの支援の必要性を感じる。
18. 必要であれば地域の LINE グループを作る。
19. 防災訓練兼地域交流会をする。何も知らないのは困るけれど、過干渉も今の時代合わない。
20. 無理のない支え合い。

◇40代男性(18)

1. いつもお互い気に掛け合う関係づくり。
2. こどもたちを地域で育てること
3. コロナ禍が終息し以前のような付き合いが出来ればと思う。
4. どのような事柄にしても、まずは自分と家族による自助、次に地域による共助、そこに手を差し伸べ支援する公助があるべきだと考える
5. プライバシー保護を大切にして付き合える関係。
6. まず、家族がつながり、そして地域がつながるコミュニティが生まれ、生活様式に厚みが持たれると思う。
7. 皆が納得できるルール作り
8. 近所の人同士で助け合う活動を紹介し合う。
9. 近所は空き家ばかりで人が住んでおらず、高齢者ばかり、あと 20 年すれば近所に私一人になると思う。今後どうすればよいか考えたい。
10. 自分が困ったときに助けてもらえるように地域や近所の人、特に子供たちに貢献するのが大事「施されたら施し返す。恩返し。が重要
11. 社協ソーシャルワーカー、地域包括支援センターが連携し、福祉課題や生活課題を抱えた住民を支えるための地域ケア会議を頻度を高くして実施し、ささえあい、助け合うご近所福祉を進めていくことが大切である。
12. 若い人同士の交流

13. 多くの人のつながりの必要性を感じられるような取り組みが大切。
14. 単身者受け地域活動活性化
15. 賃貸物件に暮らす人が増加している。その方を対象に地域活動を活性化
16. 特になし
17. 日頃からあいさつや声掛けで、自分自身を知ってもらうことが大切だと思う
18. 福祉に関する理解を実践を通して学ぶ機会を地域でたくさん作っていくことが大切である。

◇40代女性(28)

1. SNS等での呼びかけ等を考えた方がよいのではないかと思う
2. お年寄りには積極的に声をかける(ゴミ出しを手伝う等)
3. ご近所さんはイザという時は支えあえる。
4. ご近所づきあいはとても大切だと思う。深い交流はなくても、名前や顔を知っているだけでも災害時等、手助けや協力がスムーズになればと思う
5. ご近所に住む子供たちとのかかわり方
6. 挨拶だけでなく日頃かの会話を心がけています。
7. 顔を合わせたら挨拶する
8. 公助だけでは解決できない課題が多くあり、個人を地域で支えることができるような地区になることが求められる
9. 高齢者が安心して暮らせるよう、この地域にもっと施設を増やしてほしい。
10. 高齢者は同居する家族がいない限り日々の暮らしは大変。近所や地域とのつながりが有ったとしても、助けてくださいとはお願いできない。
11. 災害の時など近所の人との助け合いが必要。
12. 災害時には精神的に支え合う事はできるが、主な支援は行政で決まる。
13. 私の地区は同級生がいて、お互い行き来して助け合いしている。そういうコアな人が2、3 人いてくれると思う
14. 自治会単位でなし、組・班での集まりが必要。
15. 自分自身もそうだが、子育て中の子どもの学校や習い事等で忙しい時期は地域の活動が負担と感じる方も多いと思う
16. 若い世代は、新しく地域に入っても、それほど近所づきあいには重点をおいていない　仲間とのつながりを大切にしているところはあるので、それを地域の方に向かせるのは大変なのかと感じる
17. 住んですぐに隣組の役員になったので近所の方々と親しくなれ、近所づきあいもできていると思う
18. 住民の集まるときには、役員が話せる環境を工夫すること
19. 声掛け等の近所付き合いn大切さ
20. 地域がつながり合うというところはむずかしそう。
21. 地域の夏祭り等やったり、強制ではない形でふれあう場があれば自然と顔見知りになると思います。
22. 地域活動が煩わしいと思う人が多く、ご近所が顔を合わせる機会が減少しているがやはり顔を合わせ話をすることが大事だと思う
23. 地域行事に参加し、情報共有の必要があると思う。
24. 地域行事に参加できるしやすいような地域づくり。
25. 町内会は年配が主で強い。若い人と同士であってもつながるのか。
26. 働いている人が負担にならないような方法で地域活動、コミュニティーづくりが出来ればよい

27. 同世代の仲間づくり
28. 病気等緊急時の対応を心配する

◇50代男性(22)

1. お互いのプライバシーには配慮が必要である。それぞれの家庭が抱えているニーズのほりおこしが必要。
2. お互いの立場にたつ思いやり
3. 家族が基本
4. 顔を覚えて名前を覚えたい。
5. 基本は本人の自助、家族の支えとして、地域で顔の見える関係を作っておくことが大事
6. 近所であったらまず挨拶をする。
7. 災害時に大切なのは、情報だと思うので地域のリーダーにいち早く情報が伝わる仕組みが必要であり、ローテクでも確実に伝わる事が重要と考える。
8. 新型コロナウイルスの影響により地域のイベントはすべて中止となった。これからはそういう地域になっていくと思う。高齢化もありその傾向が強まるのではないか
9. 親密な関係を築いていくこと
10. 世の中の動きに関心を持つ。
11. 組内の連帯的活動
12. 地域・自治会で独居者、高齢者世帯を支える仕組み(無理のない範囲)づくり
13. 地域のつながりとして持ち家の多い町内の組やアパートだけの組などではつながり合いという事では大きな差があり1人暮らしの人が多いので難しい課題である。
14. 地域の活動などを通して「顔の見える関係」の構築。
15. 町内の行事は多いので、そういう時に話し合う機会はあるので良いと感じている。
16. 町内会での交流など、顔の見える関係づくりを進めればよいと思う
17. 適度な距離を保ちながらも、安否確認、困ったときには助け合う。
18. 同じ意識をもつために、地域情報の共有
19. 日頃からのあいさつ程度の近所付き合いでも連帯感は維持できる。逆に濃すぎると若い世代は敬遠してしまう。
20. 日頃からの挨拶、声掛け、ご近所付き合いを大切に、地域での会合、訓練等、行事に参加
21. 別の地区から引越し、まだ 15 年弱。行政・福祉団体があいだに入り、なにか行事を計画してくれると馴染みやすい。
22. 隣近所にどんな人がすんでいるのかも知らないというのは淋しいものだし、防犯上も良くないとおもので今ぐらいの地域の行事は継続していくのがいいと思います。

◇50代女性(72)

1. あたり前の事ですが、小さなコミュニティの中がうまくいってないと、ご近所、地域とのつながりはうまくいかないと思うので、1つ1つの決まり事をそれぞれがしっかり守る事が大切だと思います。
2. ある人にとっては親切で嬉しいと感じる行いでも、別の人にとってはおせっかいでうっとおしいと感じる場合があるので、必要としている人に対して行うのが望ましい。
3. コロナ禍や年々地域の行事の簡略化で関係性が希薄になっている。2 軒以上離れている家は、ほとんど顔を合わせる機会がない。元気でいるのかどのような生活をしてるのかわからない。
4. こんなにしっかりしたアンケートは、はっきり言って難しいことばかりで、質問されてもよくわからないです。

こう言った活動は、とても大切だが、もっと気軽に取り組む。

5. ご近所さんの世代も交替しているので、近すぎず離れすぎない関係を保っていければよいかと思う
6. ご近所の情報は、常に把握しておく方がよいと思う。
7. すべての物事が「スピード化」「簡素化」されて便利さを追求する事が一番という考え方の中、本当にそうなのかを考え直すことからが始まりの気がします。
8. せめて地域の方と3軒両隣のご近所づきあいはした方が良い。
9. つかず、離れずくらいの距離感の居場所があること
10. どんなことでも話し合えること。
11. の上で自分の生活を崩さない範囲で助け合いを行っていく。
12. プライバシーを守りつつ、困った時、災害時の連携を蜜にしておく。
13. まずは明るい挨拶から行う
14. マンションアパートなどが増えご近所のつながりが薄れてきました。地域活動があったならば並べく参加し共通のコミュニティがとれるようにしたい。
15. 一昔前と比べ近所づきあいは希薄になってきていると感じています。現役世代はそれについて問題意識はないと思いますが、今後の少子高齢化時代に向け地域毎にませるのではなく、広域的に活動を見直ししていく必要があると思います。
16. 家族の情報の（ある程度）共有
17. 回覧板は大事。
18. 回覧板を渡すので、玄関にも声もかけずに置いていくのではなく一声かけて、手渡ししたいと思います。
19. 顔の見える関係づくり
20. 既存施策の見直し（地域の多様な生活課題・多様なニーズに幅に広く対応できるようにしていかければならないと思う。）
21. 気軽に話ができるつき合い。（困っていることが言える）
22. 健康でなくなった人がいることを家族から近所に申し出て欲しい。（情報の共有）
23. 個々の生活の時間がまちまちなので昔からの行事の強制的な参加は望ましくない。それぞれが主体的に参加が出来るような事を提供して欲しい。
24. 互いに助け合う気持ち、幼児期からのボランティア体験・育成
25. 広い範囲で、つなげていき、続けていく。
26. 高齢化が進み、若い世代が減少していく傾向にあるため、外とのつながりが徐々になくなっていきがちになる。そのような方の集まる場所をつくり、いざという時に助け合えるようにしていきたい。
27. 高齢化が進みお年寄りも一人暮らしが多くなってきています。40代50代も近所の人の手助けになれたらいいと思います。
28. 高齢化が進んでいるので、となり近所の声かけ、見守りはとても大事になると思います。（それと同時に、プライバシーの問題がむずかしい）
29. 高齢者が地域社会から孤立しないよう社会活動の参加を促す取組や支援が必要
30. 高齢者世帯、一人世帯が増え、人とのつながり家族との関わりが薄くなっていく。地域も若い人たちはつながりに興味がない、行政が介入していくしかないと思う
31. 困ったときには助け合う、高齢者を思いやる気持ちを持ちたい。
32. 困ったときは、お互いに気軽に助けを求められるような関係でいることが大切である。
33. 困った時に1人で悩まず、助けを気楽に言える環境をつくって欲しい。
34. 困っている人、地域の問題に取り組む地域の機関があること。

35. 困っている人がいたら助け合う
36. 災害時等情報伝達の共有
37. 山間部の超高齢化・過疎化地域に住んでいる現状として、地域住民の支えには限界があり、行政・福祉などの支援体制の充実を求めます。車もなく、バスも通っていない。外にも出られない。
38. 子どもから高齢者が参加できる行事があり、誰がどこに住み特に高齢者がどのような身体状態なのか当、少しでも把握できていると良いと思う
39. 支えあい助け合いが必要になる状況に対する体制の構築
40. 私自身も親の介護が終わり時間がある時は周りの人のボランティアとかしていきたいです。
41. 自助、共助。
42. 自分が住んでいる地域において情報を持つ事が大切だと思われます。
43. 住居環境により、地域の行事の参加の割合が違う。住人全体で参加することが必要だと思う。
44. 常に声かけができること。
45. 情報共有との個人情報の取りあつかい。
46. 情報交換
47. 人暮らしの方への日頃の声掛け近所の方々との交流。
48. 生活する場で危険な場所や災害時等に助けが必要な住民の避難経路等が周知される
49. 声をかけあう
50. 声掛けをしコミュニケーションを図る
51. 地域で気軽に参加できる行事や活動に近所の人と取り組み困った状態の時には助け合えるような関係を築いていく。
52. 地域のイベント、防災訓練などで顔合わせ位はできるようにするほうが良い。
53. 地域のコミュニティーが重要だと思うが、地域活動は減っているように思う。
54. 地域のつながりやあり方について、ルールが必要
55. 地域の行事にはなるべく参加するようにする。
56. 地区ごとの行事などにも時間が取れるなら参加しつながりを持つ事が大事だと思います。
57. 独居の高齢者な方や独り暮らしの方を近所で把握し安否確認ができるように」していてはどうでしょうか？
58. 独居の高齢者を組長、近所で支え合うようにしたい。
59. 日頃からコミュニケーションを取ることが一番大切だと思います。
60. 日頃からの、声掛け、挨拶等のつながりの持続。
61. 日頃からの挨拶、声がけある地域が大切だと思います。
62. 日頃からの挨拶、声掛け等近所付き合い
63. 日頃から近所の人との挨拶、声かけを大事にする。
64. 年齢を問わないコミュニティ・サークルづくり
65. 年齢的にも、行動範囲が限られているので、情報が届きにくい状況だと思います。
66. 非常事態の時の家族間の避難場所を常に確認しておく。
67. 夫婦だけの世帯が増え高齢化してきている。隣組単位で定期的な元気確認の場はほしい。
68. 幅広い地域活動や支援の情報提供
69. 福祉の意味を理解し合う
70. 役割分担ができる
71. 良く話し合うこと
72. 老人が増えているが、家族は仕事を持ち、支援がおぼっかない時がある近所で見守っていただけると助

かるのではないか。

◇60代男性(50)

1. 「アリの目」と「トリの目」を持つ、利他のココロで接する。
2. あいさつ＋ひと言 の声掛け
3. あいさつ毎日。
4. いい意味で自己中心に行動していく。
5. イベントへの参加。
6. コミュニティーの場を演出できる人材が必要
7. コロナ禍の中で集まる機会が減っているので、難しい。
8. まず声掛けか。難しいことではなく、懐かしいことから。
9. 挨拶をしっかりしよう。
10. 挨拶を通じて、コミュニケーションを推進する行動をとる。
11. 運動会、祭り等に参加
12. 家族、友人、仲間で解決する力！コミュニケーションのあり方！
13. 楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しい。
14. 緊急時の助け合いのため、積極的にした方が良い。
15. 近からず遠からず見守り支援
16. 近所の方とのつながりの必要性を積極的に PR すること
17. 古くからの居住者と新規居住者の意識の差は確実に存在しますが、旧来からの回覧板に加えて、ご近所情報などを LINE などを活用して、つながりの手段を増やす方法を試してみるのも一考かと
18. 公助を基本とした行政のあり方、姿勢を求める。
19. 向こう三軒両隣の再現から実施。
20. 向こう三軒両隣は、大切だと思う。
21. 高齢化社会になってきたので情報の共有の必要性
22. 思いやり
23. 自助、自分で自分を助ける。努力して自分自身で解決する力！
24. 自分と家族の状態を近所に発信していくこと。
25. 自分本意でないこと
26. 若い世代の地域を学ぶ場を意図的につくる
27. 集団で参加できる活動を増やす
28. 世代間交流を行い話し合いの機会をつくりの方法として、地域行事の取り組み、防犯訓練の実施等を行う
29. 世代交流による地域事情の把握
30. 声がけ・挨拶ができる環境
31. 声掛けをすること
32. 組ごとの会合、地域の清掃活動
33. 組織内の困った人の外部サポート（独身者、一人住まい高齢者に対して）
34. 組単位でのまとまり或る活動を確実にすること
35. 組単位での仲間意識を重視することから始めたら
36. 組内での交流

37. 地域づくりの仕組みを見える化して住民に啓発し地域環境づくりに取り組む
38. 地域のふれあいボランティア活動の構築
39. 地域の情報共有
40. 地域行事の実施により人と会う機会を増やすこと
41. 町内会活動の利用。
42. 町内活動に参加
43. 日頃からのコミュニティーの場の必要性
44. 日頃からのご近所との挨拶・声掛けが大切。
45. 日頃からの挨拶等近所付き合い
46. 日頃からの声掛け
47. 日頃からの声掛けする。
48. 非常時における世代別役割分担の明確化
49. 付かず離れずの付き合い（世代によって考え方が大きく違ってきている）
50. 民主主義を大事にしながら、地域づくりについて語り合う状況を粘り強く作っていくこと

◇60代女性(72)

1. 「プライバシーを守る」ことと「支援の在り方」との関係を皆で考える
2. あまり深く関わることは好まないが、いざといった時、助け合えるお付き合いはしておきたい
3. いこいの場所。一人でも多く居場所に参加できるように
4. いざというときにスムーズな活動ができること。
5. おせっかいにならない程度の気配り
6. お隣りのおばあちゃんが腰を痛め病院にお連れしたことがあります。
7. この地の生活者としてつながること
8. プライバシーとか言い出す昨今ですので増々地域コミュニティのあり方は薄れていくかもしれない、おせっかいな人がいても良いのではないかと思います。
9. やりすぎが迷惑になることもある　お互いの自立を考えた支援が出来るようにしたい
10. よい意味で「お節介」が必要だと思う。
11. 挨拶をする
12. 一人暮らしの高齢者が多くならない様に、近所づきあいをうまくやってほしい。
13. 家族の話し合い（別居世帯にならない様に）
14. 核家族が多く隣近所とのつながりがなくプライバシーの保護や個人情報をどこまで共有して良いのかなどが難しい問題がある。
15. 核家族や一人世帯が増えていく状況で小さい単位での活動や声がけが今まで以上に重要になってくる。
16. 核家族化が昭和40年頃より進み、その人たちの老齢化が現在であるので、地域隣人との付き合いが日頃から大切であると考える。
17. 気づき
18. 気軽にいつでも声掛けできる人間関係
19. 気軽に挨拶ができる声がけ（コミュニケーション）作り
20. 居場所　サロンの継続
21. 近所つきあいは緊急時など助け合う為にも大切。
22. 近所に人が居なくなり近所のつながりが無くなってしまう。

23. 近所の人たちとの交流
24. 近所同士の交流は、大事だと思います。
25. 見守り声掛けは大切だと思う
26. 見返りを求めず尽くすこと
27. 個人情報と情報共有の問題が難しい
28. 行政が主になり広がるとよい
29. 高齢化が進み、支える人がささえられる人になっていくので、地域で支えることに限界を感じる。
30. 高齢者世帯が多くなる傾向ですので日頃からのあいさつ・声かけが大切になってくると思います。
31. 今は、とにかく自分の健康を考え、自分に出来るボランティアがあれば参加したい。
32. 困っている時は助けてほしいが、干渉されるのは、という思いもある中での距離感の保ち方
33. 困りごとや些細なことが相談できる場所や確実な指導ができるリーダーが必要。
34. 災害が多くなりより一層近所付き合いが大事だと思います。
35. 仕事を退職したあとに考えていこうと思う
36. 私の周りは、みな親切で不安を感じない。
37. 私も年ですが障害の子がいますので、なるべく声をかけて頂きたいと思います。
38. 持続可能な体制づくりが必要老人会などは参加者が減っていて活動は休止状態になっている、継続できる仕組みを考えていきたい。
39. 自然に挨拶が交わせる地域
40. 若い家族は、地域とのつながりが少ないため、若い人も参加できる行事があるとよいと思う
41. 若い人たちと同居されているといっても日中はおひとりのお年寄りが多く一人暮らしと何ら変わらない状況の方もいらっしゃるようで見守り声がけの必要性を感じています。
42. 昭和の初めのようなご近所付き合い
43. 笑顔で挨拶を。顔つなぎを欠かさない。
44. 常に挨拶や声掛けをしてご近所づきあいをする。
45. 新興住宅として住民が集合した地域では、地域全体が高齢者となり、支えあい助け合いが難しい（市や社協の支援体制が必要）
46. 人、家族、地域お互いの気持ちが伝わる関係ができることそれが理想ではないかと思います。
47. 人・地域のつながりに感謝している。近所との助け合いを強く感じる
48. 声をかけ合う
49. 声掛けの重要性
50. 昔ながらのご近所の付き合いがあると、親戚が近くにないと、今後の安心の材料になる。
51. 増えていく、独居老人と若い人たちとのかかわり方。
52. 誰となく声をかけてあげる事
53. 地域で行われる防災訓練や会合に参加し地域の状況を理解する。
54. 地域で支え合う仕組みづくりが大切
55. 地域といっても広い範囲なので、向こう三軒両隣といつも挨拶を交わし合い、付き合いを密にしておく
56. 地域行事への参加
57. 特に、向こう三軒両隣との付き合いが大事、常に日頃から仲良くしたいもの
58. 日ごろから親しく交流していくことが大切
59. 日頃から、挨拶や声掛け等あるべきですが、現状として、日中は、若い人は仕事でいないため、回覧板もポストに入れる状況です。

60. 日頃からの挨拶
61. 日頃から近所付き合いや挨拶を大切にしている。
62. 日頃の挨拶などの積み重ねが大事だと思う
63. 日頃の声かけ、情報の共有
64. 日頃よりご近所の皆さんが一緒に汗をかく事業を継続（地域の草取り、花植え、居場所）
65. 日常の挨拶、気軽な会話
66. 年齢を重ね、人数が少なくなり、一人で居れなくなり施設等へ行く。
67. 必要以上に踏み込まない。（プライバシーを守る）
68. 奉仕心
69. 民生委員の方との情報の共有
70. 優しさや思いやり
71. 様々な生活基盤の中での平等性
72. 良いお付き合いが出来ているので感謝している。

◇70代男性(64)

1. いつまでも、健康であればと思うが、それなりの努力をしているが果たして・・・
2. おせっかい
3. ことあるときの共助の心の育成をする
4. コロナ渦にあって地域の集まりのイベントはすべて中止。こんな時でも挨拶、声掛けならしておける。
5. コロナ禍で大地震、富士山噴火に備えるため、行政（公助）がより具体的・積極的に方針（自助・共助）を示されることを希望する
6. ご近所のつながり知り合う目かけあう。
7. なんでも話し合える節度ある付き合いができる環境
8. プライバシーの侵害にならない程度に近所の動向に注意。
9. プライバシーを尊重しつつのふれあいを大切にする
10. ボランティア精神はボランティア自身の生きがいにもなっていることを知らせる
11. まずは、挨拶・声かけ
12. みんなでやる催物に若者の参加を大いに期待する
13. 挨拶、声掛け、近所づきあい
14. 挨拶と声がけ
15. 引きこもりをなくす方策
16. 縁なき衆生へ深追いは不要。
17. 家が閉鎖的な建物となり、縁側で一寸と寄るなどがしにくい。
18. 回覧板の受け渡し時の雑談は良い効果があると思う。
19. 各人の心身の健康つくりを自主的に進める
20. 核家族を少なくする
21. 関係はつかず離れず負担にならないこと
22. 顔知るためのコミュニケーション
23. 急速な少子高齢化に伴う世帯数の減少と一世帯の少数かつ高齢化による地域活動の見直し
24. 居場所づくりが大変重要
25. 共助・公助の前に自助に健康の維持、迷惑基にならないこと

26. 協力し合う心掛け
27. 近所づきあいは大切なことであるが、限度を感じる。深い付き合いは避けている王に見受けられる。
28. 近所の家族と仲良くすること
29. 近所の皆様とは最低のつながりである挨拶をしよう、人と話してみよう。
30. 近所の方との交流は大切だと思う
31. 近所付き合いを大切にしていく
32. 愚痴を消えてもらえるようなご近所
33. 現在のコロナ禍が終息しなければ大変だと思う
34. 個人情報の取り扱いについて、厳しくなってきたが逆効果では
35. 高齢化に対応するには一番身近な地域で支え合うことが大事である、そのために地域の活動には積極的に参加すべきである
36. 高齢者の引きこもりの防止と支援
37. 最終的には、個々人の意識の問題です。近所も大事なことはわかっているが、壁があるのはやむを得ないことだと思う。
38. 市民の約 3 割が高齢者となった今、高齢者を孤独にさせないことをテーマ・モットーに近所の在り方を考えることが必要と考える
39. 自分が出来る運動を実践する。話す動くを続ければ何とかつながることができると思う。
40. 自分のところで作ったものをお互いに持っていけるようなご近所
41. 若い世代との交流を深め共感関係を創る努力
42. 若者との交流機会を作る
43. 昭和の時代のような近所づきあいが大切と考えます
44. 常に一人では生きていけないという気持ちを持っていること
45. 常に語れる環境づくりに心掛ける
46. 常に話し合いを持つ活動が重要
47. 人が交わる場、機会を積極的に増やす必要がある。
48. 地域の過密化、核家族化が進んでいる中で、地域のつながりを求めること、各町内会リーダーの発想に期待したい。
49. 地域課題に目を向ける取り組み（自治会活動の活性化など）。
50. 地域活動への参加
51. 地域行事には、進んで参加する。
52. 地域住民が支え合える仕組み作り（有償ボランティアの運営など）。
53. 町内会行事や催し物に参加して交流を深めること。
54. 同一の趣味などがあると打ちとけやすいので、そのグループ化、サロン化が必要。
55. 特技で地域に役割を果たす必要とされる人材
56. 日頃から挨拶をする関係が近所づきあいの基本であると思う。
57. 日頃の挨拶の大切さ
58. 日常、気持ちの良い挨拶を交わす。
59. 防災訓練を通して、お互いの助け合いをする。
60. 防犯、災害を防ぐ話し合いは必要だともう
61. 有事の際は助け合うとして、普段は個々をを尊重したい
62. 隣人、近所がよい関係を希望していない雰囲気ではつながらない。人によることが多いと思う。適度なお節

介を受け入れる社会的合意が必要。

63. 路上であったら気軽に挨拶をするように努める。

64. 絆が希薄化になると思う。なるべく近所の人で気の合う人々と集まれる居酒屋とか喫茶店などを確保すること

◇70代女性(67)

1. 「お茶でも飲んで・・・」と声をかけやすい場所として開放していきたい。
2. おせっかいにならないように心がけたい。
3. お互いが思いやる気持ちをもつこと
4. お互いのことにあまり深入りしないこと
5. お互いのプライバシーの尊厳。
6. この地域 30 年前には子供が沢山いたが、今は 1～2 人世帯が増えている。
7. コロナ禍の中で、いかに人と人のつながりが大事かということがはっきりした。命を守るために支え合うこと、声を掛け合うことを、今まで以上に意識して行動していきたい。隣組の「寄り合い」も大事。
8. ご近所の住民は、仕事に出かけているので声をかけづらい
9. それぞれの家に、どんな人が住んでいるか知るのも必要と思う
10. まずは近隣の人を大切に、交流することだと思う。KV124
11. ますますつながりをもたなければならない社会になっていくので、個人も地域もきめ細かい対応をしていかなければならないと切に思う。
12. もっと、各家庭の中に入ってもいいと思う
13. 挨拶、声掛け等大切にしていきたいと思う
14. 挨拶から、周りに人と野声掛けをし、組の中でも仲良しグループから、お茶会やおしゃべりしたり、とにかく関わることララ始める
15. 挨拶が大切
16. 挨拶し合い、人々と気楽に付き合う
17. 一人一人の声掛けが大事
18. 家族が閉鎖的。
19. 会話
20. 近所の助け合い。
21. 近所同士の集まる機会（祝い事・弔事）が少なくなってしまったので難しい
22. 個人情報の意識が強くなり住みにくくなった。安全面で不安が多くなった。
23. 個人情報保護のこともあり問題もある。
24. 公的支援を考えている
25. 向こう三軒両隣の関わり
26. 行政地域個人協力しあい支えあう必要を感じます。
27. 高齢になってくると、人に迷惑をかけたくないという思いが強くなります
28. 高齢者の存在をめぐって家族の在り方から考える必要がある。
29. 困っていることを説きだし活動する（助け合う）
30. 些細なことでも声掛けを。
31. 最低でも、念1回は、組内の集会を持つこと（新旧組長交代時）
32. 祭、運動会など共に体を動かし、皆で楽しむことがコミュニケーションづくりに一番大切だと思うが、地域

の奉仕活動（清掃等）で近所が集まりコミュニケーションの場になる。
33. 子供から高齢者お互い大きな声で笑顔を作ると楽しいです。
34. 支援を必要とする人達を把握し地域のかかわりと行政との連携、つながりが大切
35. 私たちは少しわがままになってきている。人を許す許容力の幅がどんどん狭くなってきている
36. 私は年をとっているので家族、地域の人達とつながりをもっておいて何か事があれば助け合いたいと思います。
37. 自治会の中で安心できる目に見える情報提供が大切。
38. 自宅に、いつでも人が訪ねて来てくれる場所になりたい。
39. 自分にできるものがあればお手伝いできる
40. 自分のこととして愛情を持って接したい。
41. 自分の意見がキチンと言える地域
42. 社会参加をしよう
43. 笑顔であいさつを常に心がけます
44. 情報が大事。個人情報で、なんでも口にしない口出ししないお節介屋さんが増えるといいと思う。
45. 情報を共有すること。
46. 心身とも、健康であること
47. 進んで人との関りをもつこと
48. 人とのつながりが多くなればお互いにもっと安心して楽しい日常生活が送れる　これからの子どもたちにとっては、とても大切なこと
49. 清掃活動など家のまわりで出来る活動をふやして近所の人と話す機会をもったら良いと思います。
50. 声がけが大事だと思います。
51. 声掛け、ふれ合い、支え合えばと思う。
52. 昔の「おせかい」が必要とされる時と感じます。
53. 相手の望むことの把握
54. 他人の家庭を手助けするのも大変。手助けを必要とする人が求めてこないと大変。
55. 他人の子どもを叱ったり、よその嫁を注意したり・・・
56. 待っているだけでなく、自分からもいろんな形で声を上げる場が必要
57. 地域で個々の支援を必要とする人達の情報を共有できるシステム
58. 地域内の伝統行事（津島さん、お地蔵さん、夏祭り、体育大会等）の維持・継続を図ること（助成金）
59. 町内の一番小さな組織を大切にする
60. 町内同士の同じ世代の仲間作りをはじめた。一かけ月に一回でもみんな楽しみにしてくれている。（老人会に入る以来の人達で今まで町内会に参加しなかった人に声掛けして一緒に楽しむ会を作ってみた。）
61. 程よい距離感を保ちつつ情報交換する
62. 日頃、挨拶も会話もない状態の人がいる。表札もなく、隣近所に方に聞いても可読状態がわからない地区もあり、なかなか大変な状況である。
63. 日頃からお付き合いを大切にする（昭和の人間関係）
64. 日頃から気軽に声掛け出来る付き合いが大切と思います
65. 日頃の付き合いを大切に努力していく
66. 年
67. 隣同士でもゴミ出しの日に合う程度。定期的にコミュニケーションを図れる家を作りたい。

◇80代以上の男性(17)

1. あいさつを交わす。顔を覚える。(日常生活の中で)努力
2. かって、隣組で行われていた「寄り合い」を復活し、防災のこと、困っていること、やりたいことなど何でも近所同士が話し合い絆を強める。
3. それが第一でそこから地域全体が良くなっていくと思います。
4. デマントタクシー(安いタクシー)が必要な時期に来ていると思っている。
5. まずは自分の住んでいる組の人達との付き合いを大切にしていくこと。
6. 困ったときの助け合い。
7. 祭、運動会など自治会・町内会で今後も継続した活動の実施。
8. 市の公園を地区住民が自由に使えるように、地区の住民に管理を任せた方がよい
9. 常に誇れる地域環境を住民ひとりひとりが努力していくこと
10. 情報の共有
11. 声をかけたり、世間ばなしなど気軽な会話をしてみる。相手を理解する。知る。
12. 地域に残る行事についてより工夫して住民が楽しめる様な活動にして呼びかける。
13. 地域のつながりを持つ自治会に期待し今後もよろしくお願いする者です。
14. 地域住民の高齢化でいろんな分野で助け合う必要があります。町内会でどんな助けが必要か話し合うとよいと思います。
15. 町内の役員でないリーダーが必要。
16. 無理のないつながりを求めたい。
17. 隣り近所の人に声かけあう(いい天気だねとか)

◇80代以上の女性(13)

1. 一人暮らしのため、地域の民生委員や近所の方にこえをかけていただいています。先の暮らしは不安がありますが、今、できることを自分なりにやろうと思っています。子どもと連絡を取り合っていますが、コロナで、行き来が出来なくなっていました。
2. 遠く親戚より近くの他人でご近所と日ごろ声がけ合って親しく向き合うことが大切。
3. 個人情報保護の立場から各役員の連携が十分いかされていないように思う。情報の共有化が大切だと思う。
4. 時々地域が集まって語り合ったり、食事をしたりする機会を作ることが大切と思う。
5. 趣味、サークル等を通して人々がつながり、それが個々の広がりを作ること、その基点作りが大切。
6. 台風が来ると困るので、前の川の壁を高くしてほしい。
7. 地域で活動している団体(例えばサロン、防災組織等)と民生委員を交えて定期的話し合いを持ちたい。
8. 地域の自治会を中心に組織をしっかり作り、定期的に話し合いを持つ。
9. 地域の防災の情報、災害が起きたときの行動様式とか場所など含めて周知すること、そのための情報
10. 日頃、近所、町内会の会合には出席し顔を出す
11. 日頃から家族の対話を大切に、地域の事には、協力的な気持ちを持つように努力する。
12. 訪問型サービスＢの創設に向けてがんばりたい。
13. 防災訓練、地域の祭り等に努めて参加している

第４章　調査のまとめ

１．２５年間の「静岡発 福祉文化の創造」を基に「ご近所福祉」を検証

本会は、平成8年9月結成以来、25年間、(1)さまざまな分野で活動する人たちが、専門分野と世代を超えて交流する (2)会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざす (3)既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切にし、つねに市民生活に密着した活動をめざす の「3つの活動基調」を基に「啓発学習事業」「実践活動地区事業」「調査研究事業」の「3つの柱立て」で活動を展開してきた。

その中でも、「調査研究事業」については、この25年間、「静岡発（地方発） 福祉文化の創造」を目指し、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み，その分析結果を，県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し，世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし，県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

本調査報告書では、

※平成 ９年度　①「共働きに関する調査」
※平成 10 年度　②「私たちにとって、地域とは何かーその１－意識と実態調査」
※平成 11 年度　③「私たちにとって家族とはなにか調査」
※平成 12 年度　④「父親に関する調査」
※平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」
※平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
※平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」
※平成 16 年度　⑧「地域とはなにか―その２－意識と実態調査」
※平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
※平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
※平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
※平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査（県共同募金会助成事業）
⑬「日常生活と福祉情報に関する調査」（静岡県委託事業）
※平成 21 年度　⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 22 年度　⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る調査」（静岡県委託事業）
※平成 23 年度　⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 24 年度　⑰「家族ってなに　その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 25 年度　⑱「長寿者とつながる　ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 26 年度　⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 27 年度　⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」
※平成 28 年度　㉑「ご近所福祉　その意識と実態調査」
※平成 29 年度　㉒「居場所ってなに　その意識と実態調査」
※平成 30 年度　㉓「子どもを育む地域づくり　その意識と実態調査①」
※令和元年度　㉔「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査②」
㉕「256 名の子どもたちに聞きました　ホッとする地域ですか調査」
※令和２年度　㉖「ご近所福祉その意識と実態調査」

と、「２６のテーマ」の調査研究活動のプロセスを２５年の歩み年表と共に検証することが出来た。

今回の調査研究活動の取り組みは、厳しいコロナ禍の今、これまでのご近所の支え合いから、これからの支え合いについて、身近な生活圏域における地域課題を「福祉文化のプロセス」を基盤に、福祉コミュニティの再構築としての「真のご近所福祉」を検証し、ここに調査をまとめることとした。

さらに、今回の報告書には、地域で力強く生き、自ら生活者として、様々な長寿者問題を訴え続けてきた長寿者に多くの若者が訪問して学んだ「長寿者に学ぶ訪問型研修会」（2年間で14回にわたり延べ254名が参加）による、ご近所福祉の実像の検証、そしてそこから誕生した「若者発　ご近所福祉かるた」へのプロセスを加筆し、本会の25年間の実践的体験的福祉文化活動の歩みとして、これまで取り組んできた各種調査研究活動と共に、「静岡福祉文化を考える会」のこれからの礎としたい。

２．広く県民に協力を呼びかけ、「信頼性」と「均等化」を念頭におきながら、「基本属性」をもとに確かな課題提起が出来る努力をした

本会の調査研究活動は、結成以来、関係団体、会員、地域実践者、福祉施設、企業等の協力の元、精力的に調査研究活動に取組み、調査にあたっては、基本属性が偏らないように、調査実施中に十分連携を計りながら展開し、定期的な協議をもとに確実な調査票回収、データ入力、考察につなげられるように努力をした。　今回の基本属性をまとめると、

「性別」では、男性４５％、女性５４％と、ほぼ均等化した回答を得た。

「年代別」では、今回の調査は、２０代以上を対象にしたが、結果的には、６０代２４％、７０代２５％中心の回収となったが、２０代６％、３０代８％、４０代１３％、５０代１７％、８０代以上６％と、幅広い全年代層からの回答が寄せられた。

今回初めて、「結婚歴」を加えた。　既婚者８３％、未婚者１１％であった。

「職業別」は、年齢別との関連性で把握できたが、回答の多い順から、会社員２５％、無職２０％、主婦１７％、パート・フリーター１４％、団体職員８％、自営業６％、公務員５％、自由業１％学生等、幅広い領域から協力をいただくことが出来た。

「居住形態別」では、持家９２％中心となったが、借家６％の回答が含まれている。

「居住年数別」では、２５年以上５９％が一番多く、２５年未満１２％、１０年未満８％、５年未満８％、２０年未満７％と、地域との関わりの調査として、本音を把握できる回答内容であった。

「地域別」でコロナ禍の今、新たなふれあい・支え合う地域づくりに向けた取り組みは、今回、「焼津福祉文化共創研究会」（中部地域）の協働による調査活動であったことと、本会事務局が中部管内であることから、中部管内の回答が６５％と多くなった。東部地域１９％、西部地域１５％となった。　コロナ禍下、これまでよりもかなり回収作業が難しかったが、調査期間を約１か月間と集中した取組みをした。

「地域形態別」では、新興住宅地３５％、街部２３％、農村部１８％、海浜部１６％、山間部４％であった。　従って、調査結果は、約６０％は、やや都市型傾向のご近所福祉の現状把握になったと感じる。

「居住別」では、親と子どもだけ３６％、夫婦だけ２７％、父母や孫が同居する家族２５％、一人暮らし（死別・離婚等）６％、一人暮らし（未婚）３％の回答状況であった。大人と子供を含めた家庭・家族と地域との繋がりで、生活圏域の「ご近所」に関する意識と実態も把握出来たと感じる。

３．「協働」重視による「調査研究活動」の発展性を期待

本会の規約に「会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をめざす」と表明し結成以来25年間、出来る限り、関係団体等との協働に努めてきた。 これまでの諸活動において、

(1)「本会発行の「OUR　LIFE」の配信（HP・ブログ）・配布を通じた連携

①日本福祉文化学会　②焼津福祉文化共創研究会　③静岡県コミュニティづくり推進協議会　④県・市町社会福祉協議会　⑤焼津市内地区コミュニティ団体グループ　⑥静岡市ボランテイア団体連絡協議会　⑦あしたの日本を創る協会　⑧ふじのくに未来財団

(2)各種助成事業、福祉文化活動等を通じた連携

①静岡県　②静岡市社会福祉協議会　③あしたの日本を創る協会　④静岡県共同募金会　⑤ふじのくに未来財団　⑥静岡市ボランテイア団体連絡協議会　⑦みずほ教育福祉財団　⑧静岡県コミュニティづくり推進協議会　⑨日本福祉文化学会　⑩焼津福祉文化共創研究会

令和元年度に結成した「焼津福祉文化共創研究会」とは、ここ2年間、活動全体の連携を図りながら福祉文化実践活動に取り組んでいる。 このたび取り組んだ「ご近所福祉その意識と実態調査」については、本会がこれまで25年にわたり取り組んできた「調査研究活動」を、研究会において、活動の柱立てとして取り組むにあたり、議論を重ね、「ご近所福祉その意識と実態調査」を「静岡福祉文化を考える会」は、県域で実施し、「焼津福祉文化共創研究会」は、焼津市内の研究会管内を対象に実施し、県域で取り組んできた、過去の同類調査項目のデータを提供し比較考察することを確認した。 また、研究会は、毎月定例研究会を開催してることから、本会の調査の取り組み等も連動した研究協議をするとともに、データ入力に関する技術的な協議も共有していくこととして、ここまで活動を継続することが出来た。

特に、今年度は、日本福祉文化学会のHPと本会ブログ及び焼津福祉文化共創研究会ブログとのリンクが実現でき、こうした、調査活動の経過やデータをアップすることが可能となった。

そして、25年間の節目に、「静岡発　福祉文化の創造」の実践活動がさらに、各方面に発信できるようになり、本会活動が、さらに発展する基盤が出来たことを確認した。

４．地域との関わりの意識に関する考察からの提言

(1) 自分の住んでいる地域の人々との交流が大切であると意識している。
年代、居住年数が長いほど、交流の大切さの意識が高い。

(2)「一人でも安心して暮らせる地域」の意識は、年々高まっている。

(3)「ご近所づきあい」に対する意識は、前向きに捉え「緊急時の助け合いのためにも、日頃から積極的にした方がよい」加齢化と共にその意識は高い。

(4) “超高齢社会”の今日の「生活の支え」の意識は、全体的には「家族の支え」が高く、次に「地域の支え」「自分自身の支え」の回答順である。男女別では変化があり、男性は「家族の支え」が高く、女性は地域に目を向けている女性の意識が伺え「地域の支え」が高い。年代別では、20代は「地域社会30代「家族の支え」、40・50代「地域の支え」、60代・70代・80代以上「家族の支え」と、年代で意識の差があるが、ここで、いかに「家族の支え」が大きいこと、次に「地域（公的制度）」への期待である。

(5) 地域活動への参加の呼びかけについては、今日的な社会の厳しい動きかから、「参加する」傾向が年々高まっている。男性よりも女性の方が地域参加の意識が高い。
如何に、具体的な地域参加の呼び掛けをしていくか、また、関心のない住民への地域参加の呼び掛けの課題もある。

(6) 地域参加活動に応じると回答した全体的な参加活動内容を多い順にまとめると、
①「自治会・町内会等運営の参画」 ②「高齢者や障害者への支援」 ③「健康づくりや生きがいづくり」 ④「防災・防犯等生活安全に関する活動」　⑤「子育てや子どもの見守り」 ⑥「スポーツ・文化・レクリエーション等の活動」 ⑦「世代を超えた交流活動」 ⑧「介護者や介護を必要とする方への支

援」 ⑨「青少年健全育成活動」。年代別では、30代から50代は、「「子育てや子どもの見守り」、60代から70代は、「健康づくり・生きがいづくり」の回答が多い傾向がある。世代や取り巻く領域で、地域参加の呼び掛けの工夫が求められる。

５．地域との関わりの実態に関する考察からの提言

(1)「近所づきあいの満足度」は、全体的に約9割と高い。特に、居住年数が長いほど、満足度は高い。

(2)ご近所に親しくしていて行き来する家の状況については、前回(平成28年度)より、近所付き合いが深まっている傾向である。 若い世代ほど希薄化が伺える。

(3)ご近所の人との付き合いの状況は、「差しさわりのないことなら話せる人がいる」約6割、次に「道で会えば、挨拶する程度の人はいる」「個人的なことを相談し合える人がいる」「 ほとんど近所づきあいをしない」回答も少数あった。 女性は、男性よりも「個人的なことを相談し合える人がいる」回答が多い。

(4)毎日の暮らしの中で困った時の相談は、回答の多い順に①家族 ②友人・知人 ③親戚関係 ④近所の人 ⑤医師・保健師 ⑥自治会・町内会関係者、民生委員児童委員、地域包括支援センター。
年代別では、20代から60代までは、「友人・知人」の占める割合が「家族」の次に意外と多いが、70代以降になると、「親戚関係」が浮き彫りになっている。

(5)日常における生活情報源は、回答の多い順に①「ラジオ・テレビ」 ②「インターネット 」 ③「家族」④「新聞」⑤「友人・知人」 ⑥「行政広報誌」 ⑦「回覧板」 ⑧「自治会・町内会発行広報誌」 ⑨「口コミ」これまで、身近な生活圏域における情報源の主流は「回覧板」ともいわれてきたが、今日の生活情報源は、マスコミ、インターネットが主流と大きく変化している。 特に、20代から40代までは「インターネット」の回答が多く、50代以降は、「ラジオ・テレビ」「新聞」等マスコミからの情報源である。
今後は、「選択的情報提供」(それぞれの年代や領域において求められる情報を的確に提供できる手法)をきめ細かく精査して「見える化」「わかる化」の工夫が求められる。

(6)身近なコミュニティ組織の運営で、大きな課題を抱えているのが「地域の役員の選出」である。
今回、新たな「調査項目」として、「地域の役員等に推薦された場合」について回答を求めた。
回答結果では、「推薦に応じる」30%は、「推薦に応じない」23%を上回った回答結果となっている。
「わからない」は35%。 男性「推薦に応じる」38%と高く、女性は24%。「推薦に応じない」は、20代・30代・80代以上は高いが、40代以降は推薦に応じる」傾向が高い。「推薦に応じない 」回答の主な理由について、①「仕事がある」34% ②「自信がない」24% ③「責任のある地位につくのは煩わしい」16% ④「その他(内容によって)16% ⑤「家庭がある」10%。

６．地域参加の動向に関する考察からの提言

(1)地域における、ふれあい交流をする機会は、 年代及び居住年数とともに、地域社会における、日常的な交流できる環境に努めていると伺えるが、過去の結果と比較すると、厳しいコロナ禍の現状による、交流の機会が薄れてきている傾向が推察できる。 また、20代から40代は、地域の状況が「わからない」と回答。この年代層に生活圏域でふれあい出来る環境をどのように心掛けていくかの課題がある。

(2)地域活動における「居場所」活動が積極的に取り組まれる時代を平成28年度の調査の比較から、地域社会全体の認知度が高まっている。 内容も、「コミュニテイカフェ(居場所)」「趣味仲間の集まり」「いこいの広場(語らいの広場)」「食事会」「お茶会」「パソコン教室」の順の認識度が高まりつつある。

しかしながら、ここでも、日頃、地域との交流の機会が少ない若者層と40代から50代は、「居場所」の意義と存在を知らない状況にある。 身近な地域の福祉問題を、関係者による関係者のための取り組みから、地域ぐるみの課題解決に向けた学び合う環境づくりが課題である。

(3)厳しい「コロナ禍」の地域環境において、生活圏域における地域の見守り活動や居場所等、地域ぐるみの取り組みの協議の有無の問いかけは、今年度の調査研究活動で投げかけた重点項目の一つである。「今のところない」「わからない」「動きはある」「全体的な話し合いの場を持った」の回答の多い順の結果である。 コロナ禍の今、日頃から、一人一人が地域との接点を持つ努力をし、これからの地域における新たな生活課題に関心を持ち、課題解決への仕組みづくりの努力が求められる。

(4)地域の行事や活動への参加状況は、5年前より、「参加の傾向」が約13%増加傾向にあり、 約8割は前向きである。 社会全体に、さらに、若者層への地域参加のきっかけづくりと参加呼びかけが必要である。 地縁組織において、一世帯一人参加でよしとした慣習から、若い世代の地域参加を特に意識しながら、誰もが地域参加できる地域づくりのための仕組みの努力が必要である。

回答結果の多い順に「清掃活動」「防災訓練」「自治会・町内会活動」「地域の祭り」「奉仕活動」「PTA・子ども会活動」「スポーツ関連行事」「文化関連行事」「交通安全活動」。

40年代以上は、①「防災訓練」 ②「清掃活動」の回答順。 20代は「地域の祭り」、30代「清掃活動」、40代・50代「防災訓練」、60代「清掃活動」、70代・80代以上「防災訓練」と回答上位は異なる。

(5)地域行事・活動を拒む ①「時間がない」②「情報が入らない」③「参加のきっかけがない」④「「参加したいと思わない」⑤興味がわかない」⑥「自分に合った活動がない」⑦「健康でない」⑧「近くに活動がない」⑨「一緒に活動する人がいない」回答順の要因等を年代別に把握し、今後の地域行事や活動の活性化に活かしたい。 年代別で、回答の一番多い理由では、20代「情報が入らない」37%、30代「参加のきっかけがない」27%、40代「時間がない」26%、50代「時間がない」「情報がはいらない」19%、60代「時間がない」21%、70代「参加したいと思わない」「自分に合った活動が無い」各18%、80代以上「健康でない」3%。 ここで、若者層、特に20代・30代に、具体的な活動内容の情報提供の工夫による呼び掛けが浮き彫りになっている。

こうした要因をもとに、魅力ある地域づくり、就労状況や世代に応じた呼びかけ、情報提供等の課題解決に取り組む地域組織運営が求められる。

(6)ともに助け合う地域づくりに向けて、活動しやすい地域の環境をまとめると、次の通りである。

①「一緒に活動する人(仲間)がいること」 ②「個々人が気軽に参加できる活動の機会があること」
③「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」 ④「団体や活動に関する情報が入手しやすいこと」 ⑤「退職などにより、時間的なゆとりが出来ること」 ⑥「公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること」 ⑦「ボランティア休暇など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること」 ⑧「長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること」⑨「どんな環境でも活動したいとは思わない」 これらの地域環境を念頭にして、「これからの地域づくり」に活かしたい。

7. 地域環境に関する考察からの提言

(1) 地域活動の拠点の存在は、「公民館」「公会堂」「集会所」「コミュニテイセンター」「お寺」「神社」「個人宅解放の場所」等地域資源が認識されているが、一方で、地域活動の拠点の存在が「わからない」若い世代の認識は薄いが60代以上の認識は高い。 比較的地域と関わりのある女性の存在の認識は高い。
関係者だけの認識から、地域づくりへの関心を、特に若い世代への日常的な働きかけをもとに、広く地域全体に呼び掛けていく試みが求められる。

(2) 地域コミュニティについて「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている」考え方は、平成23年度・平成28年度と比較して、少しずつ希薄化傾向にある。また、地域コミュニティが「よくわからない」27%の回答結果である。世代を超えて、身近な地域コミュニティを学ぶ地域環境を整えたい。

(3)「地域ぐるみで見守り活動」をする地域の支援体制の認識は、「わからない」が3割。「ある程度地域住民が取り組んでいる」約4割の回答である。 改めて、いま、なぜ地域の福祉活動かを、福祉関係者だけの理解から、全ての地域住民に「見える化」「わかる化」していく取り組みが求められる。

(4) 今後、地域において困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについては、①「見守り・声かけ(安否確認)」 ②「災害時の手助け」 ③「同行(買い物・通院等)支援」 ④「移動支援」⑤「定期的なふれあいサロン(居場所)」⑥「話し相手」⑦「簡単な介助・介護」⑧「子育て支援」⑨「ゴミ出し」⑩「配食」⑪「「簡単な修理」、 ⑫「趣味・特技の援助」⑬「調理」。

特に、全ての年代で①「見守り・声かけ(安否確認)」 ②「災害時の手助け」の回答が高い。 30代では、3番目に「子育て支援」の回答が多い。 身近なご近所においては、「見守り・声かけ(安否確認)」「災害時の手伝い」等が考えられる。

(5) 本調査を総括した設問として、コロナ禍の今、新たなふれあい・支え合う地域づくりに向けた取り組みについて、回答の多い順にまとめると、

①日頃からの挨拶・声掛け等近所付き合い ②日頃から各種会合や防災訓練に参加 ③地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有 ④地域と行政・福祉団体等との協働における支援体制の構築 ⑤災害及び地域ボランティアの育成(研修) ⑥災害時等に対応できる有資格・技能者の把握(地域を総合的にコーディネート出来る人財確保と活動助成支援) ⑦行政・福祉団体の主導的地域との関わり ⑧企業・学校・地域社会での「福祉教育」 ⑨要支援者への災害等情報伝達体制の構築

＊結成2年後(平成10年)、沼津市愛鷹地区で現場セミナー

＊平成26年 7年間の県委託事業総括 報告会研修会

第５章“静岡発 福祉文化の創造”と２５年間の調査研究活動

１．２５年の歩みと調査研究活動の意義

本会は，結成以来25年間，「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに，その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み，その分析結果を，県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し，世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし，県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

ここで、本会の活動の歩みと共に、取り組んできた調査研究活動内容を、「静岡福祉文化を考える会の25年間の歩み」をもとにまとめると、次の通りである。

平成 ９年度　①「共働きに関する調査」

平成８年、本会活動１年目は「おいしい結婚まずい結婚」論議を展開した中で「共働き」を検証

平成 10 年度　②「私たちにとって、地域とは何かーその１－意識と実態調査」

「共働き」➪「地域にどう溶け込めるか」地域を知ることの重要性が浮き彫りになった

平成 11 年度　③「私たちにとって家族とはなにか調査」

「地域を知る」➪「家族・家庭の機能」希薄化していた

平成 12 年度　④「父親に関する調査」

「家族ってなにか？」➪「父親不在ではないか・・・父親の復権こそ」　そこには「友達感覚の親子像」が浮き彫りになった

平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」

「ボランティア国際年」に、県民の現状は、男性２割、女性８割

平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」

大人社会の生きがいを問う時代がきた

平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」

大人社会以上に、若者の生きがいが気になる・・・地域参加の意識が弱い

平成 16 年度　⑧「地域とはなにか―その２－意識と実態調査」

再び、「地域社会を誰が創るのか」が気になる時期を迎えた

平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）

地域社会に「子どもを取り巻く環境」が失われていることに気づき、社会環境の整備を訴える

平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）

まだまだ、子どもを取り巻く環境を危惧することから継続的な検証を試みる

平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」

世間では「団塊の世代問題」を大きく取り上げていたことから、本会でも問いただす活動とした

平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査（静岡県共同募金会助成事業）

静岡県より、全国的に、高齢者の孤立・孤独問題が出てきたことから、本会に「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の委託事業の要請を受けて取組むことになった

本会では、「高齢者」の用語を使用せず、一貫して「長寿者」の表現をして、この事業に取り組んだ　先ずは、「長寿者の生きがい・自立」を掲げた

⑬「日常生活と福祉情報に関する調査」（静岡県委託事業）

長寿者への情報提供のあり方が気になることから、県民に問い質した

平成 21 年度　⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）

長寿者を取り巻く地域社会の意識と実態が気になることから、県民全体に問い質した

平成 22 年度　⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る調査」（静岡県委託事業）

さらに、長寿者を取り巻く、身近な生活圏域の支えあいの意識と実態を問い質した

平成 23 年度　⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）

真の居場所は「家庭」と正しながら、その機能が希薄化した社会にあっては、地域に一人一人が居場所を創ることを働きかけた

平成 24 年度　⑰「家族ってなに　その意識と実態調査」（静岡県委託事業）

長寿者の孤立・孤独は、「家庭・家族機能」の弱体化から生じるのではないかを問い質した

平成 25 年度　⑱「長寿者とつながる　ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）

家庭とご近所をいかに結びつけることが大切かを問い質した

平成 26 年度　⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）

一人一人が豊かに暮らし合う地域づくりは、一体誰が担うのかを問い質した

平成 27 年度　⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」

とりわけ、若者の地域への関わりが希薄化していることを問い質すことにした

平成 28 年度　㉑「ご近所福祉　その意識と実態調査」

若者は、せめて、身近なご近所との関わりが持てる大人社会の働きかけを問い質した

平成 29 年度　㉒「居場所ってなに　その意識と実態調査」

長寿者だけが孤立・孤独になっている社会ではなく、若者の引きこもりや、中年層の閉じこもりの社会問題が浮上した　せめて、生活圏域のおける居場所をどのように創り出すことが出来るかを問い質した

平成 30 年度　㉓「子どもを育む地域づくり　その意識と実態調査①」

再び、子どもを取り巻く地域社会の生活困窮問題が、大きく子どもの生活問題まで関係した社会となり、危惧すべき状況を問い質すことにした

令和 元年度　㉔「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査②」

前年度に引き続き、子ども問題を継続的に検証することとした

㉕「256 名の子どもたちに聞きました　ホッとする地域ですか調査」

本会では、この２５年間、ほとんど青年以上を対象とした調査研究活動であった

初めての試みとして、小学生を対象に調査を実施することにした

子どもたちから、大人社会に呼びかける尊い意見が伺えた

令和２年度　㉖「ご近所福祉その意識と実態調査」

この２４年間の調査研究活動を振り返るとともに、地域コミュニティの意識と実態はどうかを検証する目的で、平成２３年度、平成２８年度、そして今回と５年毎の県民の意識と実態調査からこれからの地域づくりを検証することとした

と、「２６のテーマ」をもとに、調査研究活動に取り組んできた。　これまでの「調査研究活動」は、２５年間の本会の歩み（次ページ参照）と共に、位置付けられてきた。

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
1995 年 平成 7 年		★第10回福祉文化・静岡公開現場セミナー 「静岡発みんなで語ろう福祉文化を21世紀の礎に」 （浜松市　浜松こども園） 全国から350名、スタッフ80名		
1996 年 平成 8 年 ①	結婚とは	○設立総会（平成8年9月） 第1回公開型研修会「高校生の環境マップづくり」 ○第2回公開型研修会 「青年は広野をめざす」 ○第3回公開型研修会 「おいしい結婚まずい結婚」		No.1, 2
1997 年 平成 9 年 ②	共働き	○総会・第1回講演会・研修会（座談会） 「家庭と地域と施設を語る」 ○第2回研修会　現場研修 「老人施設と自立した長寿者」 ○第3回研修会　宿泊研修セミナー 「世代・領域を超え、福祉文化を語る」 ○第4回公開研修会　講演会 「高齢者介護の問題点」 ○第5回研修会　現場研修 「特養での実習・長寿者と語る」 ○第6回研修会　公開セミナー 「共働きについて」	第1回共働きに関する意識調査	No.3, 4, 5, 6,7, 8, 9
1998 年 平成 10 年 ③	地域とは	○総会・第1回ミーティング（研修会） 「お互いに肌の付き合いを」 ○第2回研修会　現場研修 「地域社会での活動」 ○第3回研修会　宿泊研修セミナー 「世の中どうなってるの？」 ○第4回研修会　現場研修 「障害児によせる地域の人たち」 ○第5回研修会 「映画より　障害者の声」 ○第6回研修会　参加型公開シンポジウム 「歩けなくなる日がやってくる」	第2回地域に関する意識調査（その1）	No.10, 11, 12, 13, 14
1999 年 平成 11 年 ④	家族とは	○総会・第1回研修会 「私たちにとって地域とは何か」 ○第2回研修会　合宿体験セミナー 「福祉の裏と表」 ○第3回研修会　現場研修 「在日外国人と日本語、母国の文化」 ★第18回日本福祉文化学会現場セミナー 「宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ」 ○第4回研修会　公開シンポジウム 「私たちにとって家族とは」	第3回家族に関する実態調査	No.15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22
2000 年 平成 12 年 ⑤	父親とは	○総会・第1回公開トークシンポジウム 「今日まで　そして明日から」 ○第2回研修会　合宿体験セミナー 「親と子　それぞれの言い分」 ○第3回研修会　公開シンポジウム 「福祉文化へチャレンジ　障害者の余暇文化」 ○第4回研修会　公開セミナー 「私たちにとって父親とはなにか？」	第4回父親像に関する実態調査	No.23, 24, 25, 26
2001 年 平成 13 年 ⑥	ボランティア活動とは	○総会・第1回公開トーク 「ボランティアはただ働きの代名詞か」 ○第2回研修会　公開型合宿セミナー 「何か変だぞ？ボランティア活動」 ○第3回研修会　国際年 2001 年ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ EXPO 「ボランティアはただ働きの代名詞か」 ○第4回研修会　公開シンポジウム	第5回ボランティア活動実践者の実態調査	No.27, 28, 29, 30, 31

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		「ボランティア実践者意識調査の報告」		
2002 年 平成 14 年 ⑦	働く人の暮らし	○総会・第1回公開トーク 「福祉文化の原点を探る」 ○第2回研修会　合宿セミナー 「福祉文化の創造とは」 ○★第13回日本福祉文化学会大会 in しずおか ○第1回静岡県福祉文化研究セミナー 「富士山麓いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」 ○第3回研修会　公開トーク 「生きること・働くこと楽しいですか」	第6回働くこと・生きること、生活者の意識調査	No.32, 33, 34, 35
2003 年 平成 15 年 ⑧	青年の生きがい	○総会・第1回研修会 「精神障害者の生活支援と余暇文化」 ○第2回研修会　合宿体験セミナー 「大人の言い分　青少年の言い分」 ○第3回研修会　公開型研修会 「青年の生きがいを探ろう」 ○第2回静岡県福祉文化研究セミナー 「大人も子どもも障害者も高齢者も豊かに生きるための福祉文化」	第 7 回青少年の生きがい・就労に関する意識調査	
2004 年 平成 16 年 ⑨	地域とはⅡ	○総会・第1回公開トーク 「福祉文化を創造する地域づくり」 ○第2回研修会　合宿セミナー 「町づくり・こんな町に住みたい」 ○第3回静岡県福祉文化研究セミナー 「地域福祉と福祉文化活動」 ○第3回研修会　公開研修会 「検証／福祉文化と地域づくり」	第8回地域に関する意識調査（その2）	No.36, 37, 38, 39
2005 年 平成 17 年 ⑩	子どもたちを 取りまく諸問題	○総会・第1回研修会 「福祉文化の原点を探る～子どもと地域をつなぐ」 ○第4回静岡県福祉文化研究セミナー 「つながる地域に、福祉文化を発信できる新たなまちづくりを語ろう」 ※「はっぴい祭2005」 第2回研修会 ○第3回研修会　公開型トーク 「大いに語ろう、地域ぐるみで子ども達を育むには」	第9回子どもと保護者の意識調査	No.40
2006 年 平成 18 年 ⑪	子どもたちと 地域環境	○第1回総会・自由討議 今後の「静岡福祉文化を考える会」の再生に向けて ※「わんぱくあそびフェスティバル 2006」 第2回研修会　公開型研修会 ※「はっぴい祭 2006」 第3回研修会　公開型研修会 ○第5回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡から発信する『福祉文化の創造』とはなにか」 ○第4回研修会　座談会 「子どもたち、その実情とこれからを・・・」 ○第5回研修会　公開研修会 「地域ぐるみで子どもを育む講座」	第10回子どもと社会環境に関する調査	No.41, 42, 43, 44, 45
2007 年 平成 19 年 ⑫	団塊の世代	第1回研修会　公開型研修会 全国一斉「あそびの日」キャンペーン事業 ※「わんぱくあそびフェスティバル 2007」 ○総会・第2回公開トーク 「世間は団塊の世代を議論しているが…」 第3回研修会　公開型研修会 ※「はっぴい祭 2007」 ○第6回静岡県福祉文化研究セミナー 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」から何が見えたか	第11回「地域活動」と「団塊の世代」の役割に関する調査	No.46, 47, 48, 49
2008 年	長寿者（高齢者）	○静岡福祉文化を考える会 10 周年記念誌発行	第12回県共募助成事業	No.50, 51,

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明:
★印日本福祉文化学会主催(本会共催)　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
平成 20 年 ⑬	の自立	○総会・第1回公開トーク 「地域で豊かに暮らし合うための条件－長寿者と福祉文化－」 ■第2回公開型研修会　(県委託事業) 「ほっとする居場所、ここが一番居心地がいい」 ■第3回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in ぬまづ」 ■第7回静岡県福祉文化研究セミナー (日本福祉文化学会ブロック研修)(県委託事業) 「長寿者とともに暮らす　共生社会づくりの担い手は一体誰か？」 ■県委託事業「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり4地区モデル事業」 (沼津市、富士川町、掛川市、袋井市) 第25回中日ボランティア賞受賞 平成20年度「みずほ福祉助成財団」より助成 第6回静岡市社会福祉大会会長表彰受賞 ■平成20年度県委託事業関係者連絡会 2回(7月、3月)開催	長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査 第13回県委託事業 日常生活と福祉情報に関する調査	52, 53, 54, 55
2009 年 平成 21 年 ⑭	長寿社会 (地域づくり)	○総会・第1回公開型研修会 公開トーク「共生社会と福祉文化」 ■第 2 回公開型研修会(県委託事業) 現場小セミナー 「私にとっての心安らぐ居場所って何処？」 －自宅以外の『もうひとつの家』誕生地域の支え合いを学ぶ－ ■第3回公開型研修会(県委託事業) 現場小セミナー　　公開トーク 「協働による福祉社会再構築と福祉文化を大いに語ろう」 ■第8回静岡県福祉文化研究セミナー パノラマ式討論 「長寿者とともに小地域をつなぐ仕組みづくり実現にむけて」 ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 4地区モデル事業(小山町、伊豆の国市、焼津市小川第 11 自治会、菊川市) ■第4回公開型研修会(県委託事業、焼津市小川第 11 自治会主催) 「ご近所福祉インこがわ」 ■第5回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in ぬまづ」 第5回福祉文化実践学会賞受賞 (平成22年2月 28 日に日本福祉文化学会第 20 回東京大会で受賞) ■平成21年度県委託事業関係者連絡会 3回(7月、11月、3月)開催	第14回県委託事業 長寿社会に関する県民意識と実態調査	No.56, 57, 58, 59, 60
2010 年 平成 22 年 ⑮	生活圏域の支え合い	○総会・第1回研修(公開トーク) 「一人でも安心して暮らせる地域づくりの条件」 ■第2回公開型研修会(県委託事業) 井戸端会議方式／徹底討論 「これからのご近所の支え合いはどうなるの？」 ■第3回公開型研修会(県委託事業) 追跡討論 「サロンは何をめざすのか」 ■第9回静岡県福祉文化研究セミナー オープン式 KJ 法に挑戦(第4回公開型研修会　県委託事業) 「これまでとこれから －生活圏域の支え合いの仕組みづくりの提案－」 ■第5回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in ぬまづ」 ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」	第15 回県委託事業 いまこそ、地域社会に福祉文化を拓く「生活圏域における支え合いとはなにか、本音に迫る調査」	No.61, 62, 63, 64, 65, 66

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		5地区モデル事業（藤枝市、磐田市、富士宮市、西伊豆町、沼津市） ■平成22年度委託事業関係者連絡会 3回（7月、11月3月） △福祉コミュニティ講座 「ほっとする、私が主役の福祉のまちづくりにチャレンジ」4回シリーズ △みんな仲間集まれ「ウェルフェア塾」 4回シリーズ △特別公開型研修会 共生社会実現への道程研修会		
2011 年 平成 23 年 ⑯	生活圏域で一人ひとりの居場所を考える	○総会・第1回公開型研修会全体ディスカッション 「これまでとこれから－静岡発　福祉文化の創造－」 △福祉コミュニティ講座（第 2 回公開型研修会） 住民主体の「福祉コミュニティづくり」を学ぶ －福祉施設とともに「福祉コミュニティ講座」を開講－4回シリーズ ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 5地区モデル事業（富士宮市、西伊豆町、川根本町、袋井市） ■第10回静岡県福祉文化研究セミナー（第3回公開型研修会県委託事業） 福祉文化の創造の原点に返って－世代を超えて語りあう－」 第4回公開型研修会（県委託事業、沼津市社協主催）「ご近所福祉 in ぬまづ」 ■平成23年度委託事業関係者連絡会 3回（8月、12月、3月） ■第5回公開型研修会（県委託事業） 「共生社会実現への道程研修会」 △「みんな仲間、集まれ『ウェルフェア塾』」（4回シリーズ）	第16 回県委託事業 「地域と私の居場所その意識と実態調査」	No.67, 68, 69, 70, 71, 72
2012 年 平成 24 年 ⑰	家族って何？ 私の居場所があるのか	○総会・第1回公開型研修会 「今、あらためて“家族の実情”に迫る」 －ご近所とつながる家族機能を考える－ ■第2回公開型研修会（県委託事業） 実践活動に学ぶ／グループワーク 「誰が担う？つながる地域　支え合う地域－世代を超えて、今こそ語ろう　考えようこれからの私の居場所」 △第3回公開研修会「実践活動から学ぶ―つながる地域・支え合う地域―」 ■△第4回公開研修会『福祉コミュニティ講座―地域と家族のつながりを考える―』（2回シリーズ） －地域に“私の居場所はありますかー楽しいを創造する地域とは” ■第 11 回静岡県福祉文化研究セミナー（第5回公開型） 「福祉文化と家族－これまでの家族・これからの家族」 ■第6回公開型研修会（県委託事業、沼津市社協主催） 「ご近所福祉 in ぬまづ」 △■第7回公開研修会『共生社会実現への道程研修会』 「一人でも安心して暮らせる地域づくりとは－」 △福祉コミュニティ講座（第8回公開型研修会） 「ホットな出会い　楽しい遊び」 △「みんな仲間、集まれ『ウェルフェア塾』」（6回シリーズ） ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 5地区モデル事業（熱海市、牧ノ原市、掛川市、西伊豆町、富士宮市、沼津市） ■平成 24 年度委託事業関係者連絡会 3回（7月、12 月、3月） 平成 24 年度静岡県社会福祉協議会会長賞受賞	第17 回県委託事業 今、あらためて、“家族の実像”に迫る　私にとって、家族ってなに？その意識と実態調査	No.73, 74, 75, 76, 77
2013 年 平成 25	ここが一番ホッとする私たちのご	○総会・第1回公開型研修会 「つながるご近所の再構築の決め手は？」	第18 回県委託事業 ホッとするご近所づくり　そ	No.79, 80, 81, 82, 83

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
年 ⑱	近所の居場所づくり	■第2回公開型研修会（県委託事業） 住民主体でご近所を診断 「長寿者が輝く　これからの“ご近所”を創る」 ■第3回公開研修会「ご近所の支え合いの取組みを学ぶ―実践事例からの検証―」 ■第4回公開研修会 （第 12 回福祉文化研究セミナーとして開催） 『誰がご近所福祉を創るか、これが一番、ホッとする支え合い』 ■第5回公開型研修会（県委託事業、沼津市社協主催） 「ご近所福祉 in ぬまづ」 ■第6回公開研修会 「長寿者から学ぶ“ご近所福祉”」大石さき様宅訪問 ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 7地区モデル事業（熱海市、牧ノ原市、沼津市、長泉町、島田市、御前崎市、森町） ■平成 25 年度委託事業関係者連絡会 2回（7月、3月） ■ご近所福祉カルタ制作（次年度継続）	の意識と実態調査	
2014 年 平成 26 年 ⑲	人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり	○総会・第1回公開型研修会 福祉文化ってなに？その①豊かに暮らしあえる地域を大いに語ろう」 ■第2回公開型研修会（県委託事業） 「福祉文化ってなに？その②　地域の豊かさとは何か」 ■第3回公開研修会（県委託事業） （第 13 回福祉文化研究セミナーとして開催） 「静岡発　福祉文化の創造－人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり－」 ■第4回公開研修会（県委託事業） 「鈴木君なぜ地域参加するの？　山田君なぜ地域参加しないの？」 ○第5回公開研修会 「地域の豊かさとは－静岡発　福祉文化活動からの検証－」 ■若者の「訪問型研修会」から長寿者を取り巻く地域問題解決の提言 計10回、延べ 152 名が訪問 ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 6年間の実践的活動地区の総合的検証 ■共創社会実現研究会（23名の委員構成）の設置と4回開催 ■ご近所福祉カルタ制作に向けた協議 ○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み（助成事業）	第19 回県委託事業 豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査	No.84, 85, 86, 87, 88
2015 年 平成 27年 ⑳	静岡発　福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり	○総会・第1回公開型研修会 「今こそ、静岡発　福祉文化の創造をめざして　豊かな地域づくりを語ろう」 ○第2回公開型研修会 「地域住民が集まる居場所とは」 ○第3回公開研修会 「私の地域を知っていますか、まずは地域の豊かさづくりから」 ○第4回公開研修会 「地域ぐるみの学び合いで語れる環境を創る」 ○第5回公開研修会 「福祉課題解決に、私の地域の社会資源をどう活かすか」 ○第14回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発　福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり」 ○第6回公開研修会 「福祉情報の共有化と地域の支え合い」 ○第7回公開研修会 「20年をこれからの原点に一当たり前のことが当たり前に出来る	第 20 回　若者の地域参加 その意識と実態調査	No.94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		地域とは一」 ○若者発ご近所福祉かるたの創作と地域学習の開拓 県共同募金助成事業（100セット） ○「共創社会実現研究会」設置（12 回開催） ○「若者発”居場所”あり方研究会」設置（9 回開催） ○静岡福祉文化を考える会 20 周年記念誌発行（200 部） ○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み（助成事業）		
2016 年 平成 28 年 ㉑	静岡発　福祉文化の創造とご近所福祉	○総会・第1回公開型研修会 「静岡福祉文化を考える会これまでとこれから」」 ○第2回公開型研修会 「いかに地域性を発揮したご近所福祉を創るか」 ○第3回公開研修会 「静岡発福祉文化の創造とご近所福祉を総括する」 ○第15回静岡県福祉文化研究セミナー「静岡発福祉文化の創造と豊かなご近所福祉づくり」 ○鈴与マッチングギフト助成事業による「若者発　ご近所福祉かるた」 拡大版2セット作成と活用開拓 ○「若者発　ご近所福祉かるた」の有効活用によるご近所福祉の検証及び「拡大かるた」の有効活用 ○「焼津市新しい地域支援のあり方を考えるフォーラム」運営協力 ○沼津市社会福祉協議会主催「沼津市ワークショップ」協力 ○「共創社会実現研究会」の設置（6回開催） ○常葉大学同好会「若者発“居場所”あり方研究会」への支援と協働活動の展開 ○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み（新しい地域課題・助成事業） ○焼津市教育委員会主催「おしゃべりカフェ」運営協力 ○焼津市港地域づくり推進会主催「港地域ささえあい講座」協力	第21回　ご近所福祉その意識と実態調査（調査報告書は、静岡市V連絡協議会助成により 100 部作成）	No.104, 105, 106, 107, 108, 109, 110
2017 年 平成 29 年 ㉒	ご近所福祉で集まる地域ぐるみの居場所を拓く	○総会・第 1 回公開型研修会『ご近所福祉と居場所』 ☆第 2 回公開型研修会「ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりを拓く」 ☆第 3 回公開型研修会「地域ぐるみの居場所をめざす」 ☆第 16 回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発　福祉文化の創造とほっとする居場所」 ☆「共創社会研究会」の設置（4 回開催） ○焼津市港地域づくり推進会主催「港地域ささえあい講座」協力 ○「いかずい北川原」居場所協力（焼津市） ▲あしたの日本を創る協会「新しい地域課題（全国的な課題）助成事業」 ◆平成 29 年度静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等推進助成事業 ☆ふじのくに未来財団「福祉コミュニティ再構築に向けた県民の意識と実態把握事業－ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりへの提言」助成事業 ○常葉大学同好会「若者発“居場所”あり方研究会」への支援と協働活動の展開 ○「若者発　ご近所福祉かるた」の有効活用によるご近所福祉の検証 及び「拡大かるた」の有効活用 H.29 年度静岡市表彰受賞	第 22 回　居場所ってなに？　その意識と実態調査（静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成・あしたの日本を創る協会助成・ふじのくに未来財団助成	No.111, 112,113, 114, 115, 116
2018 年 平成 30 年 ㉓	子どもを育む地域づくりとは	○総会・第1回公開型研修会 「福祉文化と子どもを育む地域づくりを考える」 ○第2回公開型研修 「支え合う地域ぐるみの“子供の居場所”を考える」	第23回　子どもを育む地域づくりその意識と実態調査 (あしたの日本を創る協会	No.118,119, 120,121

静岡福祉文化を考える会　２５年間の歩み

表示説明：
★印日本福祉文化学会主催（本会共催）　※印静岡福祉大学との共催　○印本会主催　△印社会福祉法人ハルモニアとの共催　■印静岡県委託事業
☆印ふじのくに未来財団助成事業　▲印あしたの日本を創る協会助成事業　◆印　静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		○第3回公開型研修会 「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりとは」 ○第17回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発　福祉文化の創造と子ども支援を考える」 ○焼津市港地域づくり推進会主催 「港地域ささえあい講座」協力（全4回） ○「焼津市いかずい北川原居場所」協力 ○「若者発“居場所”あり方研究会」（常葉大学同好会）への情報提供 ○「若者発ご近所福祉かるた」有効活用呼び掛け ○県内要請市町研修支援 ○第29回日本福祉文化学会大阪大会にて、「本会の23年間の福祉文化実践のプロセス」発表 ○第 30 回日本福祉文化学会東海大会側面的支援	助成）	
2019 年 平成 31 年 令和 1 年 ㉔	子どもを育む福祉ｺﾐｭﾆﾃｨの再構築と地域ぐるみのささえあいの仕組みづくり	○総会・第 1 回公開型研修会「子どもと福祉文化を語ろう」 ◆第 2 回公開型研修会「地域の子ども支援の実践に学ぶ」 ◆第 3 回公開型研修会「大人が変わる，地域が変わる，子どもが変わる，ホッとする地域とは」 ◆第 18 回静岡県福祉文化研究ｾﾐﾅｰ「福祉文化と子ども」 ◆共創社会研究会設置（3 回開催） ○「いかずい北川原」居場所協力（焼津市） ▲あしたの日本を創る協会「2019 年度全国的な課題」助成事業 ◆静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等助成事業 ○「焼津福祉文化共創研究会」協力 ○静岡県ｺﾐｭﾆﾃｨづくり推進協議会「令和発・ｺﾐｭﾆﾃｨ読本」編集協力 （「若者発　ご近所福祉かるた」掲載協力） ○「若者発　ご近所福祉かるた」（拡大かるた）の有効活用 ◆子ども実践地区検証事業（4 地区）	＊第 23 回子どもを育む地域づくり② ＊第 24 回 100 名の子どもたちに聞きましたホッとする地域ですか（静岡県社協ふれあい基金）	No.122, 123, 124,125, 126, 127
2020 年 令和2年 ㉕	つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉の復活①	○総会・第1回公開型研修会（資料配布） 「私のご近所　これからのご近所を創る」 ○第2回公開型研修会「ご近所を診断する」 ○第3回公開型研修会 「これで安心　ホッとするご近所」 ○第19回静岡県福祉文化研究セミナー 「ホッとするご近所のささえあいは誰が創る？」 ○「いかずい北川原」居場所協力（焼津市） ○「焼津福祉文化共創研究会」との協働 ○「若者発　ご近所福祉かるた」の有効活用 ○関係機関・団体との情報提供 ○本会ブログ立ち上げ ○「日本福祉文化学会」HP と「焼津福祉文化共創研究会」ブログとのリンクによる情報共有 ・みずほ教育福祉財団助成事業決定	第25回ご近所福祉その意識と実態調査」	№129,130.131 132,133,134

２．長寿者から見たご近所福祉に学ぶ

（１）若い世代がご近所を学ぶプログラム

本会では、平成20年度から平成26年度までの7年間、「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」（静岡県委託事業）に取り組んだ。 長寿者（高齢者）の地域社会からの孤立化防止が全国的に叫ばれている時期、静岡県において、様々な取組みが行われていた。

本会は、大きな社会問題となっていたこの課題に、「1年次：長寿者（高齢者）の自立」「2年次：長寿社会への課題」「3年次：生活圏域における支えあいの仕組み（ご近所福祉）」「4年次：生活圏域における一人一人の居場所を考える」「5年次：家族ってなに？私の居場所はあるか」「6年次：ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり」「7年次：人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくりー長寿者をつなぐホッとするご近所づくりー」の事業のプロセスにより、［地域総合型学習－延べ41回の公開型研修会の開催で延べ2，000名の県民参加―］「地域実践活動の検証―35市町のうち、60％の地区での実践展開―」「調査研究活動－7年間の調査研究の取り組みー」の3つの柱をもとに、課題解決に取り組んだ。

ここでは、この7年間の事業展開の中で、平成25年度・26年度の2年間「若者が長寿者から学ぶご近所福祉」を県委託事業の大きな柱立てにして、「長寿者を囲み本音で語る“ご近所福祉”のこれから」を研修テーマに、24回、延べ243名の若者（大学生）が藤枝市内にお住いの当時98歳を生き活きと暮らす長寿者宅を訪問し、尊い長寿者から学ぶ“ご近所福祉”を振り返る。

そして、今日問われている「若者の地域参加」の課題解決の一助に考察をする。 ここでは、長寿者宅を訪問した若者の意見を「全般感想」と、「若者の質問　長寿者からのアドバイス」、理論と実践から若者が気づいたことは何か、「長寿者から学んだ「身内・足元福祉」（ご近所福祉）とは何か」「若者の地域出番の必要性を問う」「世代を超えた地域総合型学習参加の感想」の5つの項目に集約した。

①長寿者宅訪問から学んだこと（全般感想）

・長寿者と話をする機会があまりないので、戦争を経験した話などとても新鮮だった（風化させない）
・私たちは、物の豊かさの中で、便利な生活をしているが、人とのつながりの面では希薄だと気付いた
・長寿者を若者が囲み話をする環境がとても新鮮だった
・長寿者が今の社会をどのように感じ、生活しているのかを知った
・戦争時代の藤枝市の悲惨さ　また、沢山の長寿者ががんばって再生してきてくれたからこそ今の日本が存在している感謝の気持ちが芽生えた
・一般の人と共に長寿者に学ぶ研修は、意味深い雰囲気であった
・長寿者の毎日充実した生活の話は、将来自分もそんな人生を送りたいと思った
・ボランティアと構えている私たちが、長寿者にボランティアをしていただいていることに気づいた
・今の福祉の現状を、我が家と重ねて考えることが出来た
・長寿者とともに、学生、地域住民、社会全体を様々な立場で考えることが出来た
・単独ではなく、他者とのつながり、関連性について考え、自分にできることを考えさせられた

・ボランティアとは学び合うこと、ご近所福祉とは、ともに支えあうことと感じた
・理論ではなく、実践的訪問型学習はリラックスして語り合うことが出来た
・長い人生を生き抜いた長寿者の話しは、強く生きること、地域福祉の一歩を学んだことになる
・長寿者のお話で元気をもらった　逆に若者が長寿者に元気を与えられる存在であることも学んだ
・長寿者と若者の話し合いは不思議な感覚を覚えたが、また話し合いたいという心地よい環境だった
・自分たちの「居場所」以上に、長寿者にとって「地域の居場所」はすごく大切であることを知った

②若者の質問と長寿者からのアドバイス（⇒印）

・私たちと同じ年代のご苦労は
⇒医療が進歩していない時代、子どもを亡くし悲しんでいる家族を見たとき（看護師時代の苦労）
・パソコン・スマートホンの存在について
⇒私たちも使ってみたいという気持ちはあるが流行についていけない　若者は社会の流れについていかなければいけないが、実際に人と会ってコミュニケーションをとることを忘れてはいけない
・人と向かい合う仕事で気を付けること
⇒相手を誤解しないように、相手をよく理解し信頼する
・家庭とは　　⇒教育的機能、保護的機能、福祉的機能、情緒安定的機能、経済的機能
・価値観、感じ方の違いをどうすればいいのか
⇒同じ気持ちで考える　互いに良い面もあるので否定することなく対等な価値観を共有する
・生きがいについて
⇒「最後の最後まで希望を持つ」「人とかかわる」「健康で気力を持つこと」「生きがいは、自分のものと、支えてくれる周りの人にある」　これが生きがいというものではなく、生きがいをつくるための周りの環境が大切
・若者の自殺が多いことについて
⇒母親の変化（精神的）がある　命の大切さをわかっていない、子どもの育て方の違い、面倒なことに耐えられないなど
・大人に直してほしいこと
⇒会話することの大切さや礼儀をもっと重んじてほしい　人は、親の背中を見て育つから親がしっかりとした礼儀作法を学ぶ必要がある
・近所の人との会話は身内のひととは違うのか
⇒違う　近所の人とは昔話もでき、身内にも言えないことがいえる　身内の人にも歩み寄ってほしい
・経験された中で役に立ったこと
⇒言葉かけをすること　大勢の人と接すること　人脈やつながりをもつこと　コミュニケーションや会話が大切であること
・現在の若者をどう思うか
⇒若者と話す接点が無かったが、ボランティアで若者たちと話したことで、若者の　気持ちが理解できる

・子供のころにやっていた遊び

⇒ゲームなど間接的な関わりでなく、顔と顔を合わせた人間関係でなければ関係は成り立たない

・昼間の居場所をもっている理由

⇒地域の方とのコミュニケーションをとると楽しく暮らしていける　自宅に閉じこもってはいけない

・一番つらかったこと

⇒乳児の死亡率が高く痩せている赤ちゃんを見るのがつらかった。楽しいことやうれしかったことを覚えていると乗り越えられる

・死について考えたことはあるか

⇒長寿者はとにかく淋しい状況　生きているうちに家族が大切にしてあげること　感謝の念をもつこと

・車中で長寿者に席を譲ったが受け入れてくれなかったが・・・・

⇒長寿者自身にも問題がある　どこかで長寿者が理解し合う学習の場を持つ必要あり「老いの準備学」

③長寿者から学んだ「身内・足元福祉」「ご近所福祉）」とは何か

・ご近所の付き合いがとても大切　自分とは違う年代と交流すること

・ご近所福祉の始まりは「挨拶」から・・・・・すぐにでも出来る行動

・最近のご近所づきあいは希薄になってしまった　家族の中でも会話が少ない長寿者にも問題があり、自立を考えなければいけない

・遠くの親戚より近くの近所づきあい、いざという時に助け合える

・長寿者と若者とのふれあい交流行事参加の場づくり

・昔は便利さより人の温かさがあった

・若者、長寿者が互いに偏見を持たない地域

・隣組が無くなり、地域で孤独、不安に生活している長寿者がいることを知った　地域で支える必要性

・家族の中で、地域の問題について話し合っていく必要がある

・近所の人との関わりが重要　そこから生きがいを見つかる

・地域の福祉どころか、身内の福祉もできていないと感じる　私たち一人一人が何をすべきかを考えていくことで、よい地域づくりにつながる　誰かがではなく、地域全体で支え合うこと

・相互に理解し、価値観を共有することが大事

・周りからの言葉かけや同じ空間にいるだけで支えになる

・地域の人を集めるのでは集まる自然な地域環境づくり

・ちょっとした距離でも、長寿者にとっては大変な距離　家族の支援を得て地域に出ていこうとする、自分の生きがいのためにする努力が求められる

・損得を考えず、ご近所づきあいのは、感覚で行われるもの

・ちょっとした一言で、長寿者が地域に必要と感じることが大切
・さりげない見守り
・ご近所との付き合いが生きがいや地域の一体感を生み出す
・近所なのに知らない人や関わらない人が多いのではなく、
他人⇒他者⇒他己という関係になっていく努力
・「家族に見捨てられた」と感じる長寿者が多い　見捨てられる思いをなくし、若者が積極的に長寿者に歩みよる
・「福祉」とは、挨拶、助け合い、親切心など、当たり前のこと
・福祉制度、サービスを考える前に、まず、身近な人への歩み寄り

④若者の「地域出番の必要性」を問う

・様々な地域行事があるが、若者の参加が少ない　もっと若者が地域活動に参加する必要性を感じる
・若者自身が積極的に多世代と交流することが大切
・中高年者には負けない体力を生かし、積極的な地域活動参加
・若者は流行にも敏感であり、そのことを利用して地域活動の場に若者を集めること
・災害が発生した際には、子どもや長寿者を優先して助けられるよう防災訓練に参加する
・訪問型ボランティアの実施
・地域について改めて知ること
・まずは挨拶（誰にでもできること）
・長寿者だけに目を向けると傾いた考え方になってしまうので、若者の考えもしっかり取り入れ地域づくりへの関わりをもつ
・若者の地域活動への参加で、次の世代へもつながる環境づくり
・地域行事にはその地域特有の歴史文化があり、長寿者・年配者の参加は必要不可欠　そこに若者が参加すれば活気が増す
同時に若者が地域の歴史文化伝統を学び、次の世代に伝えられる
・若者が地域の子どもから長寿者まで集まれる機会を作ることが必要
・若者が地域社会に積極的に参加していく必要性
若者が必要だよというメッセージがあれば、それに応じられる役割
・長寿者の経験・知恵と若者の機動力
両者が協力し合うことでよい社会となる
・長寿者に感謝し、長寿者が安心して暮らせる良い地域づくりの努力
・若者が地域との関わりがないと、ますます希薄化、孤立化が進む
・「地域のためになることをしたい」と考えている若者は大人が考えている以上に多くいるはず　その若者の力を生かすためにも、情報を発信すべきだし、若者の地域参加が増えれば、異なった世代同士の結びつきや地域活性化につながる
・若者はアルバイト、サークルなど限られた社会で過ごすことが多いそのため考え方や視野が狭い
・若者は IT に精通している　その能力を生かした地域活動への参加

・自分の地域の居場所を確保する
・自分の地域への愛着を持てるような生活を送る
・長寿者が地域で軽スポーツをする環境づくりに若者がサポートする
・若者の新しい考え方を地域社会が受け入れる工夫
・地域のリーダーシップをとる
・若者の得意な領域を長寿者に提供する　世代を超えて繋いでいく

⑤世代を超えた「地域総合型学習」参加の感想

・長寿者の話を聞き、地域に対する意識が変わった　地域の希薄化は時代の流れと思っていたが、長寿者にとって地域のつながりは大切であり、つながれば孤独死も減少する
・地域で暮らしていくことの大切さを知った　しかし施設に入る長寿者も多く、施設が悪いのではなく、若者がボランティアで施設訪問するなどもできる
・実際に会って話を聞かないとわからないことが多い　各地域での意見交換が必要
・研修会に参加して何がわかるのか疑問視したが、参加して長寿者の話を聞き多くのことを学べた　自分たちが何を求められているのか把握することが大切
・参加したことでボランティア精神についてのイメージを明確に持つことが出来た
・自分たちは責任感を持って生活しなければと感じた　長寿者が若いころしたくても出来なかった勉強は、現代では、当たり前のようにできる環境にあることを感謝しなければいけない
・世代を超えて、また普段話すことのない他の学生の意見が聞けた　一人ひとりの捉え方、考え方は違うが地域をよくしたい、長寿者を取り巻く環境をよくしたいという思いは同じであった
・私たちはもっと積極的に地域に目を向ける必要がある
・自分たちの何気ない行動を生きがいととらえてくれる方がいることなど若者の存在意義が理解できた
・昔に比べてご近所づきあいが出来ない環境となり、意図的にそのような環境をつくっていく必要性がある中、このような総合型学習から世代を超えて支え合う必要性について学ぶことができる
・若者、長寿者、子ども、みんなが共に生きていく、住みやすい地域を目指すために、それぞれの「居場所」を見つけていくこと、用意していくことが大切だと感じた
・長寿者は、自ら地域の居場所をつくっている　様々な境遇、環境に孤立孤独している長寿者がいる　若者がその方の居場所をつくったり、地域のつながりをつくっていく必要がある
・長寿者の人生談は自分にとって未知のお話であり参考になった　もっと他者と話をしてみたい
・初めて訪問した家なのに、「懐かしい」と感じた（畳のにおい、使いならされた家具等）
・社会人の幅広い年代の方とお話しすることが出来た　それぞれ違う時、場所で過ごしてきた方たちの話は、多種多様な意見があり意義あるひと時であった（たくさんのふれあいの機会を持つ必要性実感）
・家庭内では、なかなか話しあえないことを語り合えた意義は大きい

３．「若者発 ご近所福祉かるた」の誕生

本会は、志縁団体として、この25年間、市民一人ひとりがより豊かな生活環境を日々創る努力を「静岡発福祉文化の創造」に置き換えて、さまざまな福祉問題を専門分野と世代を超えて市民が、拓かれた地域社会の構築に向け、理論と実践を融合する福祉文化実践活動に取り組んできた。

特に、平成20年度から平成26年度までの7年間は「長寿者を取り巻く地域社会」をもとに、とりわけ、長寿者が安心して暮らせる身近な地域社会の再構築について、「一人でも安心して暮らせる地域づくり」と置き換え、様々な福祉文化実践活動に取り組んできた。

この活動のプロセスから、次の4つの課題が浮き彫りになった。

(1)大人社会が、積極的に若者の地域参加の機会を創ることが求められること

(2)福祉と教育の融合こそが地域を切り拓く第一歩であること

(3)専門性と市民性の協働をトータルにコーディネートすることが必要であること

(4)住民主体の共創社会へのプロセスを重視していくことが必要であること

平成26年度に、上記の課題を議論するために「共創社会実現研究会」を本会の中に設置し、地域で積極的に実践活動に取り組まれている方々に参画していただき、さらには、本会の呼び掛けで、若者に地域福祉問題を議論できる学習環境を提示し、ともども連携を図り、議論を深め合う努力をした。

若者集団は、その後、「若者発 居場所あり方研究会」の名称のもとに地域活動に取り組み、理論と実践の融合に積極的に取り組まれた。

「ご近所福祉」をどのように理解するかが大きな学習テーマとして浮き彫りになり、しばらくは、共通認識をもつために議論を重ねた。 生活圏域における助け合い、支えあいの出来る地域環境をご近所と捉えながら対等で上下をつくらない、そして、見返りを求めない、継続した関係を維持できること等を集約し、昔からの言葉「おすそ分け」の解釈をもって、理解することを一定の定義とした。

これまで、特に特化して取り組んできた活動の「長寿者の孤立・孤独防止」を念頭におきながら、単に「長寿者」だけの問題ではなく、全ての住民を対象にした地域課題解決に向けて、とりわけ、家庭・家族機能が希薄化しつつある今日、せめて、生活圏域での支えあいをいかに構築するかを話し合い、地域に居場所を創ること、地域を家庭化することが重要であると認識をしながら、これから取り組むテーマを「ご近所福祉の構築」と位置付けて、議論を深めることにした。

平成25年から平成26年の2年間に及ぶ若者層の長寿者宅訪問型研修は、その後の本会の活動を大きく発展させる起爆剤にもなった。 長寿者が安心して暮らせる生活圏域は「ご近所」そのものである。

「共創社会実現研究会」で、若者層から寄せられた尊い「標語的文章」をいかに、活かせるかを検討した結果、地域の課題を学び合う教材として「かるた」の製作提案が浮かび上がった。

これまでの活動を形にするためには、それなりの活動費（制作費）無くては前に進められない。

関係機関・団体等のアドバイスをいただき、まずは「赤い羽根共同募金助成事業」の申請手続きをすることとした。 一方、「標語的文章400件」を「かるた」の「読み札」に置き換える作業は、「共創社会実現研究会」において精力的に整理作業に取り組むとともに、「絵札」をどのように製作することが出来るか、議論を積み重ねた。 若者層への協力呼び掛け案、イラストを趣味にしている人財開拓案、学校関係者協力呼び掛け案等、幾つかの案を検討した結果、県内外で活躍され、幅広くコミュニティ活動や福祉漫画に取り組んでおられ、本会の活動にもご理解をいただいている漫画家　法月理栄様に相談し、「絵札」の作画をお引き受けしていただくことになった。「46の読み札」の決定と共に、「絵札」についても、福祉コミュニティの現場にくまなく足を運んでいただくとともに、本会が本事業に託す思いを幾度となく意見交換の場を持っていただき、具体的な作画作業に取り組んでいただいた経緯がある。

最終的に議論をしたのは「かるた」のタイトルを何にするかであった。 単なる「ご近所福祉かるた」では、単調である、静岡発はどうか・・・・・と、議論をした結果、若者層から寄せられた「標語的文章」が基になっているプロセスから、若者層が見た「ご近所福祉」をもとに制作した「かるた」として、正式名称を「若者発　ご近所福祉かるた」と決定した。

こうして、長寿者に学ぶ訪問型研修会から、「共創社会実現研究会」における議論、そして、若者層による「若者発　居場所あり方研究会」の結成と共に、若者層自ら地域活動に取り組み、広く、若者の地域参加の意義を訴えたことにより、「若者発　ご近所福祉かるた」が誕生した意義は大きい。

この「若者発　ご近所福祉かるた」には、世代を超えて、学校や地域社会、福祉施設と、学び合う中で、40の「キーワード」が託されている。

＊おすそ分け　＊専門性と市民性の融合　＊情報伝達　＊環境美化　＊趣味・特技を地域活動に活かす　＊コミュニティリーダー　＊地域ぐるみの福祉教育　＊共生社会　＊子どもの見守り
＊支え合い　＊家庭機能(家庭力)　＊居るだけのボランテイア　＊感謝の心　＊.集まる地域の居場所
＊若者の地域参加　＊長寿者の社会参加　＊他者との関係づくり　＊コミュニケーション　＊.地域文化
＊子どもの居場所　＊防災意識強化は家庭から　＊.おせっかい屋さん（世話やきさん復活）　＊健康
＊さりげない見守り　＊いつでもどこでもボランティアチャンス　＊防犯(安全)　＊ふれあい　＊小さな親切
＊地域課題の把握　＊子育て支援　＊コミュニティ　＊さりげない声かけ　＊.ご近所福祉　＊仲間づくり
＊地域づくり　＊生きがい　＊世代間交流　＊地域行事　＊地域福祉　＊相互理解

2020年度の活動テーマ、「つながるご近所の再構築　決め手は一体何かーご近所福祉の復活　近助とは何かを探るー」のもとに、これまで25年間のプロセス重視のもとに、創りあげてきた「見える」「わかる」を具現化してきた取り組みは、今後も継続的に展開する努力が求められる。 多くの若者層が積極的に地域参加し、と共に、世代を超えた領域の中で「新たな地域づくり」をめざしたい。

ここまで、「若者発　ご近所福祉かるた」誕生の経緯を綴ってきたが、平成27年度に制作した「若者発　ご近所福祉かるた」（100セット）は、どのような意図のもとに、県内各地に配布したか振り返ってみたい。
当時の「若者発　ご近所福祉かるた”配布計画」には、単に成果物を配布することが目的ではなく、いかに生活圏における支え合いのしくみを構築するかを、広く県民に課題提起をしていくことに意義がある、と示している。
そして、会員23名が積極的に地域をつなぐ実践活動の媒体とする、本会が連携している10の関係機関・団体・個人実践者10か所、若者発居場所あり方研究会の12名、福祉施設・サロン設置10か所、共創社会実現研究会委員5名、富士宮市・沼津市・掛川市・菊川市・西伊豆町各社会福祉協議会（5ヶ所×4　20セット）、NPO法人（5ヶ所×4　20セット）等において、有効活用されてきた。
当時は、あまり、具体的な活用方法を提示することなく、むしろ、どのような活用方法により。有効な展開をしたかの反応を求めてきた。

（1）従来型活用方法　（2）グループワーク的活用方法　（3）絵札の拡大コピーを会場に提示し集団活用方法
（4）課題解決型活用方法　（5）札だしジャンケンゲーム　（6）絵合わせゲーム　（7）「昔のあそび」を学ぶ

2021年度の本会の活動テーマを「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支えあいを探る」を掲げ、さらに、「見える化」「わかる化」した「若者発　ご近所福祉かるた」を積極的に活用し、新たな地域社会を創りあげたい。

第６章　資料編

１．2020 年度 静岡福祉文化を考える会活動経過記録

月 日	活　　動　　内　　容
4/01	・2020 年度　活動に関する連絡調整
4/03	・静岡市Ｖ連総会中止連絡有(年会費納入)
4/04	・静岡市内において「2019年度監査」実施
4/05	・焼津市社協に、2020年度助成事業に関する情報提供をお願いする
	・あしたの日本を創る協会より、本年度の助成事業は状況をみて告知する連絡有
4/11	・第1回 2020 年度焼津福祉文化共創研究会開催(事業計画、報告研修会協議)
	※本会との協働的活動申し出る(テーマ:ご近所福祉)
4/19	・第202回委員会及び第1回公開型研修会開催中止
4/20	・「OUR　LIFE129号」編集作業
4/21	・会員宛「調査報告書」「OUR　LIFE129号」「第1回公開型研修会資料」発送
	・「OUR　LIFE129号」を関係機関・団体等にメール送信
4/23	・「キリン福祉財団」助成事業問い合わせ実施
5/01	・「みずほ教育福祉財団」助成申請書（資機材助成）作成し、「静岡市社協推薦」依頼
5/08	・「2021 年度　キリン福祉財団」助成事業について問い合わせる
	2020 年9月要項公開⇒10 月締め切り⇒2021．3月合否発表
5/10	・「2021年度静岡県赤い羽根共同募金助成事業」申請書作成
	・「若者発　ご近所福祉かるた」印刷見積もり問い合わせ（100セット　368，000円）
5/11	・日本財団 CANPAN 登録連絡（修正・更新の必要あり）・「静岡福祉文化を考える会」要覧作成
5/12	・「2021年度静岡県赤い羽根共同募金助成事業申請書」提出（持参）・会計に関する連絡調整
5/16	・第 14 回焼津福祉文化共創研究会開催（「研究会第 8 号」発行）
5/17	・「みずほ教育福祉財団助成申請書（資機材助成）」の「静岡市社協推薦」の上提出
5/25	・静岡市清水区由比地区現地訪問実施　（協議体の取り組み状況）
5/31	・静岡市社協 VC からの「基礎調査」回答依頼有
6/01	・焼津福祉文化共創研究会として「焼津市共同募金助成事業申請書」提出
6/13	・第 15 回焼津福祉文化共創研究会開催（「研究会第 9 号」発行）
6/15	・6/21 の第2回公開型研修会の開催再確認に伴い、関連資料等の作成作業実施
	・「OUR　LIFE130号」企画・編集作業実施　　・「太陽生命財団」の助成申請
6/17	・会計に関する連絡調整　（会費納入状況確認）
6/21	・第202回委員会（会計に関する協議）及び第2回公開型研修会開催
6/23	・2021 年度共同募金助成申請書類修正指示有　再提出
	・「OUR　LIFE130号」編集発行　会員及び関係方面に発送作業
	・第 19 回県福祉文化研究セミナーチラシ作成し、会員及び関係方面に発送作業
6/30	・「OUR　LIFE130号」を関係機関・団体に PC メール送信作業実施
	・日本福祉文化学会 HP に「OUR　LIFE130号」をアップ作業依頼
7/06	・「みずほ教育福祉財団」より、プロジェクター購入費助成決定通知書届く

7/07　・弘文堂へ、「みずほ教育福祉財団助成決定」につき、「プロジェクター及びスクリーン」手配
8/01 納品と共に「器材説明会」実施の連絡有
・「焼津福祉文化共創研究会」との協働活動の為、8/1器材説明会の案内をする
7/08　・「みずほ教育福祉財団」へ「助成金振込口座届」提出
・「日本財団 CANPAN」への更新手続きとデータ入力（事務所、変更活動日、役員・会員人数、活動内容等変更）協議検討
・「第1回焼津福祉文化共創研究会第1回 IT 部会」開催（学会 HP とのリンク、調査実施について）
7/11　・新規会員2名入会確認　「第16回焼津福祉文化共創研究会」開催　本会との調査研究活動を協働で取り組むことを了解いただく
7/12　・「日本財団 CANPAN」へデータ入力作業（継続作業）
7/14　・「日本財団 CANPAN」より、ブログ開設の連絡をいただく
7/15　・会員会費未納状況確認（5名　15,000 円）
7/16　・「日本福祉文化学会事務局」へ、本会ブログと学会 HP とのリンクについて要望する
・「あしたの日本を創る協会」へ、本年度の助成申請に伴う事前協議書（全国的な地域課題）提出
7/17　・当面の機関誌「OUR　LIFE」の企画編集検討
7/18　・「太陽生命財団」の助成申請は不採用の通知有
・「鈴与マッチングギフト助成事業説明会参加申込書提出
7/19　・「ご近所福祉その意識と実態調査活動」の「調査個票」「調査実施要項」作成作業（～7/20）
7/19　・「日本福祉文化学会第1回理事会」において、本会ブログと学会 HP とのリンクについて、改めて申し出をし承認いただく
7/21　・「ご近所福祉その意識と実態調査票」作成作業（～8/1）
7/20　・本会25周年事業として「ご近所福祉その意識と実態検証報告書」作成編集検討作業
・報告書に25年間の調査研究活動のプロセスをクローズアップし、「25年の歩み年表」を挿入することとする
7/22　・日本福祉文化学会 HP と本会ブログとのリンクに関する 今後について意見調整実施
7/25　・「日本財団 CANPAN」データ入力作業一応終了の連絡をいただく
7/28　・「日本福祉文化学会」広報担当者から、学会 HP と本会ブログとのリンク作業完了の連絡有
7/29　・事務局連絡調整（学会とのリンク完了、鈴与マッチングギフト助成事業申請協議）
8/01　・9:00～11:30 「第2回焼津福祉文化共創研究会 IT 部会」開催
・「みずほ教育福祉財団」助成事業（プロジェクター及びスクリーン）の器材納品あり
引き続き、13:00～15:00「器材取扱い説明会」開催
8/02　・プロジェクター付属品購入
8/05　・本会ブログデータ入力作業（継続作業実施）
8/08　・「第17回（8月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査票内容協議）
8/10　・「鈴与マッチングギフト助成事業申請・拡大かるた」の「見積書」取り寄せ
・「2020 年度県コミュニティカレッジ開催要項」に「ご近所福祉かるた絵札」採用了解
8/14　・「第3回焼津福祉文化共創研究会 IT 部会」開催（学会 HP とのリンク、調査活動）
8/25　・「OUR LIFE131号」編集・発行し、関係機関・団体等にメール送信作業実施
8/29　・「あしたの日本を創る協会」の助成事業申請「不採用」通知届く
9/04　・「第4回焼津福祉文化共創研究会 IT 部会」開催（学会 HP とのリンク、調査活動）

	・「ご近所福祉その意識と実態調査」「フォーマット」作成作業と今後のデータ集約作業協議
9/04	・「鈴与マッチングギフト助成事業申請書」提出
9/11	・「太陽生命厚生財団助成事業」申請書「不採用」通知あり
9/12	・「みずほ教育福祉財団」助成金（10万円）振込確認
	・「第18回（9月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査データ入力作業協議）
9/16	・プロジェクター及びスクリーン代支払い
9/18	・大日三協株式会社より「ご近所福祉その意識と実態調査報告書」見積書受け取り
9/19	・「第 19 回静岡県福祉文化研究セミナー（日本福祉文化学会中部東海ブロック研修会）」開催 案内文書、「ご近所福祉その意識と実態調査」依頼文書等発送作業（700枚・70か所）
10/03	・「調査票」回収始まる（65枚）
10/03	・「第5回焼津福祉文化共創研究会 IT 部会」開催（学会 HP とのリンク、調査活動）
10/06	・「調査票」データ入力作業に関する調整作業
10/08	・西部地区の「調査票」回収見込みを検討し、新たに17か所に50枚発送作業実施
10/10	・「第 19 回静岡県福祉文化研究セミナー」に関するマスコミ対応
10/11	・本日までに「調査票」」104枚回収　本日より、データ入力作業開始
10/17	・「第19回（10月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査データ分析作業協議）
10/20	・「調査票」174枚回収（総計　486枚）
10/25	・第203回委員会（調査研究活動、当面の活動に関する協議）
	・「第19回静岡県福祉文化研究セミナー（日本福祉文化学会中部東海ブロック研修）」開催
11/10	・「OUR LIFE132 号」編集・発行し、関係機関・団体等にメール送信作業実施
	・「ご近所福祉その意識と実態調査」回収終了し、データ入力作業具体化
11/11	・「第6回焼津福祉文化共創研究会 IT 部会」開催（学会 HP とのリンク、調査集計作業状況）
11/07	・「コミュニティカレッジ in 袋井」研修において、「ご近所福祉かるた」を活用した展開実施
11/08	・御殿場市内単位老人クラブより、「ご近所福祉かるた」の問い合わせ有
11/14	・「鈴与マッチングギフト助成事業」不採用通知有
11/21	・「第20回（11月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査データ分析作業協議）
11/30	・「ご近所福祉その意識と実態調査」単純集計からクロス集計作業に移行
12/12	・「第21回（12 月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査データ分析作業協議）
1/10	・2021 年度共同募金助成申請書に関する確認事項の問い合わせ有
1/16	・「第22回（ 1月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（調査報告会の企画について） ＊「本会ブログ」のアクセス件数が急増している
	・2021 年度共同募金助成申請書に関するヒアリング開催通知有
	・2021 年度活動計画（案）作成作業
1/26	・2021 年度共同募金助成申請書に関するヒアリングに出席し、来年度の活動計画説明
2/14	・第3回公開型研修会開催　　・第204回委員会開催
	・令和2年度　25周年記念調査報告書納品
	・「第23回（ 2月）焼津福祉文化共創研究会定例研究会」開催（2021 年度計画検討）
2/28	・焼津福祉文化共創研究会主催「第2回公開型研修会」開催（調査報告）
3/31	・2020年度活動総括

２．2020 年度 静岡福祉文化を考える会活動計画

活動テーマ：つながるご近所の再構築　決め手は一体何か
ご近所福祉の復活　―近助とは何かを探る―

本会は、阪神淡路大震災発生1年後の平成8年9月に結成して、今年度は、25年目の節目の活動に入る。「災害と福祉文化」を追求する「地方発福祉文化の創造」に取り組む市民活動集団ともいえる。今日、大きな社会の変化で、災害問題をはじめ、長寿者・子どもの問題にとどまらず、地域社会全体の個人志向化・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織運営のあり方も複雑多様化した課題が浮き彫りになっている。

本会の活動の基調は、＊第一「専門性と市民性の融合の関わり」＊第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」＊第三「課題解決の向けたプロセス重視」を、結成当初から、これまで福祉実践活動に掲げて展開し、今日に至っている。この「活動基調」を基に、さらに、常に3つの柱立てをもとにの活動を展開している。

＊第1の柱立て「啓発学習事業」

「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をして「地域総合型啓発学習」に取り組んできた。

＊第2の柱立て「調査研究事業」

この24年間、一貫して、その時代の社会問題を検証する目的で、24種類の調査を県民の協力をもとに取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習を通じて、課題解決に向けた議論を深め合ってきた。

＊第3の柱立て「実践地区活動事業」

広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開しながら、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

「無縁社会」とも「有縁社会」とも置き換えられている現在の地域社会にあって今一度、「静岡発(地方発)福祉文化の創造」のもと、「家庭・家族」を基盤に、地域住民自らがその存在感をもって生活できる地域環境に関わる努力により、誰もが安心して過ごせる地域ぐるみの居場所をもち、そこから生まれてくる「ご近所」により、世代を超えて語れる環境を創りだし「当たり前のことを当たり前にできる地域づくり」に取り組む課題が求められている。

本会のこれまでのプロセス重視から、令和2年度の本会活動テーマを「つながるご近所の再構築の決め手は一体何か　―ご近所福祉の復活―」(近助とは何かを探る)を掲げる。そして、「地域環境」を再検証するとともに、地域住民一人ひとりが住み慣れた生活圏域である「ご近所の再構築」に向けて英知を出し合う。本会では、これまでに7年間静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組んだ。そして、「ホッとする私のご近所福祉を創る」をテーマに、平成25年度から平成27年度までの3年間にわたり、若者と共に「生活圏域におけるささえあいをご近所福祉」と捉え、研究協議と福祉文化実践活動の末、「若者発　ご近所福祉かるた」(赤い羽根共同募金助成事業・鈴与マッチングギフト助成事業)を企画し製作を実現化した。そして、その成果物を県内の各地に提供し、「ご近所福祉を学ぶ」教材として有効活用をしてきた。5年目を迎え、改めて、いまこそ「ご近所福祉の復活」を呼び掛け、成果物の活用度合いを把握し、この成果物こそ再デビューを呼び掛け、理論と実践の融合による「近助」を学び合う取り組みをする。

1. 令和2年度全体会（総会／第1回公開型研修会）の開催

＊日時　令和2年4月19日（日）　13:30～16:00
＊会場　静岡市葵区駿府町1－70　静岡県総合社会福祉会館　6階　602会議室
＊内容　研修テーマ：私のご近所　これからのご近所を創る」
（1）基調報告「この1年を振り返る　25年目への挑戦・ご近所福祉を創る」
（2）円卓トーク「私のご近所　これからのご近所を創る」

2. 委員会の開催

＊実務型委員会構成を基に、［代表］［副代表］［事務局長・次長］［会計］［監事］［委員］が一丸となって、活動の進捗状況管理と検証に努める。
＊原則、「公開型研修会」開催日の前段に開催する。
＊広く会員や一般社会人にも参加を呼び掛け「公開型学習会」として位置付ける。
＊必要に応じて、臨時の委員会を開催する。
＊今年度の委員会開催は、次の通り開催する。

・第1回　4月19日（日）　10:00　静岡市葵区　県総合福祉会館6階602会議室
・第2回　6月21日（日）　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内
・第3回　10月25日（日）　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内
・第4回　2月14日（日）　10:00　静岡市葵区　県総合福祉会館6階602会議室

3. 研修・討議活動

(1)公開型学習会の開催

「定例委員会」をこれにあて、会員相互の情報交換の場及び日常的な実践活動につなげる。 一般社会人参加も呼び掛ける。

(2)公開型研修会の開催

＊第1回　4月19日（日）13:30～16:00　静岡市葵区駿府町1-70　県総合社会福祉会館　6階602会議室
研修テーマ：私のご近所　これからのご近所を創る」
プログラム　（1）基調報告「この1年を振り返る　25年目への挑戦・ご近所福祉を創る」
（2）円卓トーク「私のご近所　これからのご近所を創る」

＊第2回　6月21日（日）　13:30　静岡市清水区「寄ってっ亭」内
研修テーマ『ご近所を診断』　住民主体でご近所を診断(福祉文化実践調査の取り組み)

＊第3回　2月14日（日）　13:30　静岡市葵区　県総合福祉会館6階602会議室
研修テーマ『これで安心　ホッとするご近所』

(3)「第19回静岡県福祉文化研究セミナー」の開催

＊日　時　10月25日（日）　13:00～16:30
＊会　場　　静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」
＊テーマ『ホッとするご近所のささえあいは誰が創る？』
①問題提起「誰がご近所福祉を創るか、気になるこの先・・・」
②ミニシンポ「ご近所福祉に関わって」
＊市民、民生委員、老人クラブ、ボランティア、ワーカーからひと言
③ワークショップ「ほっとする、こんなご近所福祉をめざして」
＊参加者が思い思いに主体となって、議論した末、出来ましたこれで安心“私のご近所”

(4)日本福祉文化学会中部東海ブロック活動の支援
＊学会ブロック活動の基盤強化の目的に「第30回日本福祉文化学会全国大会東海大会」において、「中部東海ブロック大会」の開催が実現した。今後も、広域的な連携ができる努力をする。

(5)関係団体等への「福祉文化実践研修」への協力

4. 調査研究活動

(1)テーマ［ご近所福祉　その意識と実態調査］の実施
＊ねらい：
「静岡福祉文化を考える会」は，この 24 年間「静岡発　福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに，その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組んでいる．　その分析結果を，県内各方面での研修会や本会の公開型研修会で公表し，世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし，県民一人ひとりの意識改革に努めてきた．
これまでの調査研究活動を振り返ると

- 平成 09 年度　①「共働きに関する調査」
- 平成 10 年度　②「私たちにとって，地域とは何かーその 1－意識と事態調査」
- 平成 11 年度　③「私たちにとって，家族とは何か調査」
- 平成 12 年度　④「父親に関する調査」
- 平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」
- 平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」
- 平成 16 年度　⑧「地域とは何かーその 2－意識と事態調査」
- 平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
- 平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
- 平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい，その意識と実態に関する調査」（県共同募金会助成事業）

⑬「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)

- 平成 21 年度 ⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 平成 22 年度 ⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとはなにか 本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
- 平成 23 年度 ⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 平成 24 年度 ⑰「家族ってなに その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 平成 25 年度 ⑱「長寿者とつながる ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 平成 26 年度 ⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 平成 27 年度 ⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 平成 28 年度 ㉑「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 平成 29 年度 ㉒「居場所ってなに その意識と実態調査」
- 平成 30 年度 ㉓「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(単純集計)
- 令和元年度 ㉔「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(県社協ふれあい基金助成事業)
- 令和元年度 ㉕「256 名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか」(県社協ふれあい基金助成事業)

と,「24のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた. 通算 25 回目となる今年度は, 活動テーマ:つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉の復活 ―近助とは何かを探る―」に基づき、「ご近所福祉 その意識と実態調査」に取り組む。

a 調査項目は, (1)基本属性 (2)生活状況 (3)家庭・家族のこと (4)ご近所に関する意識に関すること (5)ご近所に関する実態に関すること (6)ご近所への期待に関すること (7)ご近所との関わりに関すること (8)自由意見 の 8 項目とする. 細部は「調査部会」で具体化する.

b 調査の展開:(1)調査実施期間(8 月～9 月), (2)入力期間(10 月～11 月), (3)分析・考察(12 月～1 月), (4)公表(3 月)を予定

c 対 象 静岡県内に居住する県民 20 代以上300名

d 回収目標 150 名程度

(2)日本福祉文化学会ブロック活動において「地方発 福祉文化の創造 県民へのアクション 25 年のプロセス」実践報告

(3) 「自主的共創社会実現研究会」の設置と運営

「活動テーマ」に基づき、県内実践活動者を中心に「自主的共創社会研究会」を設置し、実践活動からご近所福祉について、各参加者等から広く意見を求め、具体的な課題を基に、これからの地域づくりへの提言をまとめる。

5. 広報・啓発活動

(1)「機関紙発行計画」に基づき『OUR LIFE』の発行

＊年5回 A4版 4ページ構成 色上質紙印刷 500部発行

＊各号共通記事「日本福祉文化学会情報」「円卓おしゃべり」「事務局日誌拝見」「編集後記」

①年4回 A4 版 4 ページ構成 上質紙印刷 200 部発行

②各号共通記事:「コラム」「事務局日誌拝見」「編集後記」

- 第 129 号(05/12)『25 年目の地方発福祉文化の創造にトライ』
- 第 130 号(07/15)『近助を探る いま地域で何が起こっているか』
- 第 131 号(12/12)『協働社会で地域を変える』
- 第 132 号(03/25)『25年間を振り返る 新たな節目に向かって』

③「地方発福祉文化の創造」論議を会員及び関係方面に具体的に情報発信する.

④「学会ブロック通信」発行と連動し, 学会 HP への紹介を依頼する.

⑤今年度取り組む「近助」をテーマとした課題提起, 地域・団体・グループとの連携の状況, 各地区から寄せられた実践活動の取り組み等を紹介する.

(2)マスコミ, 関連団体への情報提供

6. 実践活動「若者発 ご近所福祉かるた」の積極的・有効的活用で「ご近所福祉」の検証

7 年間の県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」から浮き彫りになった“ご近所福祉の再構築”を若者の視点から論議を深め, 提言された読み札を精査し, 「若者発“居場所”あり方研究会」の全面的な支援のもとに「かるた」の創作に取り組み, 平成 27 年度に「若者発 ご近所福祉かるた」を 100 セット作成し 5 年目を迎えた。また平成 28 年度に作成した「若者発 ご近所福祉かるた 拡大版」2 セットを有効活用して 4 年目. 幼児から大人まで, 身近な地域の実践活動の場や行事の中で, 「地域総合型学習」として楽しみながら活用し, 安心して暮らし合う生活圏域づくりをめざす。

会員をはじめ, 関係機関・団体・個人, 各研究会会員, 施設・グループ・サロン等に配布・設置した 100 セットの「かるた」の活用状況を把握し, 「ご近所福祉」を検証し, 地域社会に課題提起をしていく。

7. 現場視察研修

県内の「ご近所のささえあい活動」の実践活動地域を訪問検証し, これからの地域社会づくりへの提言につなげる.

8. コミュニティ組織との連携

コミュニティ組織との連携に努め, 「ご近所」について, 広く地域住民の意見を把握することに努める.

9. 関係・団体との協働・連携

(1)静岡県社会福祉協議会及び市町社協との連携(情報提供)

(2)静岡県コミュニティづくり推進協議会との連携(情報提供)

(3)日本福祉文化学会及び中部東海ブロック会員との情報交換

(4)関連大学・専門学校への情報提供

(5)静岡市ボランティア連絡協議会との連絡調整

(6)県内外の「関連研究会と「近助」に関する情報共有の機会を持つ

(7)福祉コミュニティ組織における実践的取り組みをしている地域の把握と情報交換

(8)「若者発 ご近所福祉かるた」及び「拡大かるた」設置団体等との日常的連携(施設, NPO 法人, V グループ)

(9)焼津福祉文化共創研究会による、小地域福祉活動との連携による「近助」の取り組みの現場に学ぶ実践活動を県域に共有していく

３．2021 年度（令和３年度）静岡福祉文化を考える会活動計画（案）

活動テーマ：地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る

阪神淡路大震災発生一年後、「災害と福祉文化」を追求する「地方発福祉文化の創造」に取り組む市民活動団体として結成（平成8年9月）して26年目を迎えた。 結成当初から、「3つの活動基調」を掲げてきた。

＊第一「専門性と市民性の融合の関わり」

＊第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」

＊第三「課題解決の向けたプロセス重視」

この「活動基調」をもとに、さらに、次の「3つの柱立て」をもとに25年間活動を展開してきた。

＊第1の柱立て「啓発学習事業」

「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をして「地域総合型啓発学習」に取り組んできた。

＊第2の柱立て「調査研究事業」

県民の協力により、一貫して、その時代の地域社会問題をテーマに調査研究活動に取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習をし、課題解決に向けた議論を深めてきた。

＊第3の柱立て「実践地区活動事業」

広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」のもとに、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開し、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

いま、厳しい社会情勢に直面し、改めて、いかにして、つながる・支え合う地域社会づくりが出来るか問われる時期でもある。 本会が調査研究事業で追求してきた「地域コミュニティ」は、年々、地域社会全体の個人志向化・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織運営の難しさも感じている。

今こそ、「当たり前のことが当たり前にできる社会」「助け合い、助けられる地域社会」を再構築するために、本会のこれまでのプロセス重視から、令和3年度の本会活動テーマを「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る」を掲げる。

そして、「地域環境」を再構築するために、地域住民一人ひとりが、住み慣れた生活圏域で「ご近所のささえあい」に向けた新たな取り組みを検証する。

本会では、これまでに7年間静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組んだ。そして、「ホッとする私のご近所福祉を創る」をテーマに、平成25年度から平成27年度の3年間、若者と共に「生活圏域におけるささえあい」（ご近所福祉）を議論し合い、福祉文化実践活動を展開し、「若者発ご近所福祉かるた」（赤い羽根共同募金助成事業・鈴与マッチングギフト助成事業）を企画製作し、県内各地に、具体的な「住民福祉教育」の推進に役立てる「ご近所福祉を学ぶ」教材として有効活用した。

「若者発　ご近所福祉かるた」が誕生して7年目を迎えた今、いまこそ「ご近所福祉の復活」を願い、これまでの成果物の有効活用度合いを把握するとともに、「焼津福祉文化共創研究会」との協働により、新たに「共創社会実現研究会」を立ち上げ、さらに、様々な領域における「ご近所福祉の見える化・わかる化」の取り組みが拡大できる環境を開拓し、「ご近所福祉かるた利用の手引き」の作成を通じて、より、実践的・体験的地域活動を呼びかける。

1．令和3年度全体会（総会／第1回公開型研修会）の開催

＊日時　令和3年5月22日（日） 13:30～16:00

＊会場　静岡市清水区追分3-5-17 「寄ってい亭」

＊内容　研修テーマ:「ご近所福祉その意識と実態」からの課題提起を探る」

(1)基調報告①「この2020年を振り返る　26年目への挑戦・ご近所福祉の意義」

(2)基調報告②「若者発　ご近所福祉かるたの誕生」

(3)円卓トーク「ご近所福祉を創り出すコツ」

2. 委員会の開催

＊実務型委員会構成を基に、[代表][副代表][事務局長・次長][会計][監事][委員]が一丸となって、活動の進捗状況管理と検証に努める。

＊原則、「公開型研修会」開催日の前段に開催する。

＊広く会員や一般社会人にも参加を呼び掛け「公開型学習会」として位置付ける。

＊必要に応じて、臨時の委員会を開催する。

＊2021度の委員会開催は、次の通り開催する。

・第1回　4月24日(土)　13:30　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

・第2回　5月22日(土)　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

・第3回　7月　3日(土)　13:30　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

・第4回　9月11日(土)　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

・第5回　11月27日(土)　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

・第6回　2月26日(土)　10:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

3. 研修・討議活動

(1)公開型学習会の開催

「定例委員会」をこれにあて、会員相互の情報交換の場及び日常的な実践活動につなげる。 一般社会人参加も呼び掛ける。

(2)公開型研修会の開催

＊第1回　令和3年5月22日(日)　13:30～16:00

・会場　静岡市清水区追分3-5-17 「寄ってっ亭」

・内容　研修テーマ:「ご近所福祉その意識と実態」からの課題提起を探る」

(1)基調報告①「この2020年を振り返る　26年目への挑戦・ご近所福祉の意義」

(2)基調報告②「若者発　ご近所福祉かるたの誕生」

(3)円卓トーク「ご近所福祉を創り出すコツ」

＊第2回　9月11日(土)　13:30～16:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

研修テーマ『住民福祉教育の成果とご近所福祉かるたの活用』

＊　住民主体のご近所福祉構築に向けた「ご近所福祉かるた」の有効活用を探る

＊第3回　2月26日(土)　13:30～16:00　静岡市清水区「寄ってっ亭」内

研修テーマ『地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る』

＊　各領域におかる「ご近所福祉かるた」の活用事例に学ぶ

(3)「第20回静岡県福祉文化研究セミナー」の開催

＊日　時　11月27日（土）　13:30～16:00

＊会　場　　静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」

＊テーマ『ご近所福祉と福祉文化』

①基調報告①「福祉文化実践26年のプロセスとセミナーの意義」

③円卓トーク「ご近所福祉を描く」

＊地域の事例をもとに、ささえあう仕組みを考え、そして描く

4. 調査研究活動　　テーマ『私にとって“福祉”とは何か　その意識と実態調査』の実施

＊ねらい：

「静岡福祉文化を考える会」は，この 24 年間「静岡発　福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに，その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組んでいる。 また，その分析結果を，県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し，世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし，県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

これまでの調査研究活動を振り返ると

- 平成 09 年度　①「共働きに関する調査」
- 平成 10 年度　②「私たちにとって，地域とは何かーその 1－意識と事態調査」
- 平成 11 年度　③「私たちにとって，家族とは何か調査」
- 平成 12 年度　④「父親に関する調査」
- 平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」
- 平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」
- 平成 16 年度　⑧「地域とは何かーその 2－意識と事態調査」
- 平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
- 平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
- 平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい，その意識と実態に関する調査」（静岡県共同募金会助成事業）
  ⑬「日常生活と福祉情報に関する意識調査」（静岡県委託事業）
- 平成 21 年度　⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 平成 22 年度　⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く　生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る調査」（静岡県委託事業）
- 平成 23 年度　⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 平成 24 年度　⑰「家族ってなに　その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 平成 25 年度　⑱「長寿者とつながる　ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 平成 26 年度　⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 平成 27 年度　⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 平成 28 年度　㉑「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 平成 29 年度　㉒「居場所ってなに　その意識と実態調査」

- 平成 30 年度 ㉓「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(単純集計)
- 令和元年度 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」
  (静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 令和元年度 ㉔「256 名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか」
  (静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 令和2年度 ㉕「ご近所福祉その意識と実態調査」

と,「25のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた. 通算 26 回目となる今年度は, 活動テーマ:「地域を家庭化する"ご近所福祉"を創る支え合いを探る」に基づき、「私にとって"福祉"とは何か その意識と実態調査」に取り組む。

a 調査項目は, (1)基本属性 (2)生活状況 (3)家庭・家族/地域に関すること (4)福祉に関する意識に関すること (5) 福祉に関する実態に関すること (6)福祉社会への期待 (7)自由意見 (提言)の7項目とする. 細部は「調査部会」で具体化する.

b 調査の展開:(1)調査実施期間(8 月～9 月), (2)入力期間(10 月～11 月), (3)分析・考察(12 月～1 月), (4)公表(3 月)を予定

c 対 象 静岡県内に居住する県民 10代以上 200 名

d 回収目標 150 名程度

e 調査依頼／配布方法 会員(現在 21 名), 地域実践者 関係団体, 企業

(2)「共創社会実現研究会」の設置と運営

①設置目的

「活動テーマ」をもとに、県内実践活動者を中心に「共創社会研究会」(外部から3名委嘱・4回程度開催)を設置し、実践活動からご近所福祉について、広く意見を求め、具体的な課題を基に、これからの地域づくりへの提言をまとめる。

また、「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用とともに、活用方法について研究協議をする。

②議論した内容をもとに「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き書」としてまとめ、関係機関・団体(県地域福祉課、県地域振興課、コミュニティづくり推進協議会、県社会福祉協議会)、学校等に配布。マスコミ等への情報提供を通じて、広く県民に広報啓発をする。

(3)「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き書」の作成

①仕様 A4版 単色 80P内 200部

②作成過程 本会委員会及び「共創社会実現研究会」の設置、「焼津福祉文化共創研究会」との協働により、5月から 11 月まで研究協議を継続し、その後編集執筆作業に入る。

③配布領域 学校、地域実践領域、学童保育、社会教育、さわやかクラブ、コミュニティ実践団体等

5. 広報・啓発活動

(1)「機関紙発行計画」に基づき『OUR LIFE』の発行

＊年5回 A4版 4ページ構成 上質紙印刷 500部発行

＊「地方発福祉文化の創造」論議や実践活動を会員及び関係方面に具体的に情報発信する。

各号共通記事「編集後記」「ご近所福祉コーナー」「「事務局日誌拝見」

- 第 134 号(05/15) 『25 年の節目から、新たな静岡発福祉文化の創造を探る』

- 第 135 号(07/15)『地域を家庭化する“ご近所福祉”』
- 第 136 号(09/15)『若者発　ご近所福祉かるたの原点と地域総合型学習』
- 第 137 号(12/15)『福祉文化が根ずく地域社会とは　第20回セミナーを終えて』
- 第 138 号(03/15)『26 年間の福祉文化実践のプロセス』

(2)　日本福祉文化学会 HP と本会ブログのリンクによる「地方発　福祉文化の創造」の発信

(3)　「焼津福祉文化共創研究会」ブログとの連動による「福祉文化の創造」の発信

(4)　マスコミ，関係機関・団体への情報提供

6．実践活動「若者発　ご近所福祉かるた」の積極的・有効的活用で「ご近所福祉」の検証

7 年間の県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」から浮き彫りになった“ご近所福祉の再構築”を若者の視点から論議を深め，提言された読み札を精査し，「若者発“居場所”あり方研究会」の全面的な支援のもとに「かるた」の創作に取り組み，平成 27 年度に「若者発　ご近所福祉かるた」を 100 セット作成し6年目を迎えた。 また平成 28 年度に作成した「若者発　ご近所福祉かるた　拡大版」2 セットを有効活用して5年目。 幼児から大人まで，身近な地域の実践活動の場や行事の中で，「地域総合型学習」として楽しみながら活用し，安心して暮らし合う生活圏域づくりをめざす。

会員をはじめ，関係機関・団体との「協働」による状況把握をはじめ、これまでに個人、地域実践者、施設・グループ・サロン等に配布・設置した 100 セットの「かるた」の活用状況を把握し，これまでの「ご近所福祉」を検証し，さらに、かるた活用範囲を広げ、地域社会に課題提起をしていく。

7．現場視察研修

県内の「ご近所のささえあい活動」の実践活動地域を訪問検証し，これからの地域社会づくりへの提言につなげる。

8．コミュニティ組織との連携

コミュニティ組織との連携に努め，「ご近所」について，広く地域住民の意見を把握することに努める。

9．関係・団体との協働・連携

(1)静岡県社会福祉協議会及び市町社協との連携（情報提供）

(2)静岡県コミュニティづくり推進協議会との連携（情報提供）

(3)あしたの日本を創る協会への情報提供

(4)日本福祉文化学会への情報提供

(5)関連大学・専門学校への情報提供

(6)静岡市ボランティア連絡協議会との連絡調整

(7)ふじのくに未来財団との連携

(8)県内外の関連研究会等と「近助」に関する情報共有

(9)福祉コミュニティ組織における実践的取り組みをしている地域の把握と情報交換

(10)「若者発　ご近所福祉かるた」「拡大かるた」設置団体等との日常的連携（施設，NPO 法人，V グループ）

(11)「焼津福祉文化共創研究会」による、小地域福祉活動との連携による「近助」の取り組みの現場に学ぶ実践活動を県域に共有していく

４．調査実施要項及び調査票

●2020年度「静岡福祉文化を考える会」「焼津福祉文化共創研究会」協働調査研究事業

人・家族・地域がつながり合う、これからの“福祉力”を探る

ご近所福祉その意識と実態調査実施要項

１．調査の目的

「静岡福祉文化を考える会」では、結成以来、２４年間「静岡発　福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

これまでの調査研究活動を振り返ると、

※平成　９年度　①「共働きに関する調査」
※平成 10 年度　②「私たちにとって、地域とは何かーその１－意識と実態調査」
※平成 11 年度　③「私たちにとって家族とはなにか調査」
※平成 12 年度　④「父親に関する調査」
※平成 13 年度　⑤「ボランティア活動実践者意識調査」
※平成 14 年度　⑥「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
※平成 15 年度　⑦「青少年の生きがいに関する調査」
※平成 16 年度　⑧「地域とはなにか―その２－意識と実態調査」
※平成 17 年度　⑨「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
※平成 18 年度　⑩「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
※平成 19 年度　⑪「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
※平成 20 年度　⑫「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査（県共同募金会助成事業）
　　⑬「日常生活と福祉情報に関する調査」（静岡県委託事業）
※平成 21 年度　⑭「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 22 年度　⑮「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く　生活圏域における支え合いとは
　　なにか本音に迫る調査」（静岡県委託事業）
※平成 23 年度　⑯「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 24 年度　⑰「家族ってなに　その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 25 年度　⑱「長寿者とつながる　ホッとするご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 26 年度　⑲「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
※平成 27 年度　⑳「若者の地域参加その意識と実態調査」
※平成 28 年度　㉑「ご近所福祉　その意識と実態調査」
※平成 29 年度　㉒「居場所ってなに　その意識と実態調査」

※平成 30 年度　㉓「子どもを育む地域づくり　その意識と実態調査①」
※平成 31 年度　㉔「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査②」
「256 名の子どもたちに聞きました　ホッとする地域ですか調査」
と、「２４のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

今回の調査研究活動は、厳しいコロナ禍を契機に、これまでのご近所の支え合いから、これからの支え合いについて、本会が取り組む全県域と「焼津福祉文化共創研究会」が取り組む、焼津港地域管内の地域性を基に、住民の意識と実態を把握し、これからの「ご近所福祉」のあり方について、住民主体に、調査個票の作成検討をはじめ、調査依頼・回収、データ入力・考察等本調査研究活動に積極的に参画・協力により、これからの地域の課題改善・解決に向けた研究活動として取り組む。

２．実施主体　静岡福祉文化を考える会
３．協働団体　焼津福祉文化共創研究会

４．対　　象　静岡県内の２０代以上の方々を対象に、年代・世代・領域等を考慮して、約３００名程度の回収を目標に実施

５．調査依頼／配布方法
（１）会員中心に１００枚
（２）企業、福祉団体、福祉施設等への依頼　１００枚
（３）地域実践者には、本会より直接郵送等で依頼　１００枚　　計３００枚

６．調査項目

(1)基本属性(1)
(2)地域との関わりの意識(2.3.4.5.6.7)
(3)地域との関わりの実態(8.9.10.11.12.13.14)
(4)地域参加の動向(15.16.17.18.19.20.21.22)
(5)地域環境(23.24.25.26.27.28)
(6)提　言(自由意見)(29)

7．調査展開

(1)調査項目・調査票検討　6月～9月　定例会・委員会及び調査研究会等で検討
(2)調査票まとめ　9月12日
(3)調査依頼(実施期間)　10 月　1日～11 月 10 日　※調査時点 10 月 1 日
(4)回収期間　10 月　1日～11 月 10 日
(5)入力期間　10 月 20 日～12 月 10 日
(6)分析・考察　12 月 10 日～ 1月 20 日　定例会・委員会及び調査研究部会で実施
(7)公表・報告　令和３年　２月下旬
①本会研修会及び関係機関・団体等の各種研修会で経過報告実施
②本会機関誌「OUR LIFE」で随時経過・概要を紹介

８．問い合わせ・送付先

〒425-0041　焼津市石津 751-1　静岡福祉文化を考える会　平　田　　厚
TEL＆FAX 054-624-192　携帯 090-4861-4547　E-mail monogusa-tomy@theia.ocn.ne.jp

2020 年度「静岡福祉文化を考える会」調査研究活動事業

人・家族・地域がつながり合うーこれからの“福祉力”を探る

ご近所福祉その意識と実態調査票

調査にご協力いただく皆様へ

「静岡福祉文化を考える会」は、平成8年9月に、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のため「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力、広く市民に拓かれた公開型活動による市民性を高める努力、既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をめざして、結成し、今日まで25年間活動に取り組んでいる市民団体です。

結成以来、「調査研究活動」を重視し地域課題を掘り起し提言をしてきました。 今年度（2020 年度）は、厳しいコロナ禍の中、これまでのご近所の支え合いから、これからのご近所福祉のあり方について、「焼津福祉文化共創研究会」（2019 年度結成・会員 13 名）と協働で、「ご近所福祉その意識と実態調査」を皆様のご支援ご協力をいただき実施することとなりました。

どうぞよろしくお願いします。

＊各調査項目について，特に，指定がなければ，該当する番号一つに〇を付けてください。

＊指定のある場合は，指定内の選択でお答え下さい。

設問１　あなたの属性について、該当する番号に〇をつけて下さい。

問１　性別　①男性、②女性

問２　年齢　①20代　②30代　③40代　④50代　⑤60代　⑥70代　⑦80代以上

問３　結婚歴　①既婚　　②未婚　③その他（　　）

問４　あなたの職業（所属群）は、次のどれにあたりますか。

①学生 ②会社員 ③公務員 ④自営業 ⑤団体職員 ⑥自由業 ⑦主婦　⑧パート・フリーター

⑨無職　⑩その他（　　）

問５　あなたの居住形態をお答え下さい。

①持ち家　②借家　③杜宅・官舎 ④その他（　　）

問６　あなたは、今の地域に住んで何年になりますか。

①1 年未満　②５年未満　③10 年未満　④15 年未満　⑤20 年未満　⑥25 年未満　⑦30 年以上

問７　あなたのお住まいは、どの地域ですか。　①東部地域　　②中部地域　　③西部地域

問８　あなたの地域は、次のどの地域形態にありますか。

①街部　②新興住宅地　③農村部　④海浜部　⑤その他（　　）　⑥山間部

問９　あなたの 現在の家族構成をお答え下さい。

①父母や孫が同居する家族　②親と子どもだけの家族　③夫婦だけの家族　④一人暮らし（未婚）

⑤一人暮らし（配偶者との死別、離別、別居）　⑥その他（　　）

設問２　あなたは、自分の住んでいる地域の人々との交流について、どのようにお考えですか。主な

ものを１つお答え下さい。

①地域の人々との交流は大切である　②地域の人々との交流はどちらかといえば大切である
③あまり大切だとは思わない　　④まったく大切だとは思わない

設問３　あなたの地域は「一人でも安心して暮らせる地域である」と思いますか。

①強くそう思っている　　②少しはそう思っている　　③あまりそう思ってはいない
④まったくそう思ってはいない　　⑤わからない

設問４　あなたは、ご近所づきあいについてどのようにお考えですか。主なものを１つお答え下さい。

①ご近所づきあいは、緊急時の助け合いのためにも、日頃から積極的にした方がよいと考えている
②向こう三軒両隣程度のご近所付き合いはした方がよいと考えている
③隣近所のことはあまり干渉しないで、付き合いはほどほどが良いと考えている
④隣近所とは関わりをもたない方が良いと考えている
⑤特に考えていない

設問５　あなたは、“超高齢社会”の今日の「生活の支え」について、あなたの考えにもっとも近いものを１つお答え下さい。

①自分自身での支え　②家族の支え　③地域社会での支え　④その他（　　）⑤わからない

設問６　あなたは、「地域活動」参加協力の呼びかけがあったとき参加しますか。

①積極的に参加をする　　②呼びかけがあれば参加する　　③あまり関心がない　④参加しない

設問７　設問６で「①積極的に参加をする ②呼びかけがあれば参加する」と回答された方にお伺いします。　主な活動内容を２つまでお答え下さい。

①子育てや子どもの見守り　②高齢者や障害者への支援　③健康づくりや生きがいづくり　④介護者や介護を必要とする方への支援　⑤自治会・町内会等運営の参画　⑥防災・防犯等生活安全に関する活動 ⑦スポーツ・文化・レクリエーション等の活動　⑧世代を超えた交流活動　⑨青少年健全育成活動　⑩その他（　　）　⑪特になし

設問８　あなたの近所づきあいの満足度についてお答え下さい。

①満足している　　②まあまあ満足している　　③あまり満足していない　　④満足していない

設問９　あなたは、ご近所に親しくしていて行き来する家がありますか。

①多くある　　②何軒かある　　③１軒くらいはある　　④まったくない

設問 10　あなたは、ご近所の人とどのようなお付き合いをされていますか。　主なものを１つお答え下さい。

①個人的なことを相談し合える人がいる　　②差しさわりのないことなら話せる人がいる
③道で会えば、挨拶する程度の人はいる　　④ほとんど近所づきあいをしない

設問11　あなたは、毎日の暮らしの中で困った時、誰に相談しますか。主なものを２つまでお答え下さい。

①家族　②近所の人　③医師･保健師　④親戚関係　⑤友人･知人　⑥自治会･町内会関係者
⑦相談する人がいない ⑧誰にも相談したくない ⑨民生委員児童委員　⑩社会福祉協議会
⑪地域包括支援センター ⑫ その他（　　）

設問12　あなたの日常における生活情報源は何ですか。主なものを２つまでお答え下さい。

①家族　②友人･知人　③ラジオ･テレビ　④インターネット　⑤新聞　⑥行政広報誌　⑦回覧板
⑧学校 ⑨生活情報誌　⑩社会教育施設（公民館だより等）　⑪自治会･町内会発行広報誌　⑫所属団体広報誌等 ⑬口コミ　⑭福祉施設団体　⑮スーパー等の掲示板　⑯各種企業チラシ･資料･広

報紙　⑰その他(　　)

設問 13　あなたは、地域の役員等に推薦されたとき、どうされますか。

①推薦に応じる　②推薦に応じない　③その他(　　)　④わからない

設問 14　設問 13 で「 ②推薦に応じない　③その他」と回答された方にお伺いします。主な理由を２つまでお答え下さい。

①自信がない　②仕事がある　③家庭がある　④責任のある地位につくのは煩わしい
⑤その他（　　）

設問 15　あなたの地域には、ふれあい交流をする機会はありますか。

①地区の行事を計画的に立てて、積極的に持っている　②不定期であるが、たまに交流することもある　③あまり集まることもない　④ほとんどふれあう機会はない　⑤わからない

設問 16　あなたの地域において、地区住民が進んで集まり、ひと時を過ごす「居場所」として取り組まれているものはありますか。

①ある　②ない　③わからない

設問 17　設問 16 で「①ある」と回答された方にお伺いします。　主なものを１つお答え下さい。

①食事会　②お茶会　③コミュニテイカフェ(居場所)　④いこいの広場(語らいの広場)
⑤趣味仲間の集まり　⑥パソコン教室(学習教室)　⑦その他(　　)

設問 18　あなたの地域では、「コロナ禍」を契機に、地域の見守り活動や居場所等、地域ぐるみの取り組みについて 話し合う機会はありますか。

①全体的な話し合いの場を持った　②動きはある　③今のところない　④わからない

設問 19　あなたは, 地域の行事や活動に参加していますか。

①積極的に参加している　②時々参加している　③ほとんど参加していない

設問 20　設問 19 で「①積極的に参加している」「②時々参加している」と答えた人に伺います。あなたが、主に「参加している内容」を２つまでお答え下さい。

①清掃活動 ②地域の祭り ③ＰＴＡ・子ども会活動　④防災訓練　⑤スポーツ関連行事 ⑥文化関連行事　⑦奉仕活動　⑧交通安全活動　⑨自治会・町内会活動　⑩その他(　　)

設問 21　設問 19 で「③ほとんど参加していない」と答えた人に、主な理由を２つまでお答え下さい。

①時間がない　②興味がわかない　③自分に合った活動がない　④健康でない
⑤費用が掛かる　⑥近くに活動がない　⑦　情報が入らない　⑧一緒に活動する人がいな
⑨参加のきっかけがない　⑩参加したいと思わない　⑪その他（　　）

設問 22 あなたは, ともに助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすくなると思いますか。主なものを２つまでお答え下さい。

①地域が抱えている課題の情報が提供されていること　②一緒に活動する人（仲間）がいること
③個々人が気軽に参加できる活動の機会があること ④団体や活動に関する情報が入手しやすいこと　⑤長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること⑥ボランティア休暇など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること ⑦退職などにより、時間的なゆとりが出来ること　⑧公共的な

活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること　⑨どんな環境でも活動したいとは思わない　⑩その他（　　）

設問 23　あなたの地域には、地域活動をする活動拠点はありますか。

①ある　　②ない　　③わからない

設問 24　設問 23 で「①ある」と回答された方にお聞きします。　　主なものを１つお答え下さい。

①公民館　②公会堂 ③集会所 ④企業が地域に開放した施設　⑤個人宅解放の場所 ⑥神社 ⑦お寺　⑧教会　⑨コミュニテイセンター　⑩その他（　　）

設問 25　あなたの地域のコミュニティについて、あなたは、どのようにお考えですか。

①潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割をもっている　②生活を営む上で必要は感じていない ③今後、ますますその役割は薄れてくる ④よくわからない ⑤その他(　　)

設問 26　あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はありますか。

①地域が一体となって積極的に取り組んでいる　②ある程度地域住民が取り組んでいる　③どちらかというと消極的な取組みである　④ほとんど活動はしていない　⑤わからない

設問 27　今後、あなたの地域において、困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、主なものを３つまでお答え下さい。

①見守り・声かけ(安否確認)　②移動支援　③同行（買い物・通院等）支援　④配食　⑤子育て支援　⑥ゴミ出し　⑦調理　⑧定期的なふれあいサロン(居場所)　⑨掃除（草取り）　⑩災害時の手助け　⑪話し相手　⑫趣味･特技の援助　⑬簡単な介助･介護　⑭洗濯　⑮小動物の世話　⑯お墓の掃除　⑰簡単な修理　⑱その他（　　）

設問 28　あなたの地域において、災害等の対応として、日頃から、地域のささえあい・助け合いの取り組みとして、大切なことは何ですか。　　主なものを２つまでお答え下さい。

①日頃からの挨拶・声掛け等近所付き合い　②日頃から各種会合や防災訓練に参加　③地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有　④地域と行政・福祉団体等との協働における支援体制の構築　⑤要支援者への災害等情報伝達体制の構築　⑥災害時等に対応できる有資格・技能者の把握(地域を総合的にコーディネート出来る人財確保と活動助成支援)　⑦災害及び地域ボランティアの育成(研修)　⑧企業・学校・地域社会での「福祉教育」　⑨行政・福祉団体の主導的地域との関わり　⑩その他（　　）

設問 29　「人・家族・地域がつながり合う　これからのご近所のあり方」について、あなたの意見を箇条書にお願いします。

1. 2.

ご協力ありがとうございました。

Life・Culture & Welfare
地域から発信　福祉を文化へ

Our Life 129 号

静岡福祉文化を考える会
代表　平田　厚
〒424-0841　静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884
編集委員
藤下品子　古屋貴彦　河野惠介　平田厚

＊内容＊

➢ 2020 年度本会活動は“ご近所福祉”の再構築で地域づくり　２５年目の節目にトライ　……P.1
➢ 2018―2019 年度 ２年間の取組み「子どもを育む地域づくり」検証報告から　…… P.3
➢ 「焼津福祉文化共創研究会」結成１年目の成果　「集まる居場所検証」から見えたものは…… P.4
➢ 第２回公開型研修会のご案内／事務局日誌拝見 ……P.4

2020年度、本会活動は「“ご近所福祉”の再構築で地域づくり」
第1回公開型研修会は中止　25年目の節目にトライ!

いよいよ、本会は、２５年目の節目に入る活動となる。「静岡発　福祉文化の創造」を発信し、この２４年間の福祉文化実践活動をさらに継続しようとスタートに立った。　４月１９日は、会員全体会を含めた「公開型研修会」として、２月初旬から準備し、３月中旬までに会員他７０名程の県民に研修会の案内状を発送した。

４月１７日、県総合社会福祉会館管理室より、１８日以降の会館の使用は難しいとの連絡を受けた。予め、参加申し込みをしていただいた方々には、諸般の事情により、研修会を中止し、後日、第１回研修会の関連資料を送付する旨を伝えた。研修会の開催が出来ないのは残念ではあるが、一日も早く、正常な生活になることを願うばかりである。今年度は、本会役員改選の時期でもある。　また、今こそ福祉文化の時代を構築しなければならないが、本会のような「志縁組織」は、少しずつ会員減少傾向にある。これまで、「地縁組織」が地域を創ることが当たり前となっていたが、こうした認識がだんだん普遍化し、一人一人の意識は個人志向化傾向に来ていることも伺える。　改めて、「福祉文化の創造」に向けた、諸活動に積極的に取り組む一年間としたい。　４月１９日に開催する予定であった「第１回 静岡福祉文化を考える会 公開型研修会 」は、研修テーマをつなぐご近所の再構築」として、「近助」とは何かを探ることとした。研修参加者のご近所を語り合いながら、　望ましいこれからのご近所を参加者同士で描いていこうとした。

●着眼項目は、⑴「静岡発　福祉文化の創造」２４年間のプロセス重視学習を検証する場　⑵ 世代を超えて、身近な生活圏域の課題解決に向けた議論（「生活会議」）をする場　⑶「今、あらためて、ご近所福祉その意識と実態」を語る場　⑷「私のご近所を診断、私が創る、ご近所福祉これまでとこれから」を語る場　　を掲げていた。

２５年の節目を迎えた本会の３つの活動基調を、今一度、ここで共有していきたい。＊第一「専門性と市民性の融合の関わり」　＊第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」　＊第三「課題解決の向けたプロセス重視」である。この「３つの活動基調」をもとに、２４年間、一貫して福祉文化実践活動を常に「３つの柱立て」をもとに展開していることも、重ねて再確認をしていきたい。

＊第１の柱立て「啓発学習事業」➪「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をして「地域総合型啓発学習」に取り組んできた。＊第２の柱立て「調査研究事業」➪この２４年間、一貫して、その時代の社会問題を検証する目的で、２４種類の調査を県民の協力をもとに取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習を通じて、課題解決に向けた議論を深め合ってきた。＊第３の柱立て「実践地区活動事業」➪広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開しながら、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

本会のこれまでのプロセス重視から、令和２年度の本会活動テーマを「つながるご近所の再構築の決め手は―

Life・Culture & Welfare
地域から発信　福祉を文化へ

Our Life 130 号

静岡福祉文化を考える会
代表　平田　厚
〒424-0841　静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884
編集委員
藤下品子　古屋貴彦　河野惠介　平田厚

＊内容＊

- 基礎構造改革から今　改めて、地域のニーズ把握を基に 25 年目の福祉文化実践を検証　…P.1
- 厳しい地域社会を見据えて　第１回から第２回公開型研修会を展開する　……P.2
- 第２５回調査活動は「ご近所福祉その意識と実態調査」を‘協働’で取り組む……P.3
- 学会全国大会・静岡大会から始まった「福祉文化研究セミナー」は 19 回目を迎える
- 「事務局日誌拝見」「編集後記」　……P.4

「基礎構造改革」から今　・・・・・・・・・・・・・

改めて、地域のニーズ把握を基に、25年目の福祉文化実践を検証

マスコミからは、「ウイズコロナ」「アフターコロナ」「ポストコロナ」「新しい生活様式」非対面社会」等が伝わってくる。これからの地域社会はどのように変わっていくのだろうかと気になるところである。

新型コロナウイルス感染拡大防止徹底の状況下で、気がつくと、令和２年度は、早や３カ月（1/4）が経過した。　本会も、これまでの活動を停止させることなく、大きく変わることが予測される、次なるステップを真剣に練っている。本会の「活動目的」と「活動基調」を基に今年度の計画をいかに具現化し「地域課題の把握」をし、浮き彫りになった課題をいかに改善・解決するための取組みを「協働」で展開できる努力をしていきたい。

左図のように、これまでも、本会の活動は、「２４年間継続的に取り組んできた調査研究活動」、今年度は「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組む。５年ごとに「ご近所」に焦点を合わせた調査結果を考察する。「地域総合型学習」は、本会の福祉文化実践活動から生み出した言葉。結成以来今日まで、特別な講師を招かず、参加者主体、世代を超えた「公開型研修会」により、調査結果や、参加者からの地域発の意見をもとに、議論を深め合う。さらに、「現場検証研修の機会を持つ」努力もしてきた。

本会は、年間活動テーマ「つながるご近所の再構築　決め手は一体何か―ご近所福祉の復活―」に取り組む。

平成９年代（１９９７年）に「社会福祉基礎構造改革」が、私たちの目の前に示された。

社会福祉基礎構造の抜本的改革の方向性として「７つ」示された。まず、「サービスの利用者と提供者の対等な関係の確立」「個人の多様な需要への地域での総合的な支援」「幅広い需要に応える多様な主体の参入促進」「信頼と納得が得られるサービスの質と効率性の向上」「情報公開等による事業運営の透明性の確保」「増大する費用の公平かつ公正な負担」と掲げられていた。驚くことに、７つ目の改革の方向性として「住民の積極的な参加による**福祉文化の創造**」が行政言葉として取り上げられていたことである。私たちは今でも、**「福祉文化の創造」**こそは、住民一人一人のめざす言葉として大切にしたいところである。　あの時、あと３年後には、福祉は聖域ではなくなる。制度による仕組みで、地域の問題は全て解決されるとも認識した。あの時代、尊い在宅福祉を担っていた「ボランティア」の皆さんが「もう、私たちは要がなくなった」と訴えていた。いっぺんに「共助の社会」が大きく変わり、「ボランティア活動」の認識も希薄化してきているようにも感じられる。　「介護の社会化」・・・・「介護保険制度」の誕生から２０年間、節目ごとに、制度改正が行われ、今、私たちの周辺では、「協議体」「生活支援コーデイネーター」［地域の支えあい］「支えあいの仕組みづくり」「生活支援」と数々の福祉用語が、十分に住民に理解されないままに、地域単位で、意図的な組織づくりが進められている。

25 年目の節目を迎えている本会は、「福祉文化の創造とは何か」を常に探求する実践活動を展開したい。

Life ・Culture & Welfare
地域から発信　福祉を文化へ

Our Life 131 号

静岡福祉文化を考える会
代表　平田　厚
〒424-0841　静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884
編集委員
藤下品子　古屋貴彦　河野惠介　平田厚

＊内　容＊

➢ 「日本福祉文化学会」発‘静岡発福祉文化の創造’の誕生と「福祉文化研究セミナー」　…P.1
➢ 第 19 回静岡県福祉文化研究セミナーは「学会中部東海ブロック研修会」を兼ねて開催　…P.3
➢ 「ご近所福祉その意識と実態調査」準備作業始動　……P.3
➢ 「みずほ教育福祉財団」助成決定　プロジェクター機器で研修効果さらに高める　……P.4
➢ 「本会ブログ立ち上げ」「編集後記」　……P.4

「日本福祉文化学会」発‘静岡発 福祉文化の創造’誕生
１９年間つないできた「福祉文化研究セミナー」の意味は

今こそ、この厳しい社会の中で求められる「地方発 福祉文化の創造」。本会が結成して２５年。そして、「第 13 回日本福祉文化学会全国大会静岡大会＆静岡県福祉文化研究セミナー:大会テーマ　富士山麓いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」から今年で１９年目を迎えた。　昨年、中部東海ブロックでは２回目の学会大会が、愛知県名古屋市の中京大学名古屋キャンパスで「第 30 回東海大会：テーマ 名古屋発“福祉文化元年”を築く～今こそ、人を育てる、アートを創る～」が開催された。全国大会を開催するにあたり、「全国大会」後、いかにして「地方発福祉文化の創造」による地域づくりを継続していくことが出来るかを念頭に議論を積み重ねている。　改めて、本号で、「静岡福祉文化を考える会」の誕生から、今日までの動きを振り返ってみる。　1989 年７月、日本福祉文化学会が設立。その６年後、阪神淡路大震災１年後「第１１回学会現場セミナー」を静岡県浜松市で２日間にわたり開催した。開催直後、セミナーに関わった若者層中心に「静岡福祉文化を考える会」（当時、男性 39 名,女性 23 名　計６２名、現在、男性 15 名,女性６名　計 21 名）が誕生。　活動６年目の 2000 年「第 11 回学会全国大会（仏教大学）」において、２年後の「第 13 回全国大会は静岡県」の開催が決定した。「静岡福祉文化を考える会」中心に、「静岡大会」をいかに実現するかを県内外に大会参加協力を呼びかけ、早速に「実行委員会」（42 名）を組織化した。参画した意欲的な実行委員の提案により、「第 13 回学会大会静岡大会プレイベント：富士山麓 21 世紀　福祉文化の今とこれから」（県民 350 名参加　写真左参照）開催が実現し、静岡県民への「地方発　福祉文化の創造」の啓発活動により、本大会につなげるプロセスがあった。実行委員会では、大会テーマ決定、会場の選定等相当議論を深め合った。静岡県なら「富士山」の麓を会場にしよう、住民主体に運営できる会場、より多くの市民参加につなげるには、行政や社協の全面的な協力が不可欠である等の意見を基に、公共施設の開放を呼びかけた。今日でいう「協働」による開催実現へのレールが着実に敷かれた。

Life ・Culture & Welfare
地域から発信　福祉を文化へ

Our Life 132 号

静岡福祉文化を考える会
代表　平田　厚
〒424-0841　静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884
編集委員
藤下品子　古屋貴彦　河野惠介　平田厚

＊内容＊

➢ 第１３回日本福祉文化学会静岡大会から、１９年間の「福祉文化研究セミナー」の道程　…P.1
➢ 日本福祉文化学会 HP とリンクした「本会ブログ」のアクセス急増　……P.3
➢ 「ご近所福祉その意識と実態調査票」７５３枚回収、ここから何が見えるか……P.3
➢ 「第３回公開型研修会開催案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」……P.4

第１３回日本福祉文化学会静岡大会から、１９年間の「福祉文化研究セミナー」の道程

2020年度は「日本福祉文化学会中部東海ブロック研修会」と共に“ホッとする、ご近所のささえあいは誰が創る？”を語り合う

「“ホッとする、ご近所のささえあいは誰が創る？”」をテーマに、人々がささえあいながら，住み慣れた地域で暮らし合う地域環境をいかにして創り出すか，地域の現状をしっかりと把握しながら，「共助」による福祉コミュニティ構築に向け，　改めて、「福祉を文化にする、静岡発福祉文化の創造」（豊かに暮らせる身近な地域づくりを日々努力する）の学び合いを、「第 19 回静岡県福祉文化研究セミナー」（「日本福祉文化学会中部東海ブロック研修会」）で１０月２５日（日）で議論し合った。
⑴「いま、なぜ、福祉文化か」その原点を学ぶ場 ⑵「静岡発　福祉文化の創造 １９年のセミナーの道程」を学ぶ場 ⑶「ご近所福祉その意識と実態調査研究活動」から学ぶ場 ⑷「コロナ禍後のご近所福祉」考える場 ⑸世代を超えて、楽しく地域づくりを語り合う環境（地域総合型学習）を実践する場の５つの着眼項目をこのセミナーで掲げ、日頃、地域で精力的に実践されている参加者は、その熱い思いを語り合った。
「プログラム」の展開では、

１．アイスブレーク:「“若者発 ご近所福祉かるた”活用した自己紹介」

⑴あらかじめ、配布した「かるた」（「読み札」と「絵札」）を確認。
⑵「名前」「住所」「居住年数」を紹介し、配布した「かるた」の内容に基づき、参加者のご近所について「ご近所福祉の捉え方」「ご近所の現状」「ご近所での実践活動」等を５分程度、自己紹介をご披露。

２．円卓トーク :「ご近所福祉に関わって一言」

⑴「アイスブレーク」の話題をさらに広げて、本音で語る。
⑵「若者発　ご近所福祉かるた」からご近所を語る。
⑶「ホッとする　こんなご近所福祉をめざす」決意表明を語る。

☆☆ご近所福祉調査の経過と参加者の意見を集約☆☆

上記の「１．アイスブレーク：“若者発 ご近所福祉かるた”を活用した自己紹介」「２．円卓トーク　ご近所福祉に関わって一言」のそれぞれから、参加者からの意見を次の２５の項目に集約した。
１．子どもを通じて地域とのつながりが出来るが、高齢者世帯や単身世帯

令和２年(2020年)６月２２日（月曜日）　静岡

「ご近所福祉」在り方は

清水区 考える会が研修会

「ご近所福祉」を議論した研修会
＝静岡市清水区のサロン「寄ってっ亭」

静岡福祉文化を考える会（平田厚代表）は21日、２０２０年度の第２回公開研修会を静岡市清水区追分のサロン「寄ってっ亭」で開いた。市内外から参加した10人が「ご近所福祉」をテーマに議論した。

平田代表は昨年度までの活動を振り返り、福祉文化の在り方や子どもを育む地域づくりの活動を報告した。

参加者全員によるワークショップでは「住民主体でこれからのご近所を創る」をテーマに議論を展開。参加者が暮らす地域の福祉力を「当事者力」「課題解決力」など6項目から評価して数値化し、地域の課題を確認した。

コロナ禍における福祉活動や福祉の在り方などを問う、本年度実施予定の意識調査の設問についても意見を交わした。

「子ども育む地域づくり」
課題解決へ報告書

福祉文化を考える会

静岡福祉文化を考える会（平田厚代表）はこのほど、「子どもを育む地域づくり」をテーマに2年間行った調査・研修活動の報告書を作成した。

提言では「積極的に地域に参加できるよう親が働き掛ける」「家庭の楽しい環境維持に努める」など、子どもを巻き込んだ地域社会をつくるための20の方法を示した。

同会は子どもの貧困や孤立化、虐待などに問題意識を持って活動を展開した。報告書では、回答した子どもの約半数が近所の人と「あいさつ程度」の付き合いという調査結果や、市民参加型の研修会で浮き彫りとなった課題の解決策などをまとめた。

平田代表は「子どもの生活環境を良好に保つには、住民一人一人が地域の中で問題解決に取り組むことが大切」と話した。

報告書を手にする平田厚代表＝25日午後、焼津市

こち女ボイス KOCHIJO VOICE

市民団体が県内の小学４～６年生約260人を対象に、近所の人との関わりについて調査したところ、「よく話す」が約２割、「あいさつ程度」が半数という結果が出ました。「親の近所付き合いの状況が、子どもに大きく影響しています」という団体代表の分析は、きっとその通りだと思います。

私が小学５、６年の頃、親の留守中に地震が起きたことがありました。急に心細くなり、妹２人を連れて数十㍍離れた近所の家を訪ね、親の帰りを待たせてもらいました。今思うと、親がそのお宅と交流があるのを子どもなりに理解し、とっさの時に「頼りにしていいおじさん、おばさん」と判断できたのでしょう。

そう考えると、自分が親になってからの近所付き合いはとても貧弱です。子どもはまだ小さいですが、小学生くらいになった時、近所に信頼できる大人を持つことができるのかー。それは親の私次第なのだと、団体の代表と話しあらためて自覚しました。

（大滝麻衣）

情報発信中！
twitter @ats_women
Facebook https://www.facebook.com/ats.women
LINE 静岡新聞こち女
http://www.at-s.com/news/women/

Life・Culture & Welfare

地域から発信　福祉を文化へ

静岡福祉文化を考える会

◇　静岡福祉文化を考える会事務局　◇

〒424-0841　静岡市清水区追分 3-5-17

NPO 法人泉の会内　静岡福祉文化を考える会

☎054-367-2878　fax054-367-2884

「静岡福祉文化を考える会」の誕生とこれまで

福祉の改善・改革を「文化」の視点から検討する目的で、「福祉の文化化」「文化の福祉化」を掲げ、地域社会の様々な領域から、理論と実践をもとに1989年「日本福祉文化学会」が設立され、全国各地の福祉現場の実践家と福祉系を中心とする大学等の研究者の強固なネットワークにより、2019年で３０年の節目を迎えた。

1996年３月、日本福祉文化学会から、「第11回日本福祉文化学会・公開型現場セミナー」を静岡県内で開催してほしい旨の要請を受け、10代から70代の約40名が実行委員会を結成し、企画運営、広報等多岐にわたり、セミナーの実現に向け準備に着手した。

静岡県浜松市で開催したセミナーの第１日目は、浜松こども園を会場に「福祉施設の現場実践に学ぶ」と題して、先駆的実践発表が紹介された。第２日目は，プレスタワーに会場を移し「基調講演」として、学会初代会長 一番ケ瀬康子氏が、阪神淡路大震災の政府復興委員の立場から、震災と福祉文化をもとに「２１世紀にむけて　福祉文化を拓く」を熱く語られた。そして「４つの分科会」では、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者・障害者の余暇文化」に参加者が熱心に議論を深めた。

フィナーレは、「静岡で語ろう、“福祉文化”を身近な地域から、自立と共生の２１世紀へ」を全国各地から参集された延べ400名が確認し合い閉会した。

この尊いセミナー実現のプロセスを「静岡発　福祉文化の創造」として形にしようと、1996年９月、ここに「静岡福祉文化を考える会」が阪神淡路大震災１年後に誕生した。

目　的

本会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力する。

活動基調

(1) さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
　＊「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力

(2) 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をする。
　＊「公開型研修会」で市民性を高める努力

(3) 既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をする。
　＊結成以来、「調査研究活動」を重視し地域課題を掘り起し、提言する努力

●大きな福祉文化の流れの中で、本会は「草創期」（会結成から実践活動６年間）、「協働期」（日本福祉文化学会静岡大会から６年間）、「実践融合期」（静岡県委託事業７年間）「共 創社会実現期」（現在まで）の４つの流れを歩み続け現在に至る。

「静岡福祉文化を考える会」のこれまでの活動を紹介します。

■年次別活動テーマ

1996 年度:結婚とは ➪ 1997 年度：共働き ➪ 1998 年度:地域とは① ➪ 1999 年度：家族とは ➪ 2000 年度：父親とは ➪ 2001 年度:ボランティア活動とは ➪ 2002 年度：働く人の暮らし ➪ 2003 年度:青年の生きがい ➪ 2004 年度：地域とは② ➪2005 年度：子どもと地域環境① ➪ 2006 年度：子どもと地域環境② ➪ 2007 年度:団塊の世代 ➪ 2008 年度：長寿者の自立 ➪ 2009 年度:長寿社会 ➪ 2010 年度：生活圏域の支えあい ➪ 2011 年度：生活圏域における一人一人の居場所を考える ➪ 2012 年度：家族ってなに一真の居場所を問う一 ➪ 2013 年度:ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり ➪ 2014 年度：人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり ➪ 2015 年度:静岡発、福祉文化の創造による豊かに暮らせる強い活圏域の地域づくり ➪ 2016 年度：静岡発、福祉文化の創造とご近所福祉 ➪ 2017 年度：集まる地域ぐるみの居場所を拓く ➪ 2018 年度：子どもを育む地域づくりとは ➪ 2019 年度:子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみの支えあいの仕組み ➪ 2020 年度:つながるご近所の再構築　決め手は一体何か－ご近所福祉の復活、「近助」とは何かを探る

◇その年度における［地域課題］を活動テーマとし、活動内容を組み立て、理論と実践の展開をもとに考察し、その都度、地域社会に課題提起を続けてきた。

■公開型研修会のこれまでの取組み

(1)合宿・現場セミナー　県内各地の社会教育施設を利用し、大学生や企業人、地域実践者等の参加をもとに、「朝まで生福祉」で大いに「福祉文化論議」で盛り上がる。主なテーマは「世の中どうなってるの？」「これでいいのか親子関係」「福祉の裏表」

(2)現場セミナー　「おもちゃ図書館」「障がい者の日々と介護」「地区社協とサロン活動」「介護体験から、利用者主体の施設づくりを考える」「言葉と文化/日本語を教える人々に学ぶ」等、県内各地に出向き、地域課題解決に取り組んでいる実践活動に学ぶ。

(3)ワークショップ　年次別活動テーマをもとに、参加者主体（結成以来、外部講師を招かない）で、理論と実践をもとにまなびあい、ワークショップにより研修を総括し、それぞれ参加者が地元で実践する展開を試みる。（年間　３回～６回開催）

(4)福祉文化研究セミナー　2002 年（平成１５年）に、「富士山麓、いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに「第 13 回日本福祉文化学会静岡大会」（裾野市・全国から 650 名参加）を契機に、「福祉文化の火」をいつまでも消さないようにと、今日まで「研究セミナー」として開催している。

■調査研究活動の取組み

本会結成以来、年次別活動テーマに基づき市民の視点で「調査内容」を組み立て、県域において実施し、草津結果を公表するとともに、課題提起をする。

■機関紙「OUR　LIFE」の発行

A４版　４ページ仕立て 年平均５回、毎回 200 部発行 県内関係機関・団体等に配布啓発に努める。

■協働による活動

「地区社協」「福祉団体」「福祉施設」「ボランティア団体」「市町社会福祉協議会」「大学」等と協働による活動を試みてきた。

これまでの福祉文化実践活動アルバム あれこれ

◇ ご一緒に「福祉文化活動」に参加しませんか ◇

○福祉・ボランティア活動に関心のある方は、ぜひご参加下さい。原則、国籍・年齢・職業等は問いません。

◇ 会費：社会人 3,000 円　大学生以下 1,000 円

◇ 郵便振り込み口座　　口座番号　００８８０－１－１１１１５１

名 義　静岡福祉文化を考える会　代表　平田　厚

入会ご希望の方は、下記の用紙にご記入の上、事務局までご連絡ください。

入　会　申　込　書

ふりがな 氏　名	性別（男・女）　　年代（10/20/30/40/50/60/70/80）
連絡先	〒　－ TEL　　fax E-mail
職　業	
●入会の動機、これからの活動に望むこと等ご自由にお書き下さい。	

静岡福祉文化を考える会規約

第1章　総則

第１条（名　称）この会は、静岡福祉文化を考える会と称します。

第２条（事務所）この会の事務所（連絡先）は「〒424-0841　静岡市清水区追分3丁目5-17 NPO 法人泉の会内」に置くこととします。

第2章　目的・事業・活動基調

第3条（目　的）この会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えその改善のために努力していくことを目的とします。

第4条（事業）この会は、前条の目的を達成するため、つぎの事業をおこないます。

① 情報交換活動
② 啓発・広報活動
③ 人的交流
④ 研究会・講演会・セミナーなどの開催
⑤ その他、この会の目的を達成するために必要な事業

第5条（活動基調）この会の活動は、つぎのような基調を守っていくこととします。

① さまざまな分野で活動する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ります。
② 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざします。
③ 既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切にし、つねに市民生活に密着した活動をめざします。

第3章　会　員

第6条（会員の資格）この会の目的に賛同し協力をする個人。
原則として国籍・年齢・職業等を問いません。

第7条（入会）会員になろうとする人は、所定の申し込み用紙によって手続きをすることとします。

第8条（会費）会員は、規約により会費を納入しなければなりません。
2.既納の会費は返済しません。

第９条（退会）会員は、いつでも役員会に通告し、退会することができます。
2.会費を1年以上滞納した人は、委員会において退会したものとしてみなすことができます。

第4章　機　関

第10条(役員)この会の役員は、代表1名、副代表1名、事務局長1名、事務局次長1名、委員、監事とします。

第11条(役員の選任)代表、副代表、事務局長、事務局次長、委員、監事は、会員の中から互選し、会員全体会の承認を受けます。

第12条(役員の任務)代表は、この会を代表して会務を総括します。

2.副代表は代表を補佐し、代表に支障が生じた場合には、の職務を代行します。

3.委員は、事業・研究・広報・会計・事務局事務などの会務を執行します。

第13条(役員の補充)役員が任期の途中で退任した場合には、委員会で補欠を選任することができます。

第14条(会員全体会)代表は、年1回は、会員の全体会を招集しなければなりません。

2.代表は、委員会が必要と認めたとき、または、会員の3分の1以上の請求があったときは、会員全体会を招集しなければなりません。

第15条(委員会)代表は、年4回程度、委員会を招集しなければなりません。

第16条(議　決)会員全体会の議事は、出席会員の過半数をもって決することします。

第5章　会　計

第17条(経費)この会の経費は、会費・寄付金・その他の収入をもってあてます。

第18条(会費)この会の会費は、「社会人　年間3000円」、「大学生以下年間1000円」とし、原則として1回払いとします。

第19条(決算)この会の決算は、委員会の議決を経たあと、会員全体会の承認を得てこれを決定します。

第20条(会計年度)この会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日をもって終わるものとします。

第6章　規約の改正

第21条(規約改正)この規約の改正は、会員全体会において出席会員の3分の2以上の賛成をえなければなりません。

附　則　平成8年9月1日施行

平成9年4月13日一部改定

平成18年4月30日一部改定

平成31年2月5日一部改定

これからの福祉を考えるネットサイト

QR コードから簡単にジャンプできます。 知識と知恵を身に付けましょう。

静岡福祉文化を考える会　２５周年記念 調査研究活動事業

つながるご近所の再構築　決め手は一体何か

ご近所福祉その意識と実態検証報告書

発　　行　静岡福祉文化を考える会

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17　NPO 法人泉の会内

Tel054-367-2878　　Fax: 054-367-2884

発 行 日　令和３年２月１４日

印 刷 所　大日三協株式会社

〒420-0922 静岡市葵区流通センター12-1

2021.2.14　　200 部

令和二年度　つながるご近所の再構築　決め手は一体誰か　ご近所福祉その意識と実態調査検証報告書

静岡福祉文化を考える会